

佐久市埋蔵文化財調査報告書第76集

周防畠遺跡群

南近津遺跡

長野県佐久市長土呂南近津遺跡発掘調査報告書

1999.3

株式会社アメックス
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書第76集

周防畠遺跡群

南近津遺跡

長野県佐久市長土呂南近津遺跡発掘調査報告書

1999.3

株式会社アメックス
佐久市教育委員会

南近津遺跡の調査について

南近津遺跡は佐久市大字長土呂字南近津に所在し、周防畠遺跡群の西南部に位置しています。遺跡の周辺には、芝宮遺跡群、西近津遺跡群などがある、南近津遺跡は佐久地方有数の遺跡密集地帯の中�습니다。特に古墳時代後期～平安時代の大規模な集落が数多く発見されています。今回の調査でも、今から1,300年程前の古墳時代の末から平安時代にかけての家の跡が35軒みつかりました。

今回の調査で注目されるのは、1片ではあるが古代の布目瓦が出土したことです。この瓦は、当時一般的に使用されたものではなく、特定の建物（たとえば、大きな寺院）に葺かれていたものです。佐久市近辺で該当しそうな特別な建物、文献に登場するもっとも古い寺院は、平安時代の「妙楽寺」という大寺院です。南近津遺跡から500mほど東方の周防畠遺跡群浄衛門遺跡でも、過去にいくつかの布目瓦が発見されています。

このようにわずか5cmの小さな破片であっても、周辺の遺跡の内容や古い文献資料などを考え合わせることによって、古代の佐久の歴史を解明する貴重な手がかりとなります。







1 H10号住居址検出状況（南方より）南壁直下に小形甕が埋められている



2 南壁直下に埋め込まれた小形甕に蓋をのせた状態で出土した



3 4の小形甕に須恵器蓋がしてある



4 埋め込まれた土師小形甕の出土状況



5 小形甕の口辺部が床面とほぼ水平に埋められている



6 小形甕の腹部に長さ2.5cm、幅0.8cmの穴がみられる



7 小形甕の器形は少し歪み須恵器蓋のつまみは宝珠形である

例　　言

1. 本書は、株式会社アメックが行う宅地造成工事に伴う発掘調査報告書である。試掘調査を実施し保護協議の結果、擁壁部分と道路部分の記録保存調査を行った。

2. 調査委託者 株式会社アメック

3. 調査受託者 長野県佐久市教育委員会

4. 遺跡名 周防畠遺跡群南近津遺跡 (NSC)

所在地 長野県佐久市大字長土呂字南近津1,163-6・1,163-46・1,163-53

5. 調査期間・面積

調査期間　試掘調査 1997年1月16・17日

発掘調査 1997年4月28日～7月18日

整理調査 1997年10月28日～1998年3月20日

1998年10月5日～1999年3月12日

調査面積 1,200m²

開発面積 2,020m²

6. 本書の編集・執筆は、佐々木宗昭・林幸彦が担当した。

報告書作成担当者 遺物復元 阿部和人 井出徳四郎 金森治代 小山正吉 小山澄江

桜井牧子 佐々木久子 佐々木正 島田幹子 土屋貞子

中島照夫 中島武三郎 新津幸雄 真嶋保子 増野深志

遺物実測 小林よしみ 佐藤志げ子

版下作成 今井勇一 岩崎重子 梅沢淳子 木内明美 小林よしみ

桜井牧子 佐藤志げ子 島田幹子 中島智広

7. 本書及び周防畠遺跡群南近津遺跡の関係資料は、佐久市教育委員会で保管している。

遺跡調査にあたり株式会社アメックには、ご理解とご協力を賜り厚くお礼を申し上げます。

凡　　例

1. 遺構の略号は次のとおりである。

竪穴住居址(H)、掘建柱建物址(F)、特殊遺構(I) 土坑(D)、溝(M)、Pit(P)

2. 掘図の縮尺は次のとおりである。

竪穴住居址—1/80 カマド—1/60 掘建柱建物址—1/100 特殊遺構 1/80 土坑 1/60

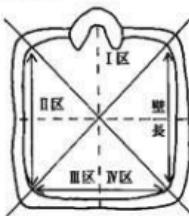
土器・石器—1/4 鉄器 1/3 他すべての掘図にスケールを示してある。

3. 遺構の海拔標高は、水系標高を「標高」として記した。

4. 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。

5. 調査区グリッドは公共座標に従い、間隔は 4×4 mに設定した。

6. 遺構規模の測定は、以下のようにした。



7. 掘図中のスクリーントーンは、以下のことを示す。

〈遺構〉	〈遺物〉(土器)
地山断面	黒色処理
床下埋土	灰釉範囲
焼土範囲	須恵器断面
粘土範囲	(石器)
柱痕	敲打面
	磨り面

目 次

卷頭図版 例言・凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査の経緯と経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 検出遺構と遺物の概要	2
第Ⅱ章 遺跡の基本層序	3

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 積穴住居址

(1) H1号住居址	5	(2) H2号住居址	8	(3) H3号住居址	9
(4) H4号住居址	12	(5) H5号住居址	15	(6) H6号住居址	18
(7) H7号住居址	20	(8) H8号住居址	21	(9) H9号住居址	23
(10) H10号住居址	27	(11) H11号住居址	29	(12) H12号住居址	29
(13) H13号住居址	31	(14) H14号住居址	32	(15) H15号住居址	34
(16) H16号住居址	35	(17) H17号住居址	35	(18) H18号住居址	37
(19) H19号住居址	40	(20) H20号住居址	42	(21) H21号住居址	44
(22) H22号住居址	46	(23) H23号住居址	47	(24) H24号住居址	49
(25) H25号住居址	51	(26) H26号住居址	53	(27) H27号住居址	58
(28) H28号住居址	59	(29) H29号住居址	61	(30) H30号住居址	63
(31) H31号住居址	64	(32) H32号住居址	67	(33) H33号住居址	67
(34) H34号住居址	68	(35) H35号住居址	69		

第2節 掘建柱建物址

(1) F1号掘建柱建物址	73	(2) F2号掘建柱建物址	73
(2) F3号掘建柱建物址	74		

第3節 土坑

(1) D1号土坑	75
-----------	----

第4節 特殊遺構

(1) T1号特殊遺構	76
-------------	----

第5節 溝状遺構

(1) M1号溝状遺構	77	(2) M2・3号溝状遺構	77
-------------	----	---------------	----

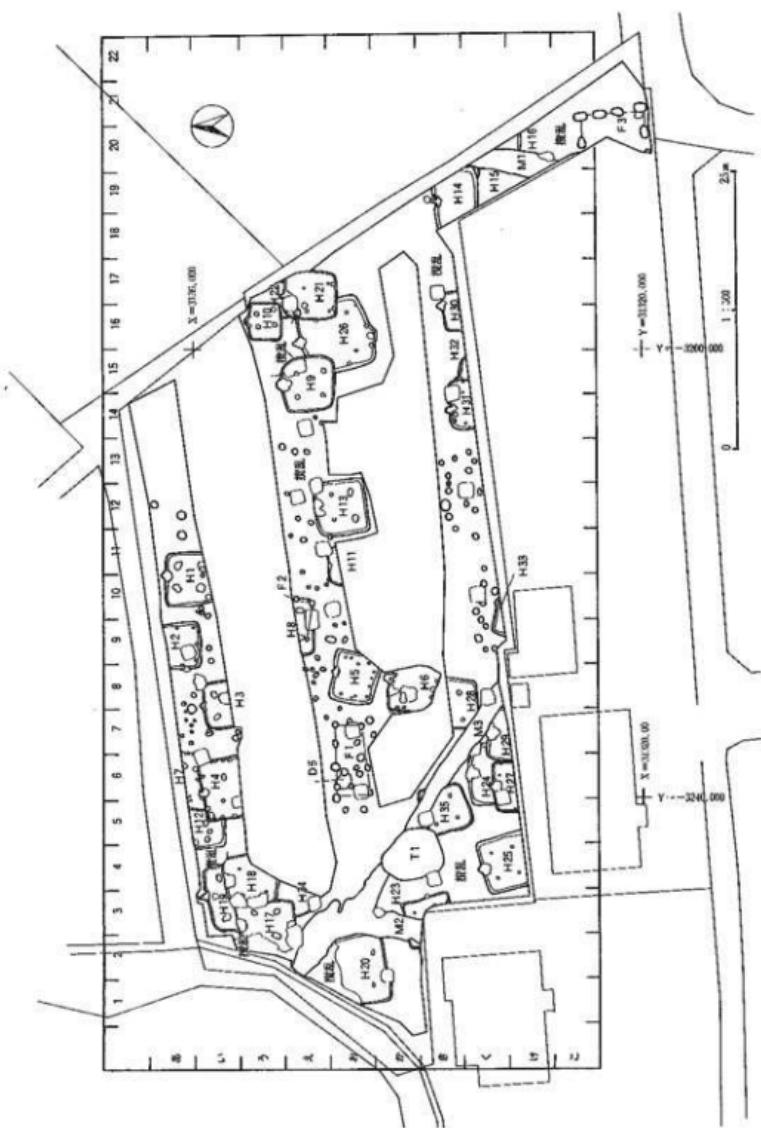
第6節 Pit群

Pit群	79
------	----

第7節 グリッド・表採遺物

グリッド・表採遺物	81
-----------	----

图 1 四 周村大街附近地质全图 (1 : 10,000)



第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査の経緯と経過

南近津遺跡は、周防畠遺跡群のほぼ中心に位置している。佐久市の北部には、浅間山から放射状にのびる特有の「田切り」地形が展開する。この細長い台地上には、多くの遺跡群が存在する。「田切り」を挟んだ西方には近津遺跡群、東方には芝宮遺跡群・長土呂遺跡群が存在する。高速道路へのアクセス線や国道141号バイパス沿線を中心として、最近の開発が集中している地域である。

本遺跡群では周防畠A遺跡、周防畠B遺跡、若宮遺跡Ⅰ・Ⅱの発掘調査が行われており、弥生時代後期～平安時代の竪穴住居址、掘建柱建物址、円形周溝墓、甕棺墓等が調査されている。

昨年、株式会社アメックの宅地造成計画に伴い試掘調査を実施し、14軒の竪穴住居址が確認された。協議の結果、開発対象地の擁壁・道路部分の記録保存を、平成9年度に行うことになった。

発掘調査は株式会社アメックから委託された佐久市教育委員会が実施した。



第2図 周防畠遺跡群南近津遺跡位置図 (1:10,000)

第2節 調査体制

佐久市教育委員会

教育長 依田 英夫

教育次長 北沢 騰

埋蔵文化財課

課長 須江 仁胤（管理係長兼務）

埋蔵文化財係長 萩原 一馬

埋蔵文化財課係 林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司、小林 真寿 羽毛田 卓也、

富沢 一明、上原 学

調査担当者 林 幸彦、佐々木 宗昭

調査員

阿部 和人、井出 徳四郎、今井 勇一、岩崎 重子、梅沢 淳子、
金森 治代、木内 明美、小林 よしみ、小山 正吉、小山 澄江、
桜井 牧子、佐々木 久子、佐々木 正、佐藤 志げ子、島田 幹子、
土屋 貞子、中島 武三郎、中島 照夫、中島 智広、新津 幸雄、
真嶋 保子、増野 深志、渡邊 久美子

第3節 検出遺構と遺物の概要

検出遺構

竪穴住居址	35軒	古墳時代後期後半	14軒
		奈 良 時 代	10軒
		平 安 時 代	7軒
	不	明	4軒

掘建柱建物址 3棟

特 殊 遺 構 1基

土 坑 1基 弥生時代後期

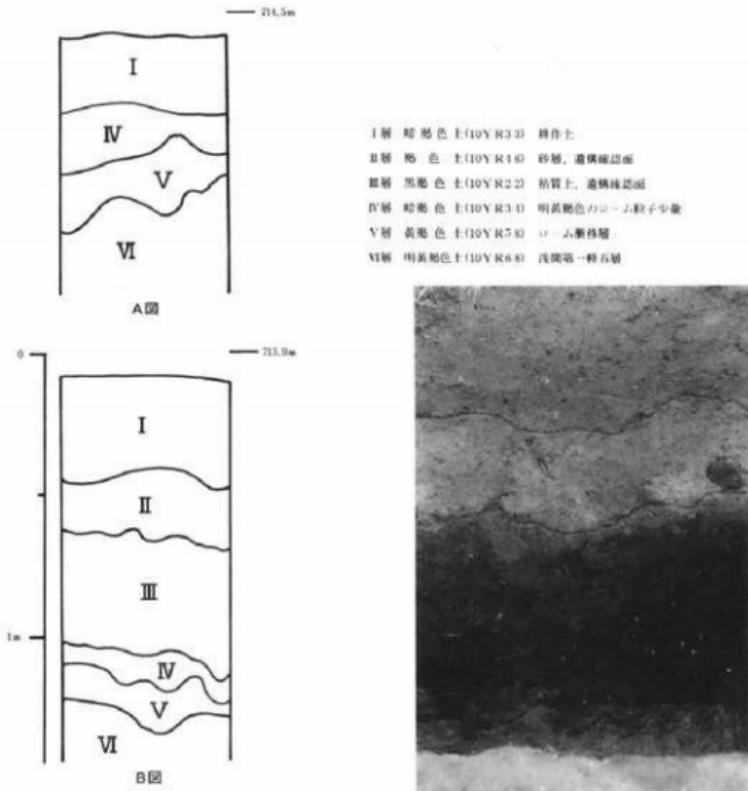
溝 状 遺 構 3条

出土遺物

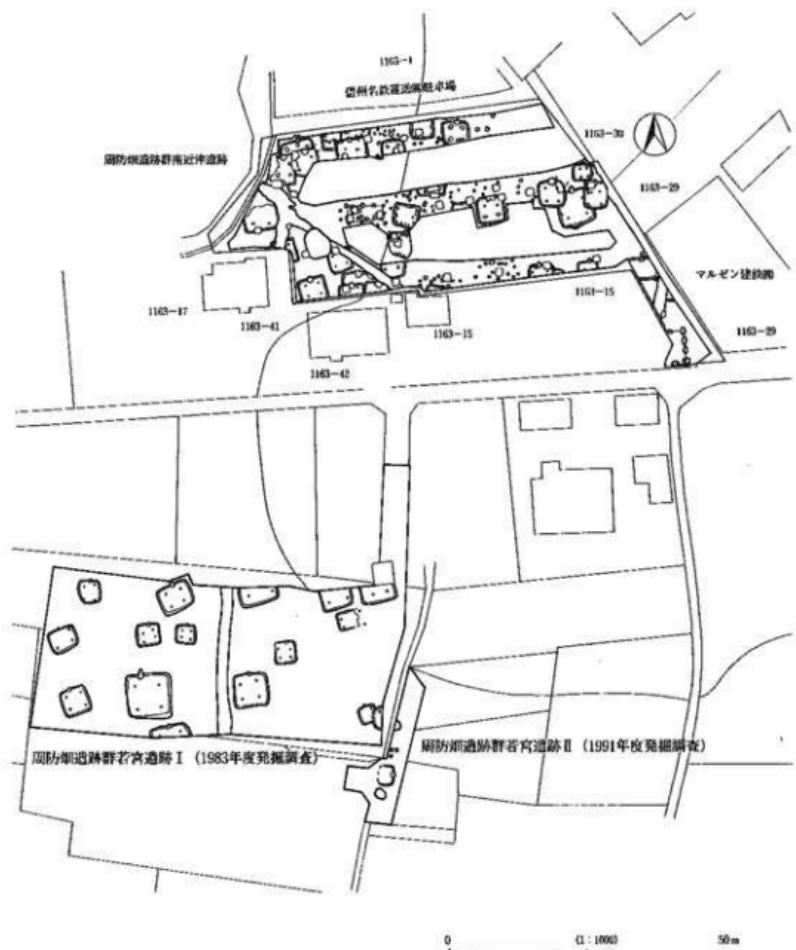
弥生土器、土師器、須恵器、鉄製品、石器

第Ⅱ章 遺跡の基本層序

本遺跡の基本層序は、南北で相違がある。B地点（B図一け6グリッド）では、7層に分層できた。調査対象地の中央部から南西にむけてIV層堆積後に低地が形成されていたとみられ、III層は低地に堆積した黒色土で、流水による砂層のII層が上層にみられる。I層は耕作土、II層・III層が遺構確認面である。グリッドあ・い・う列以北、4列以西、18列以東には、ほとんどII・III層がみられない。IV層が遺構確認面である。（A図一き17グリッド）



第3図 南近津遺跡基本層序模式図



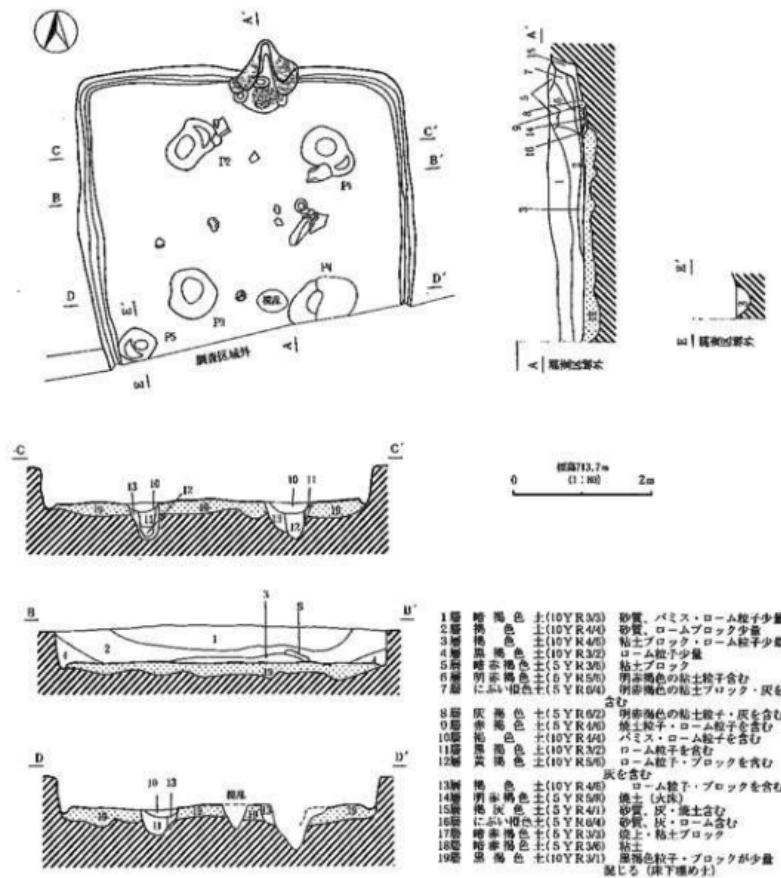
第4図 周防朝遺跡群南近津道路および若宮道路Ⅰ・若宮道路Ⅱ測定全体図

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 翹穴住居址

(1) H1号住居址

本住居址は、あ：い-10・11グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序のⅢ層である。



第5圖 日1号住居址実測図

遺構の南壁部は、調査区域外にのびる。

平面規模は、北壁4.6m・東壁検出長3.2m・西壁検出長4.2mを測り、平面形態は隅丸長方形を推定できる。確認面からの壁高は30~60cmを測る。

覆土は4層に分層され自然堆積状況を示す。

カマドを中心とする主軸方位は、N-2°-Wを示す。

ピットは4個検出されたP1~P4いずれも主柱穴と思われる。P1~P2の東西1辺が約2m、P2~P3の南北1辺が約1.2mを測る長方形に配されている。柱穴の規模は、径約40~70cm前後を測り、深さは約40~60cm前後である。P1・P2のピットからは柱底が確認でき、P1の柱底の径は28cm、P2の径は約24cmを測る。

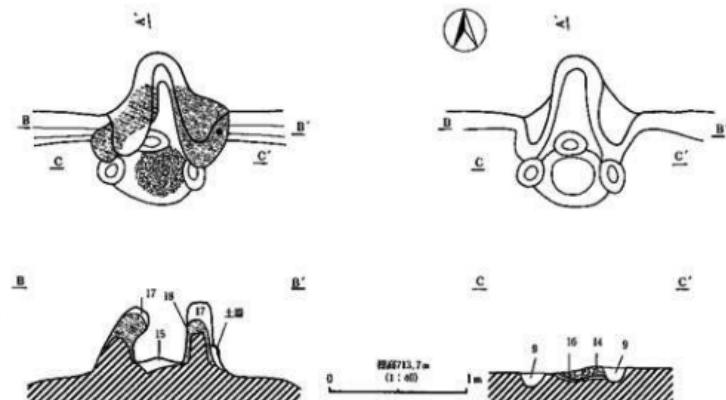
貼床が全面及んでいて、床面は堅く平坦であった。床下の掘り方は、約10~20cm前後を測り壁にかけて四方がやや深く掘り窪められている。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置されていた。両袖は地山を掘り残し、黒色の粘土で覆い構築されていた。両袖の前部にみられる小ピットは、芯材の礫を差し込んだ穴であろう。

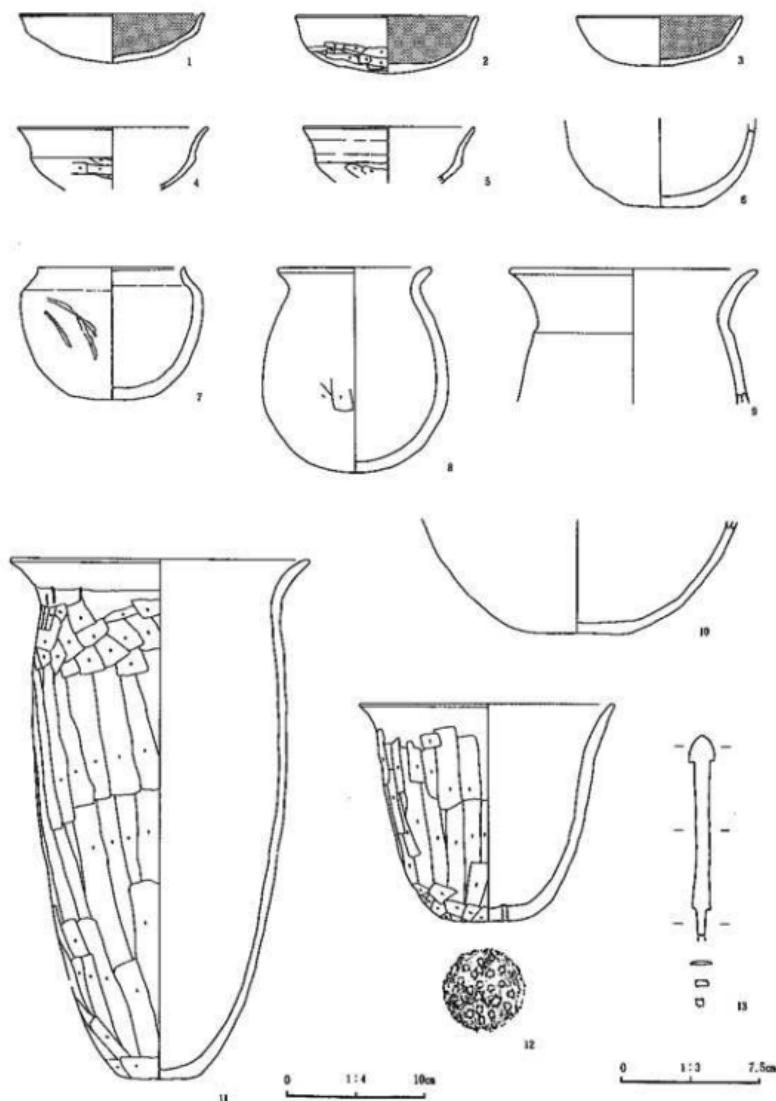
出土遺物には、土師器長胴甌・小形甌・壺・瓶、鐵錠などがある。(第7図) 図示できた遺物の多くは、中央部の床面または床面上から検出された。

7図-12の甌はP1・P4の中間からほぼ完形で出土した。13は、覆土内出土の長頸棘輪平造三角を呈する鐵錠で、長さ10.5cm、幅約1cmを測る。

本住居址は、7世紀後半に位置づけられよう。



第6図 H1号住居址カマド実測図



第7圖 H1號住居址出土遺物實測圖

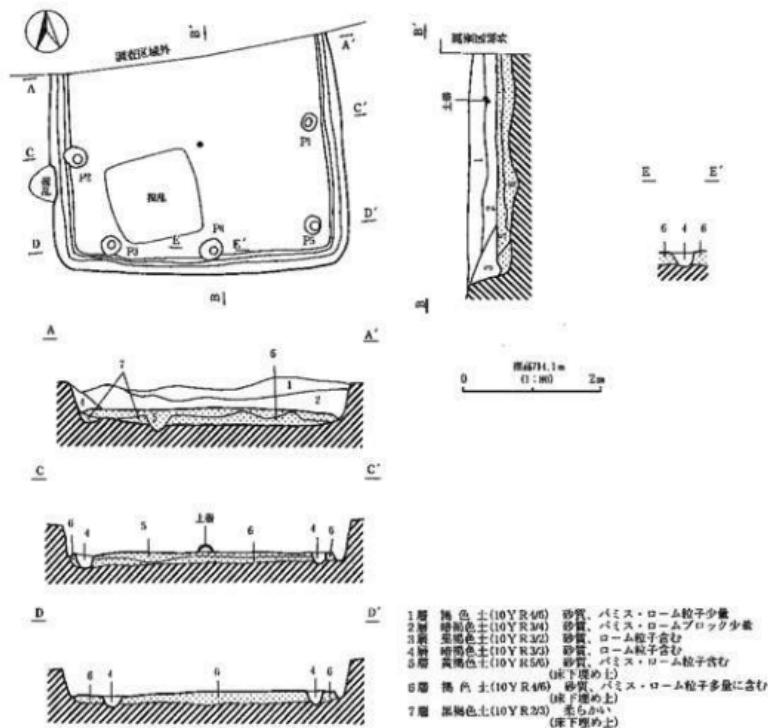
(2) H 2号住居址

本住居址は、あ・いー8・9グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序のⅡ層である。遺構の北側部は、調査区域外にのびる。

平面規模は、南壁4.0m・東壁検出長3.2m・西壁検出長2.7mを測り、平面形態は隅丸方形を推定できる。確認面からの壁高は40~60cmを測る。壁面は比較的なだらかな角度で床面に達している。

覆土は4層に分層され自然堆積状況を示す。主軸方位は、N-4°-Wを示す。

ピットは5個検出された。壁直下に掘られた壁溝に沿って南壁側から3個、東西の壁側から各1個が確認された。径はいずれも20cm前後をはかり、深さは16~20cmと浅い掘り込みである。



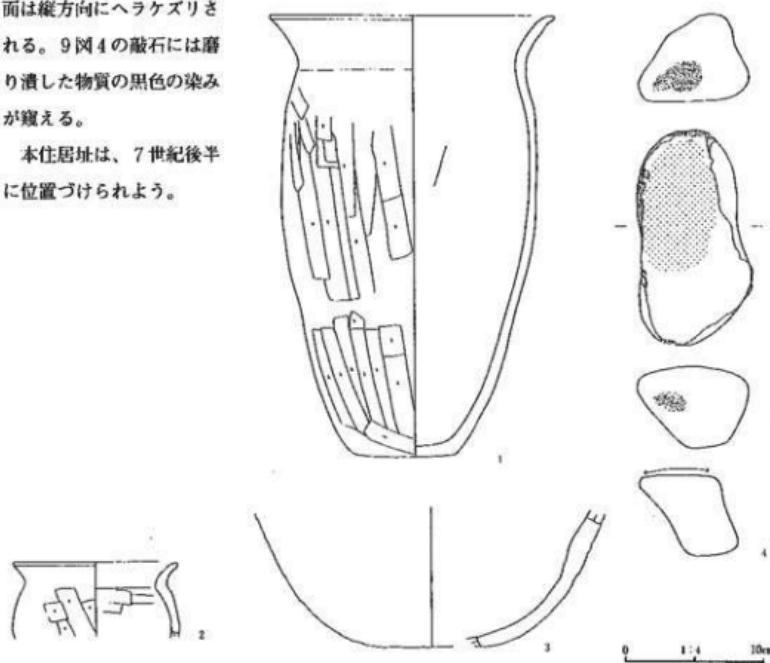
第8図 H 2号住居址実測図

貼床が全面及んでいて、床面は堅く平坦であった。床下の掘り方は、約10~30cm前後を測り、黄褐色土・褐色土・黒褐色土が埋められていた。

出土遺物は、土師器甕、礫石が図示できた。第9図1の長脛甕は住居址のほぼ中央部の床面直上から検出された。胴部外

面は縦方向にヘラケズリされる。9図4の礫石には磨り潰した物質の黒色の染みが窺える。

本住居址は、7世紀後半に位置づけられよう。



第9図 H2号住居址出土物実測図

(3) H3号住居址

本住居址は、いー7・8グリッドから検出された。造構確認面は全体層序のⅡ層である。造構の南側部は、調査区域外にのびる。また、東北のコーナーおよび造構の中央部付近は擾乱の影響を受け破壊されている。

平面規模は、北壁3.4m・東壁検出長1.2m・西壁検出長2.3mを測る。平面形態は隅丸長方形を推定できる。確認面からの壁高は20~70cmを測り、壁面は比較的なだらかな角度で床面に達している。

覆土は3層に分層され自然堆積状況を示す。主軸方位は、N-7°-Wを示す。

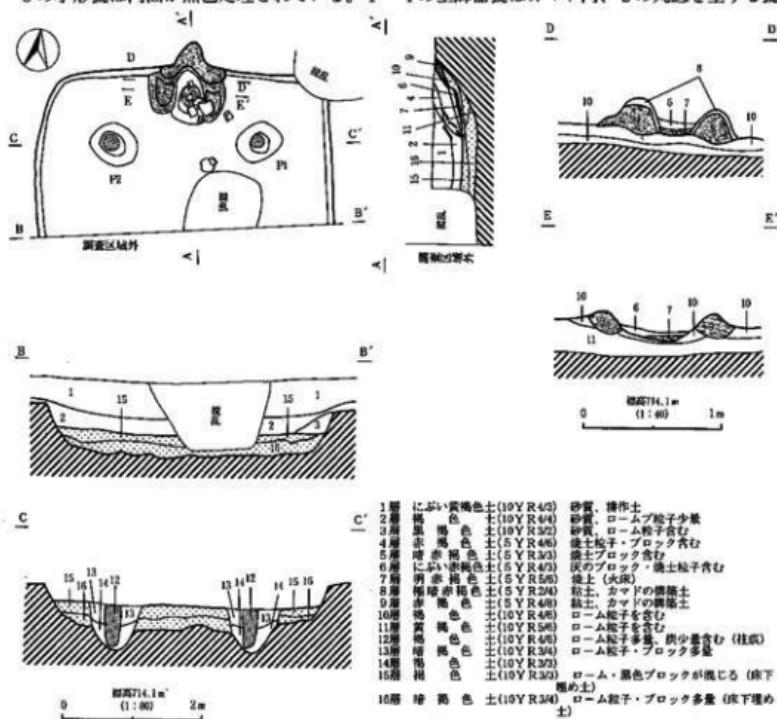
ピットは2個検出され、P1・P2のいずれも主柱穴と思われる。P1・P2とともに径約20cm、深さ約60cm前後の柱痕が確認された。柱穴の規模はともに径約70cm前後、深さは約60cm前後を測る。

床面は壁周辺部を除いて全体に堅く平坦であった。特にカマド周辺は堅緻であった。床面のはば中央は、攪乱の影響で破壊されている。床下の掘り方は、約20cm~40cmを測り、褐色土・暗褐色土が埋められていた。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。両袖は基部の残存状態から推し、第10・11層を船底型に掘り窪め、その基部より暗褐色の粘土を主体として構築されていた。

出土遺物には、第11図に示した土師器甕・小形甕・磨石などがある。

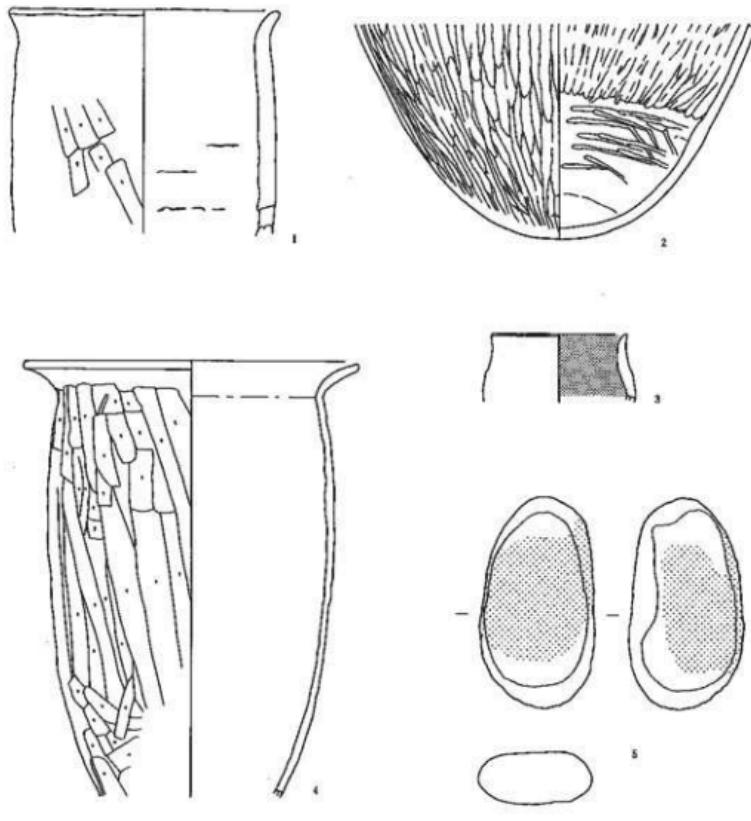
3の小形甕は内面が黒色処理されている。1・4の土師器甕はカマド内、2の丸底を呈する甕は



第10図 H3号住居址実測図

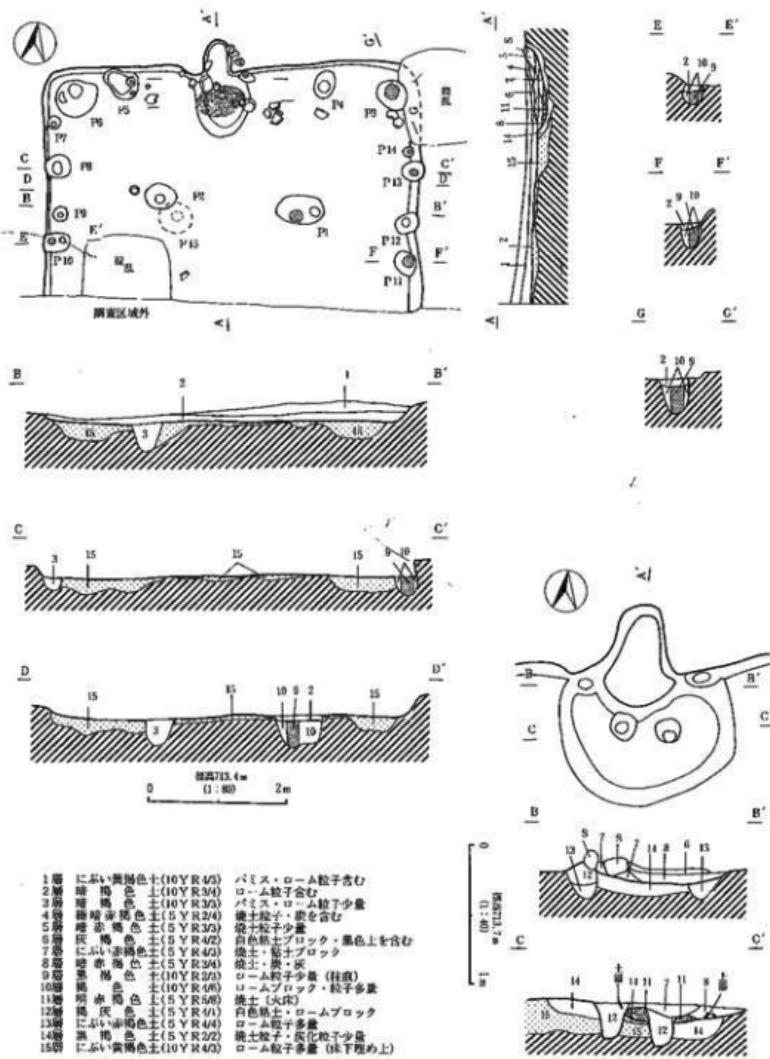
P 1 側の床面直上から出土し、3 の小形甕は覆土内から検出された。

本住居址は、7世紀末葉に位置づけられよう。



第11図 H 3号住居址出土遺物実測図

(4) H 4号住居址



第12圖 H 4 号住處址實測圖

本住居址は、いー5・6グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序のⅡ層・Ⅲ層である。遺構の南側部は、調査区域外にのびる。東北のコーナーは擾乱の影響を受け破壊されている。

平面規模は、北壁5.1m・東壁検出長2.4m・西壁検出長3.1mを測る。

西側が著しく削平されていて、確認面からの壁高は、西壁8cmと浅く、東壁は約20cmである。

覆土は2層に分層され自然堆積状況を示す。主軸方位は、N-8°-Wを示す。

ピットは14個検出され、P1・P2は主柱穴と思われ、径40-70cm、深さ30-50cmを測る。P3-P14のピットは壁直下・壁中にあって、ほぼ壁に沿って配されている。また、P1・P3・P10・P11・P13からは径8-12cm、深さ20-40cmの柱痕が確認された。

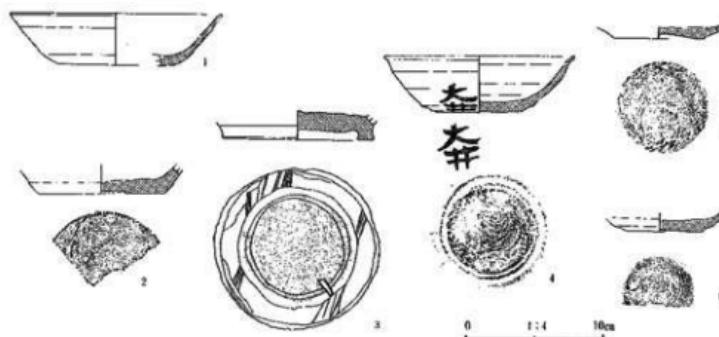
床面は堅く締まっており、床下の掘り方は、全体に約4cm前後に浅く掘り込まれている。しかし、四方は約20cm前後と深く掘られている。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。ほとんど原形をとどめていないが、角のある安山岩が煙道部・火床周辺に散乱しており、これらをカマド構築の芯材に用いたことが考えられる。また、第12図のカマド掘り方にみられる2個の小ピットは、支脚石を埋め込んだ穴とみられる。

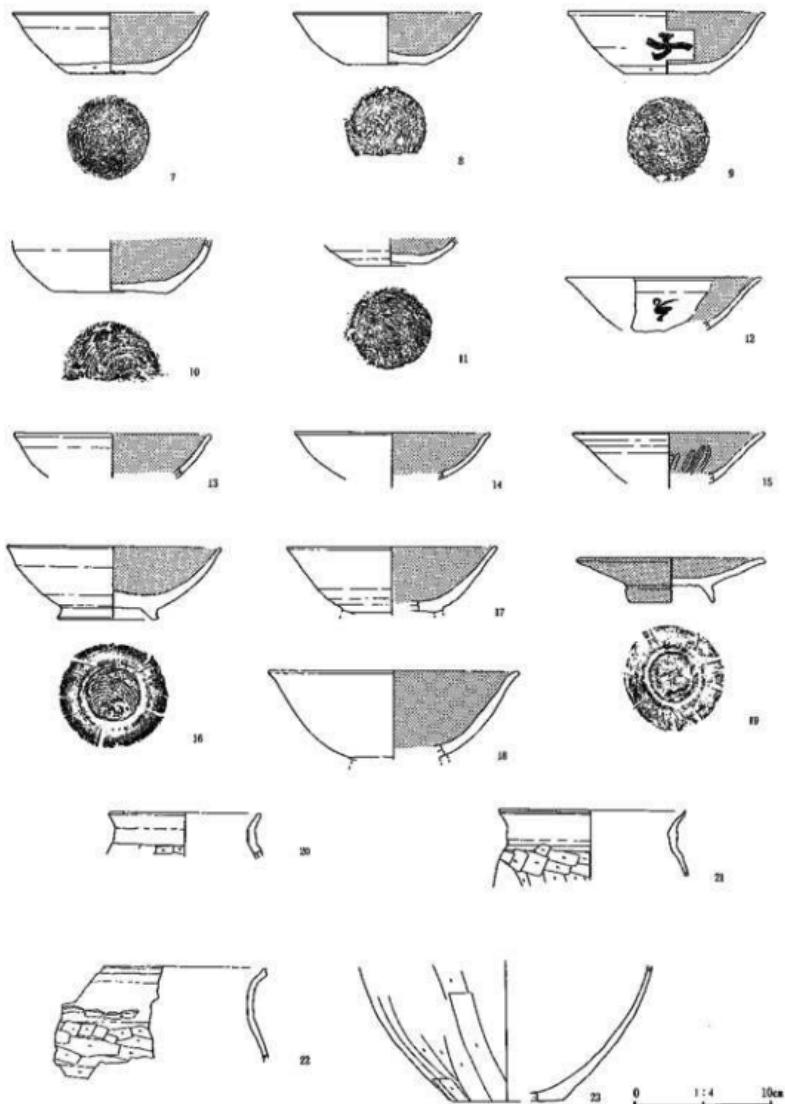
遺物は、須恵器壺・甕・転用硯、土師器甕、磨石、碁石状石製品が図示できた。

カマド西脇より13-1の須恵器壺、15-24の甕、15-25の長頸壺、14-9の土師器壺が出土した。カマド東脇より14-19の土師器高台付壺、そして、カマド内からは14-17・18の土師器高台付壺が検出され、東北コーナーの床面からは「大井」と墨書きされた須恵器壺(13-4)と14-16の土師器高台付壺が出土した。「子」などの墨書きもある。13-3の転用硯は、P10内から出土した。長頸壺の底部を覗く転用したもので、よく使い込まれている。黒墨が染み込んでいる。

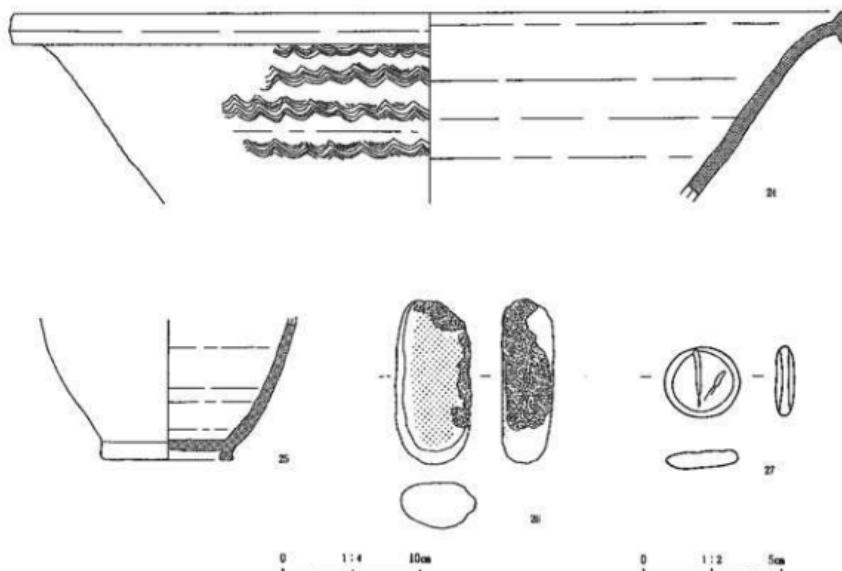
本住居址は、9世紀後半に位置づけられよう。



第13図 日4号住居址出土造物実測図



第14图 H4号住宅址出土遗物实测图



第15図 H4号住居址出土遺物実測図

(5) H5号住居址

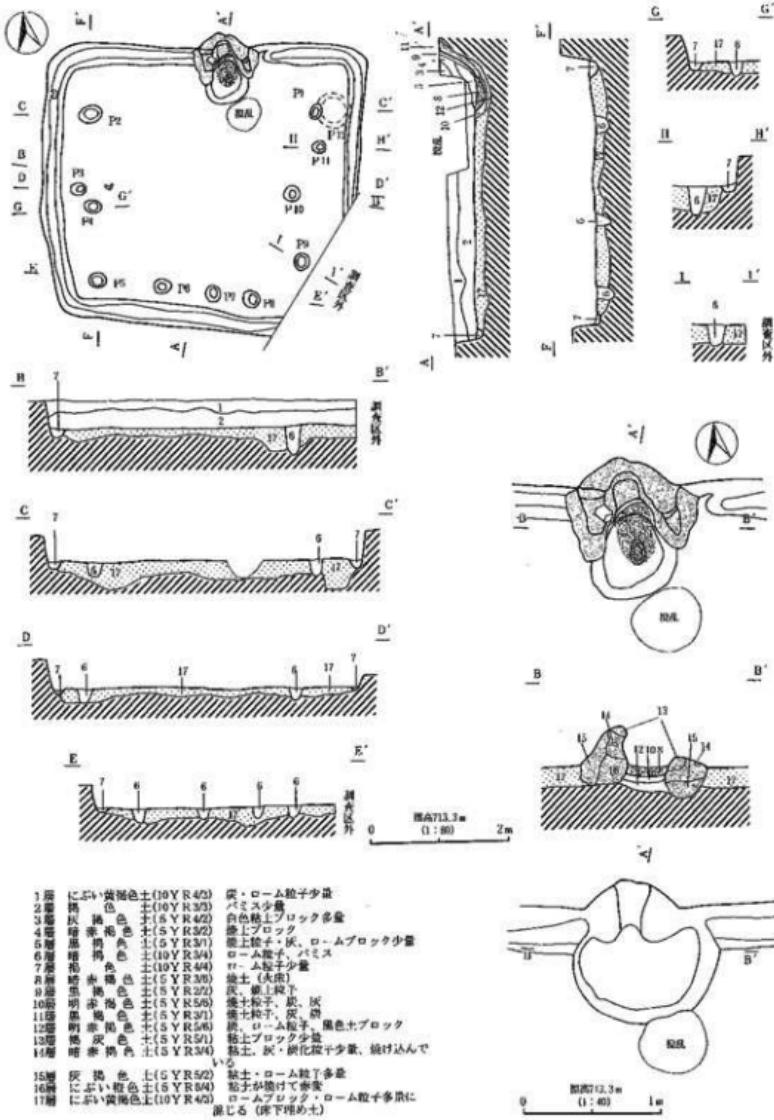
本住居址は、おー8・9グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序のⅡ層である。遺構の南東コーナー付近は、調査区域外にのびる。

平面規模は、北壁4.4m・西壁3.7m・南壁検出長3.1m・東壁検出長2.4mを測る。平面形態はやや東西に長い隅丸長方形を呈する。

壁高は、約20~50cmを測り、壁面は急な角度で立ち上がる。覆土は2層に分層され自然堆積状況を示す。主軸方位は、N-11°-Eを示す。

ピットは12個検出された。P1~P11は四方の壁に沿って配されており、径は12~20cm前後で、深さは20~40cmを測る。南壁部のP5~P8は規則的に配されている。P12は床下から検出された。

床面は堅く全体に平坦である。床下の掘り方は、約10~40cmを測り、全体的に中央部付近は浅く掘り込まれ、四方は深く掘り込んでいる。埋め土には、にぶい黄褐色土が使われている。



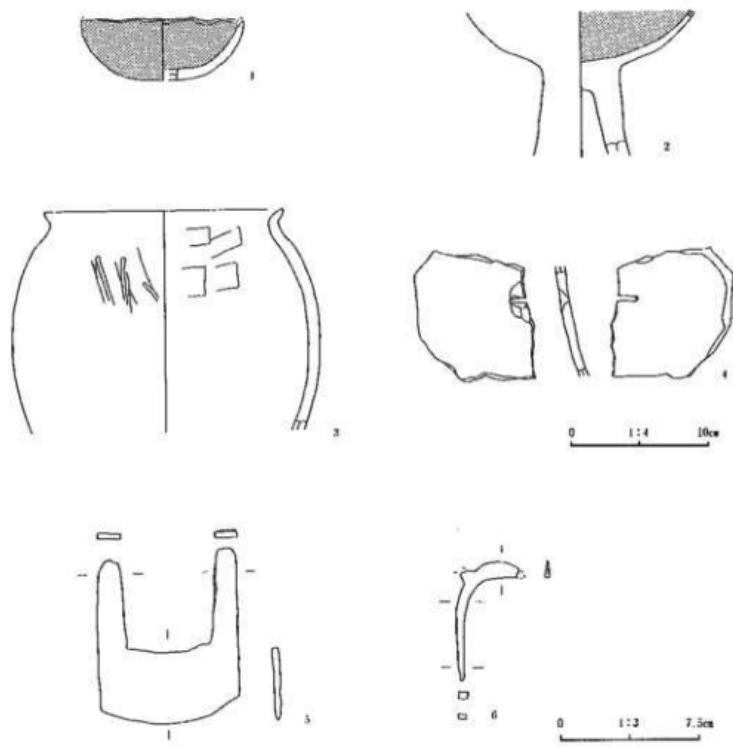
第16圖 H5號住處遺址實測圖

カマドは北壁の中央部に設置されていた。袖部には、角礫（安山岩）・土器片が埋め込まれており、これらを袖部の芯材に用い暗褐色の粘土で覆いカマドが構築されていたことが窺える。

遺物は、土師器壺・高壺・甕、鐵器、鐵鎌が図示できた。（第17図）

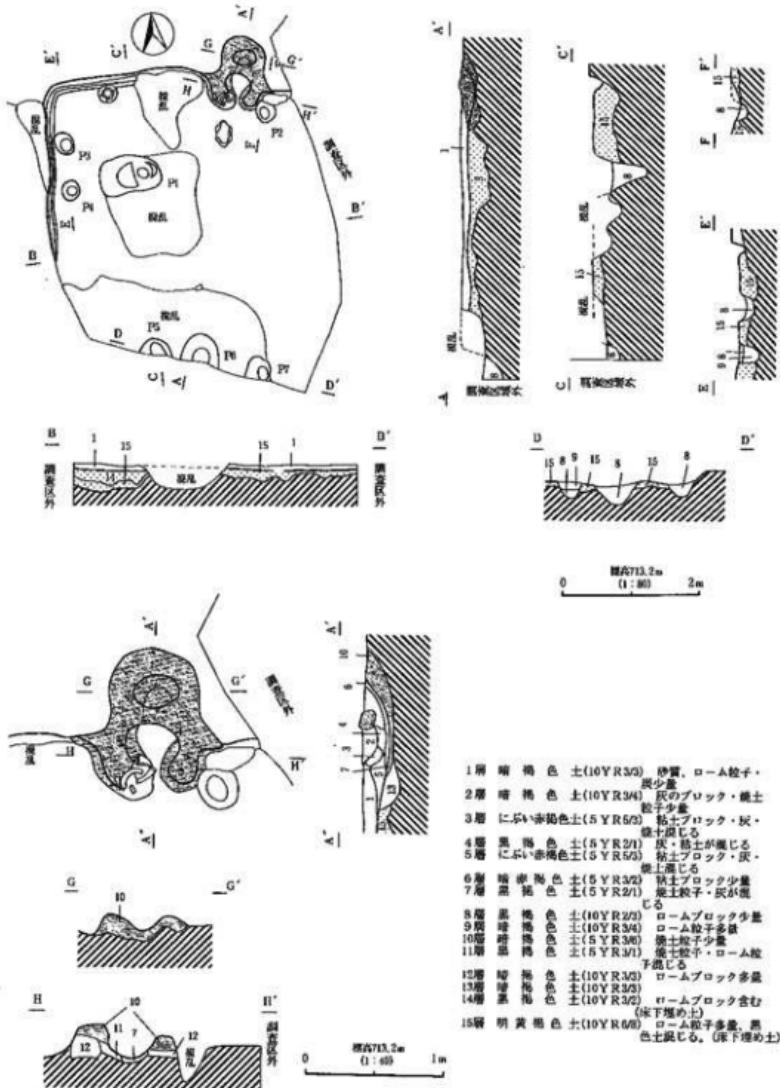
17-2の土師器高壺はカマド内、1の壺は床下より出土した。また、5の鎌先は西北コーナーから、6の異形雁股式の鐵鎌は西側の床面から出土した。

本住居址は、7世紀後半に位置づけられよう。



第17図 H 5号住居址出土遺物実測図

(6) H 6号住居址



第18図 H 6号住居址実測図

本住居址は、か・きー8グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序のⅡ層・Ⅲ層である。

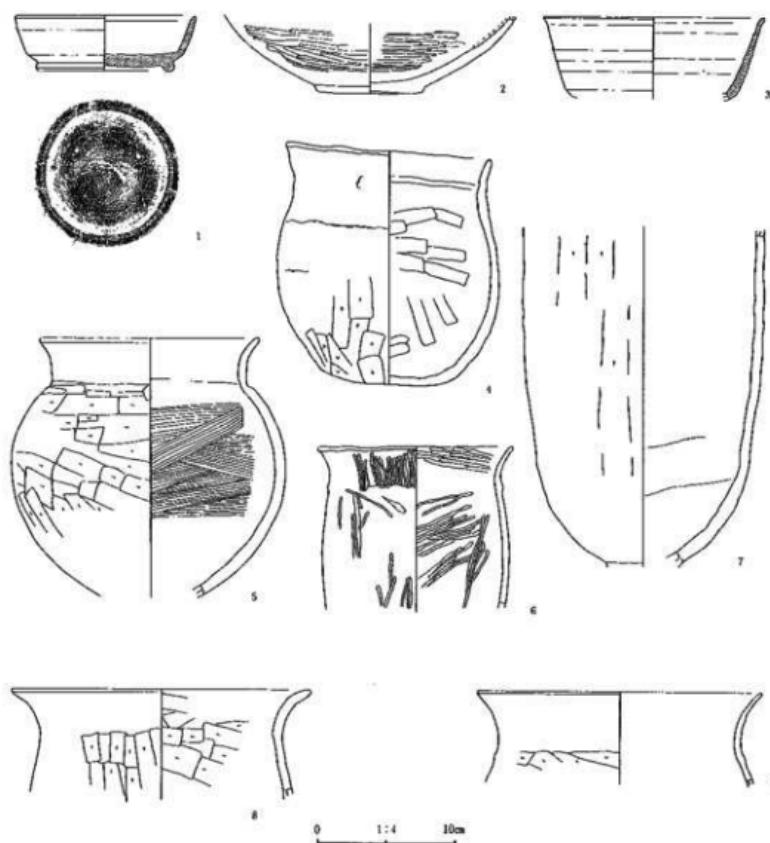
遺構の南東壁側が、調査区域外にのびる。全体に攪乱の影響が激しい。

平面規模は、北壁検出長3.5m・西壁検出長2.5mで、平面形態等不明である。

壁高は、北壁が10~15cm前後、西壁が10cm前後である。

主軸方位は、N-8°-Wを示す。

ピットは7個検出され、P1は主柱穴と思われ、径82cm、深さ84cmを測る。P2は北壁のカマ



第19図 H-6分住居址出土遺物実測図

F際から、P 3・P 4は西壁に沿って検出された。P 5～P 7は南側の調査区域外となる境界線上から約半分が検出された。P 2～P 4の径は20cm前後、深さ20～30cmを測る。P 5～P 7の径は30～50cm前後、深さは20～30cmを測る。いずれも、上部は破壊されている。

床面は全体に堅く平坦であった。床下の掘り方は、中央部付近が4～10cmと浅く、壁面に沿っては30cm前後に深く掘り込まれている。

カマドは北壁に設置されていた。住居址の軸方位より、やや北東に向きを変えている。煙道部の一部が原形をとどめており、口径32cmを測る。袖部の前部には礫片がみられ、これらを芯材として用い、暗褐色の粘土で覆い構築されていたことが窺える。

出土遺物は、上師器高台付环・甕が図示できた。(第19図)

19-4・7・8の甕がカマド内から出土し、5の甕はカマド東側の壁際、2の甕底部はカマド西側の壁際から検出された。9の甕、1の須恵器高台付环は、攪乱内からの出土である。

本住居址は、8世紀前半に位置づけられよう。

(7) H 7号住居址

本住居址は、あ・いー6グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序のⅡ層・Ⅲ層である。遺構の北側が、調査区域外にのびる。検出された東壁のコーナー付近は攪乱により破壊されている。また、H 4号住居址、H 12号住居址と重複しており、H 4号住居址に南側を破壊され、H 12号住居址の東側を破壊している。

平面規模は、東壁検出長3.0m・西壁検出長1.4mが確認された。南壁は残存する形態からその長さおよそ4.6mを推測できる。平面形態は、隅丸方形が考えられる。

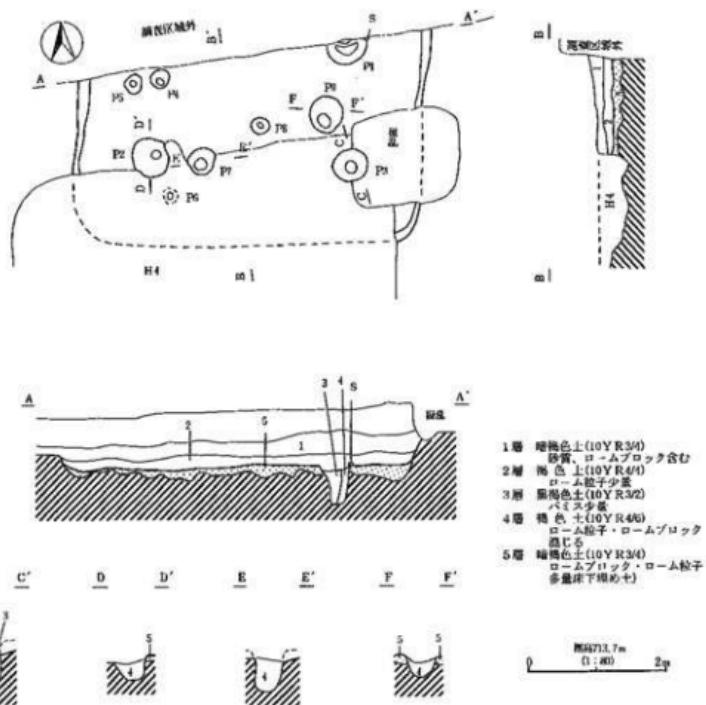
壁残高は、東壁高が30～40cm前後、西壁高が20cm前後である。

主軸方位は、N-5°-Eを示す。

ピットは9個確認され、P 1・P 2・P 3は主柱穴と思われる。径はいずれも50cm前後を測り、深さ30～60cmである。P 3からは、径20cmの柱痕が認められた。P 4～P 9の径は30cm前後、深さ20前後を測る。

床面は全体に堅く平坦であった。床下の掘り方は4～25cmを測り、ローム粒子・ロームブロックを多量に含む暗褐色土が埋められていた。

本住居址は出土遺物が少なく時期等不明確であるが、H 4号住居址とH 12号住居址との重複関係から、8世紀前半～9世紀後半のものとはいえる。



第20図 H7号住居址実測図



第21図 H7号住居址出土遺物実測図

(8) H8号住居址

本住居址は、エー9・10グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序のⅡ層・Ⅲ層である。遺構の大半が調査区域外にのびており、調査は住居址南側部分のみであった。

本址はF 2号掘建柱建物址と重複しており、東壁、および、東南コーナーの一部がF 2号掘建柱建物址のピットにより破壊されている。また、南壁の中央部を搅乱によって破壊されている。

平面規模は、南壁4.8m・東壁検出長1.5m・西壁検出長1.0mを測る。

平面形態は、残存部から推して隅丸方形もしくは隅丸長方形が考えられる。

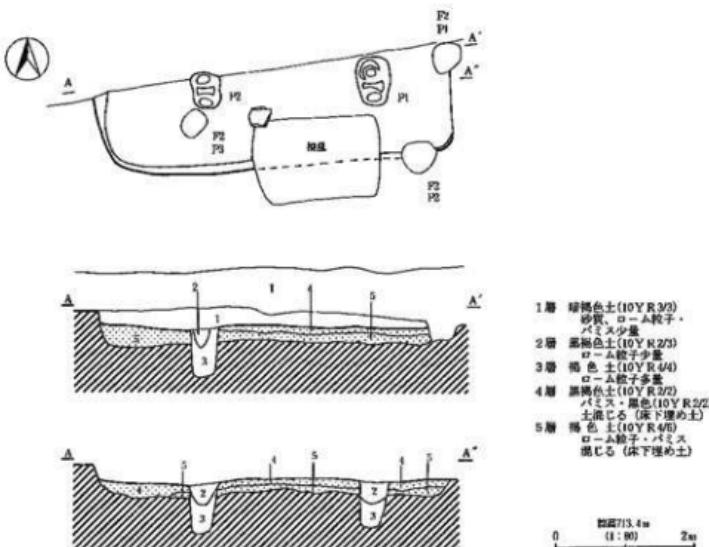
ピットは2個検出され、P 1・P 2は主柱穴と思われる。P 1の径は40cm深さ70cmを測り、P 2は径50cm深さ65cmである。

壁残高は、西壁で20cm前後を測る。

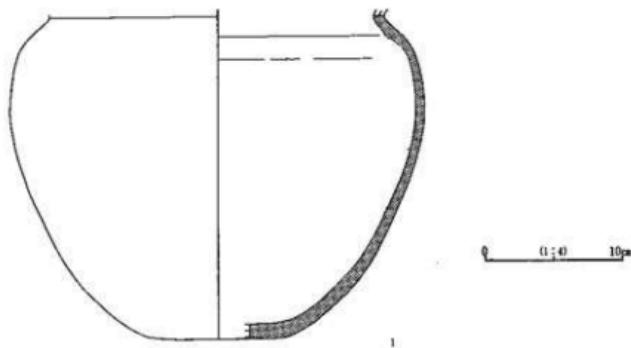
貼床が認められ、床面は全体に堅く平坦であった。床下の掘り方は20~30cmを測り、若干であるが壁にかけて四方がやや深く掘り込まれている。

遺物は少なく第23図の須恵器甕が図示できた。P 1・P 2間の床面上より出土した。

本住居址の出土遺物が少なく時期等不明確である。



第22図 H 8号住居址実測図



第23図 H 8号住居址出土遺物実測図

(9) H 9号住居址

本住居址は、えー14・15グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序のⅡ層・Ⅲ層である。本址はH26号住居址と重複関係にあり、H26号住居址の西北コーナー付近を破壊している。また、北東コーナーの床面、壁上部は攪乱により破壊されている。

平面規模は、北壁4.4m・南壁4.3m・東壁3.9m・西壁3.9mを測る。平面形態はほぼ隅丸正方形を呈している。

確認面からの壁高は、25~40cm前後を測る。覆土は2層に分層され自然堆積状況をみせている。

カマドを中心とする主軸方位は、N-4°-Wを示す。

ピットは4個検出された。いずれも主柱穴で、P1~P4が東西2.2m南北2.4mの正方形に配されている。柱穴の規模は、径30~40cm、深さは40cm前後を測る。

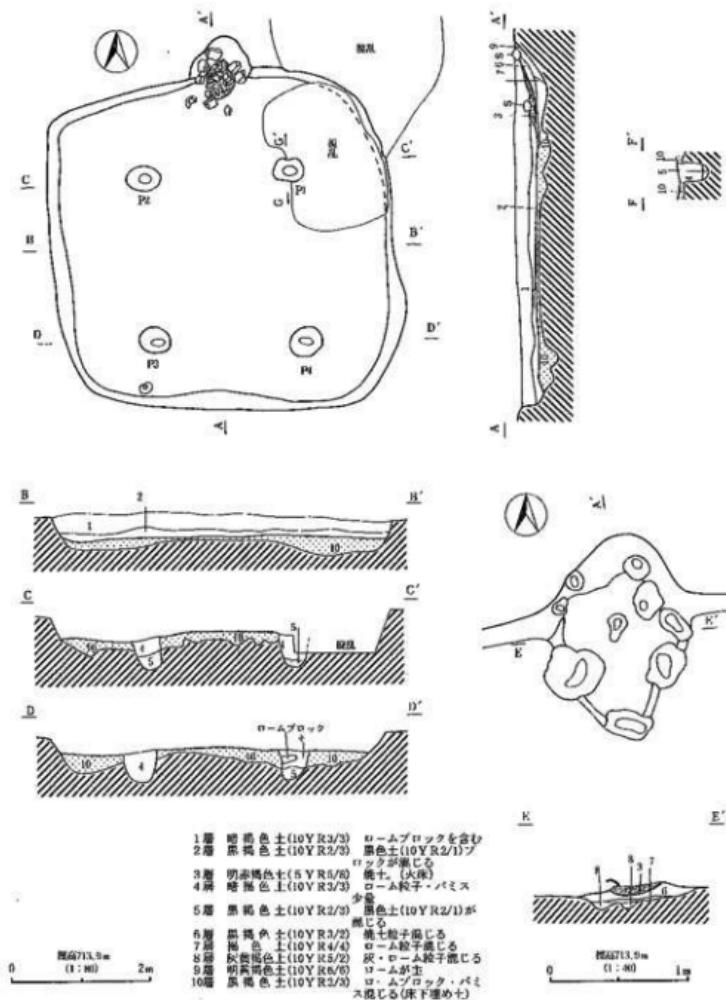
貼床が壁周辺を除いて全面に認められ平坦であった。カマド付近は特に堅固であった。床下の掘り方は、中央部付近が4~10cmと比較的浅く掘り込まれているのに対し、壁に沿った四方は20cm~30cmと深く掘り窪められていた。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。煙道部には角のある安山岩が数片みられ、これらをカマド構築の芯材に用いたことが考えられる。また、第24図のカマド掘り方にみられる8個の小ピットは、カマド構築の際に芯となる礫などを埋め込んだ穴とみられる。火床から検出された小ピットは、支脚石を固定したものであろう。

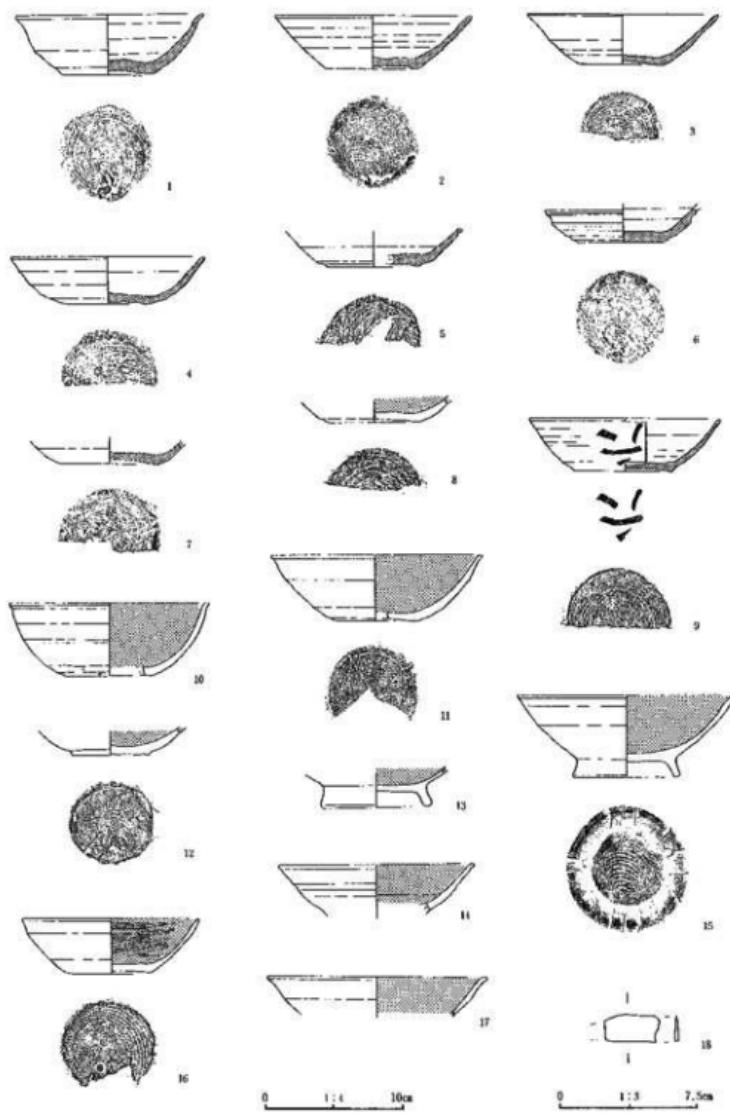
出土遺物には、須恵器壺・四耳壺、土師器壺・高台付壺・甕などがある。(第25~26図)

25-1・5の須恵器壺、26-22・25・26・27・29の土師器甕、26-20の土師器高台付壺はカマ

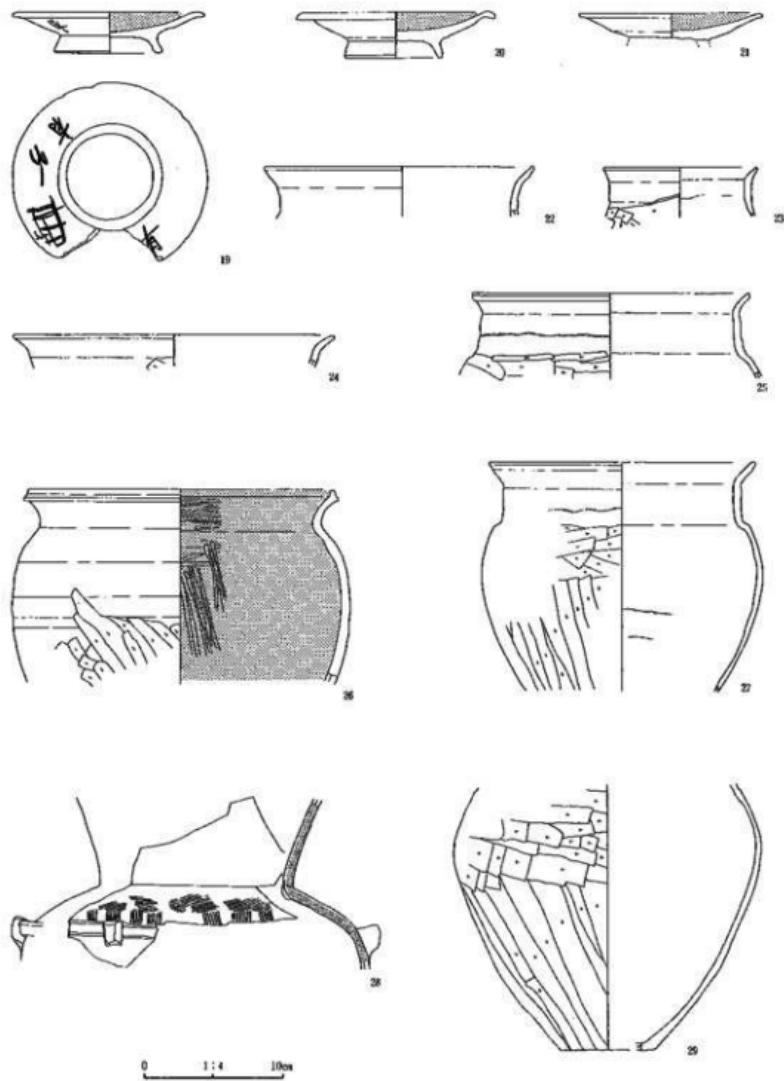
ド内から出土した。26-28の四耳壺、26-21の土師器高台付壺はカマド周辺の床面直上からの出土であった。25-13の土師器高台付壺、25-6の須恵器壺は床下の埋め土の中から検出された。



第24図 H-9号住居址実測図



第25圖 H 9号住居址出土遺物実測図

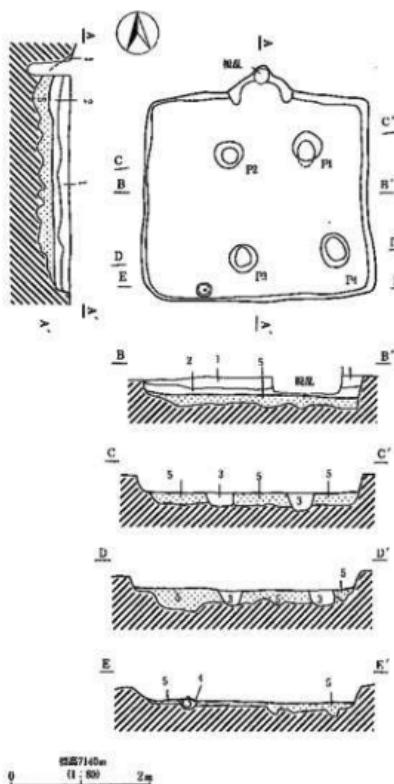


第26图 H9号住址出土遗物实测图

26-19の土師器壺は覆土第2層からの出土で、「有子」「有」の2文字が判読でき、さらに、「建物」を窓わせる絵画状に表現されたものもみえる。

25-18の刀子は覆土第2層から出土した。

本住居址は、9世紀後半に位置づけられよう。



1層 増粘赤土(10YR 3/4) 小鹿・ローム粒子少量
2層 黒褐色土(10Y R 2/3) バミス・黒褐色土(10Y R 2/2) が混じる
3層 黑褐色土(10Y R 3/2) ローム粒子・ロームブロックが混じる
4層 黑褐色土(10Y R 5/6) 滅色土(10Y R 4/4) の小ブロック少量
5層 滅色土(10Y R 6/1) バミス・ローム粒子混じる(床下埋め土)

第27図 H10号住居址実測図

(10) H10号住居址

本住居址は、うー16グリッドから出土された。遺構確認面は全体層序のⅡ層・Ⅲ層である。

本址はH22号住居址と重複関係にあり、H22号住居址の西側部分を破壊している。

平面規模は、北壁3.2m・南壁3.3m・東壁2.7m・西壁2.7mを測る。

平面形態はやや隅丸正方形を呈している。

確認面からの壁高は、10~20cm前後を測る。覆土は2層に分層され自然堆積状況をみせている。

カマドを中心とする主軸方位は、ほぼ真北を指す。

ピットは4個検出された。いずれも主柱穴で、P1~P4が東西1.2m、南北1.4mで、やや住居址の主軸とずれながら、位置は東よりに正方形に配されている。柱穴の規模は、径35~40cm、深さは30cm前後を測る。

貼床が壁周辺を除いて全面に認められ平垣であった。床下の掘り方は、20~25cmほど掘り込まれ、褐色土が埋め

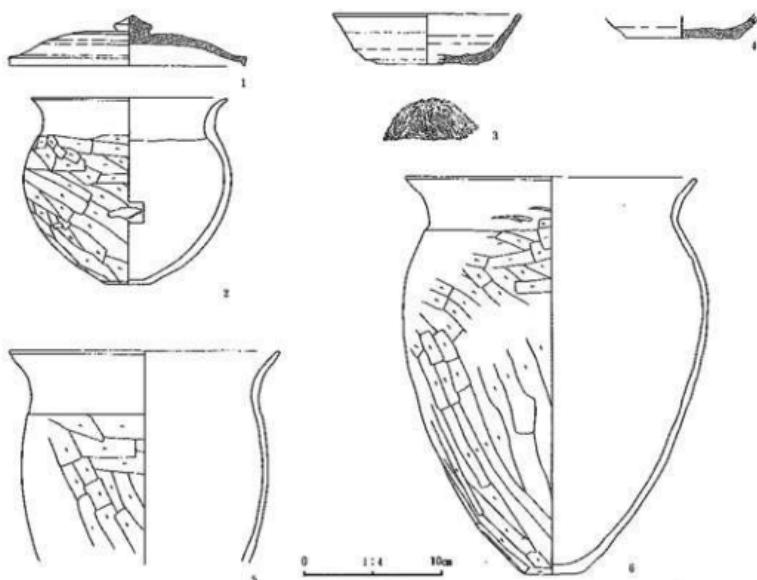
られていた。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。顯著な火床はみられず、覆土中にも焼土・炭等ほとんど見受けられない。使用頻度が薄かったのであろうか。

出土遺物は、須恵器蓋・坏・土師器甕が図示できた。(第28図)

28-3・4の須恵器坏、5・6の土師器甕は、覆土第1層・2層から出土した。28-1の須恵器蓋・2の土師器小形甕は、南西コーナーの南壁際より、小形甕に蓋をのせた特異な状況で出土した。(巻頭図版三・四) 小形甕を床面から20cmほど掘り抜めて固定し、小形甕の口辺部は床面と同一の高さになっている。床下に埋め上をし、貼床形成後に小ピットが掘られている。しかし、この付近の掘り方は、他所とは異なり浅く平坦になっており、かかる行為を予定しての掘り方とも受け取れる。2の土師器小形甕の胴部中央には、長径2.5cm、短径1cmを測る不整な梢円形の小孔が焼成後に穿たれている。土器内部にはなにも認められなかった。

本住居址は、9世紀前半に位置づけられよう。



第28図 H10号住居址出土遺物実測図

(11) H11号住居址

本住居址は、おー10・11グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅲ層である。本址は耕作と思われる著しい削平を受け、西・北側の床面は確認されず、床面構築の際の埋め土が露出していた。また、遺構の大半は調査区域外となり、北東のコーナー付近は搅乱の影響で破壊されている。よって、調査箇所は北壁を中心としたわずかな部分であった。

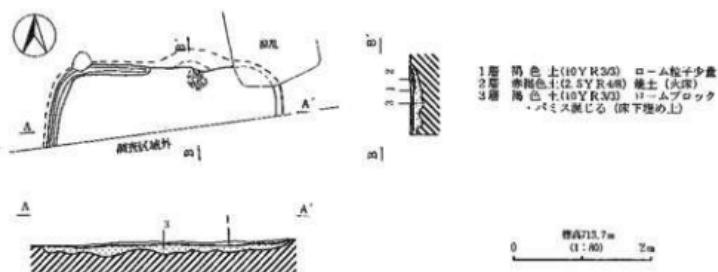
平面規模は、北壁検出長2.4m・東壁検出長0.5m・西壁検出長1.1mを測る。北壁の推定長は3.4mである。確認面からの壁高は、東壁で4cmを測る。

カマドを中心とする主軸方位は、N-3°-Eを示す。

貼床が東側に認められ、残存する床面は堅く平坦であった。床下の掘り方は20cm前後を測る。

カマドは北壁の中央やや東側に設置されていたことが、検出された火床よりうかがわれる。(第29図)

本址の時期等考慮する遺物は出土しなかった。



第29図 H11号住居址実測図

(12) H12号住居址

本住居址は、いー5グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅱ層・Ⅲ層である。

本址はH4号住居址・H7号住居址に遺構の東部を破壊されている。また、遺構北部は調査区域外となり、住居址の西南角のみの調査であった。

平面規模は、南壁検出長2.4m・西壁検出長2.7mを測る。しかし、P1・P2の位置から推して南壁は、約5.6mの長さが考えられる。平面形態はほぼ隅丸正方形か隅丸長方形であろうか。壁高は、20~25cm前後を測る。壁溝が確認された。壁溝幅は16~24cmで、深さ10~15cmを測る。主軸方位は、N-4°-Wを示す。

ピットは4個検出され、P1・P2は主柱穴である。径はP1・P2とも40cm前後で、深さは

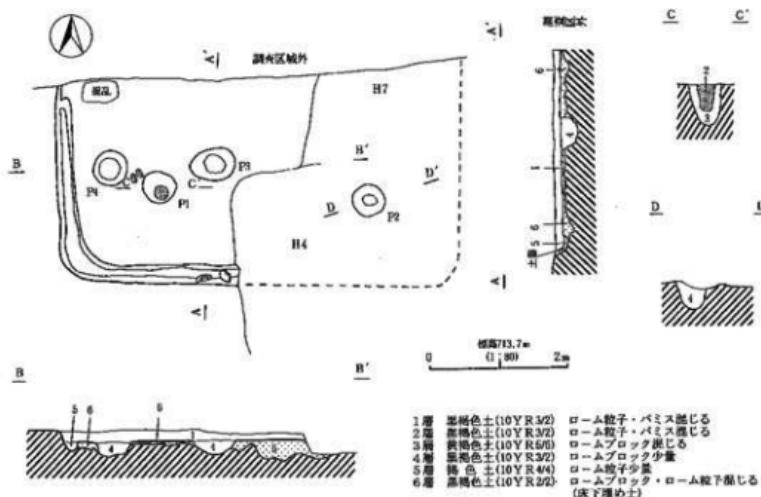
P 1 は 60cm、P 2 は 30cm を測る。P 1 から 径 20cm 深さ 40cm の柱痕が確認された。

床面は、平坦で堅く綺麗な土であった。床下の掘り方は、4~30cm で黒褐色土が埋められていた。

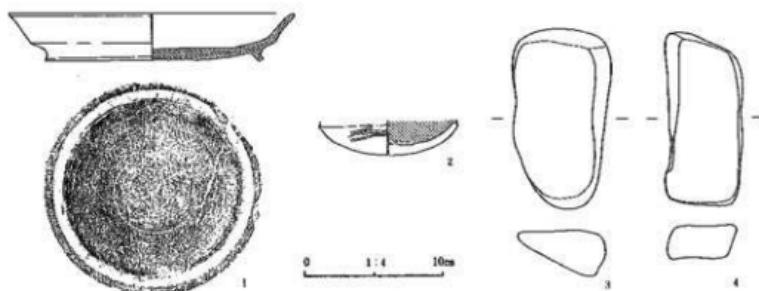
出土遺物は、須恵器盤、土師器壺、石器が図示できた（第31図）

31-1 の須恵器盤は、南壁面に張り付いた状態で出土し、3・4 の編み物石は P 1 脇の床面、2 の土師器壺は覆土中より出土した。

本住居址は、8世紀前半に位置づけられよう。



第30図 H12号住居址実測図



第31図 H12号住居址出土物実測図

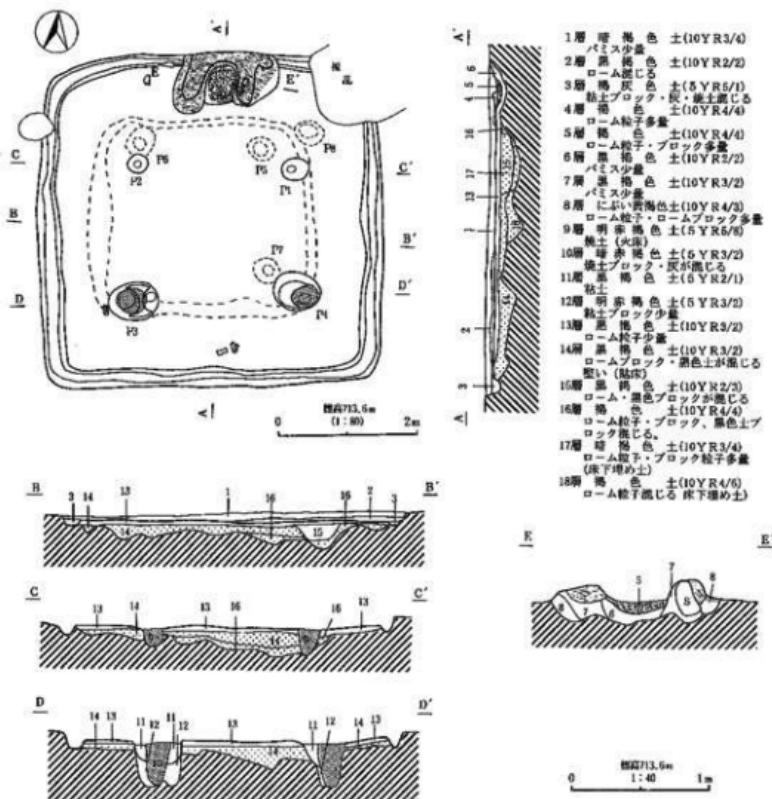
(13) H13号住居址

本住居址は、え・お-12グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅱ層・Ⅲ層である。本遺構の東北コーナーは、搅乱により破壊されている。

平面規模は、北壁検出長3.8m・南壁4.6m・東壁検出長3.5m・西壁4.3mを測る。平面形態はほぼ隅丸正方形を呈している。壁高は、5~20cm前後を測る。覆土は3層に分層された。

カマドを中心とする主軸方位は、N-6°-Wを示す。

ピットは8個検出され、P1~P4は主柱穴である。P1の径は40cm、深さ40cmを測り、P2



第32図 H13号住居址実測図

の径は30cm、深さ20cmを測る。P3の径は70cm、深さ60cmを測り、P4の径は60cm、深さ60cmを測る。P3・P4のピットから、径40cm深さ60cmの柱痕が確認された。P5～P8は床下より検出され、径40cm、深さ20cm前後である。このピットの存在は、柱等の立て替えが行われたことを考えさせる。

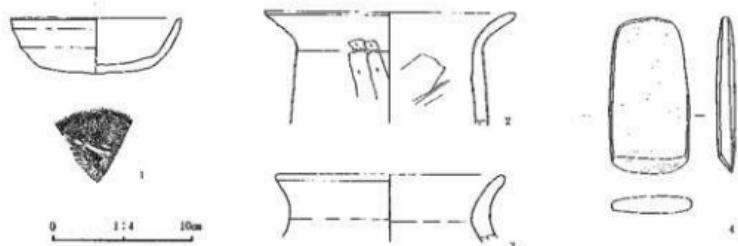
貼床が壁周辺を除いて全面に認められ堅く平坦であった。床下の掘り方は、10～40cmを測り、ローム粒子が混じる褐色土が埋められていた。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。東の袖部には面取りされた安山岩が埋め込まれ、袖の芯材とし、黒色の粘土で覆い構築されていた。

出土遺物は、土師器壺・甕、扁平片刃磨製石斧が図示できた。(第33図)

33-2・3の土師器甕、1の土師器壺は覆土第2層から出土し、4の扁平片刃磨製石斧は、カマド脇の床面上から出土した。

本住居址は遺物が少ないが、8世紀前半に位置づけられようか。



第33図 H13号住居址出土遺物実測図

(14) H14号住居址

本住居址は、き・く-18・19グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅱ層である。本遺構の東側・西側は、調査区域外にのびている。

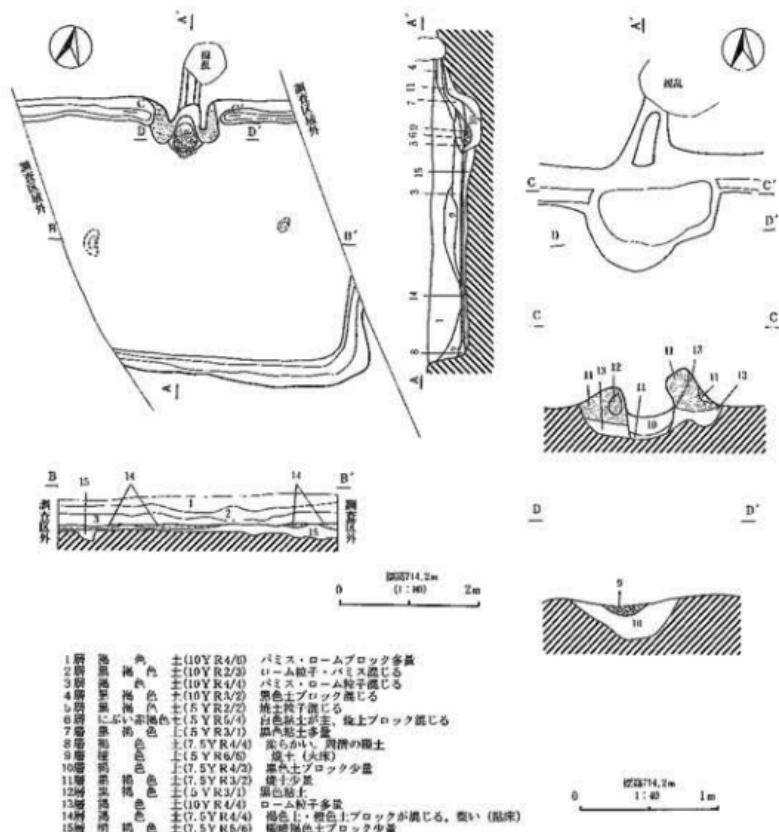
平面規模は、北壁検出長3.9m・南壁検出長3.5m・東壁検出長0.9mが確認できた。平面形態は東西壁が不明であり明確ではないが、東西に長い圓丸長方形が推定できる。壁高は、東西壁とも40～50cm前後を測る。覆土は3層に分層され、自然堆積状況を示している。カマドを中心とする主軸方位は、N-4°-Wを示す。

ピットは貼床面下から2個が検出された。P1の径は20cm、深さ20cmを測る。

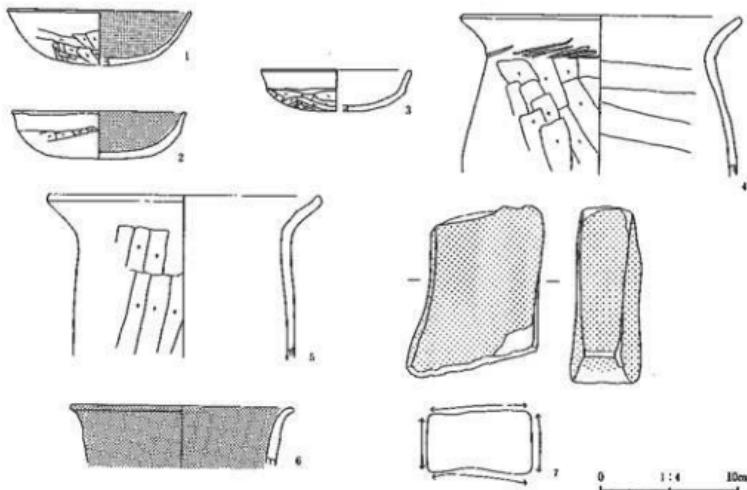
貼床が全面に認められ堅く平坦であった。特にカマド周辺は堅固であった。床下の掘り方は、8～20cmを測り、褐色土・明褐色土が埋められていた。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。袖部は黒褐色の粘土を主体にして構築されていた。煙道部は、先端が破壊されているものの、幅10cm、長さ50cmと細長い形状をしめす。

出土遺物は、土師器環・甕、砥石が図示できた。(第35図)
35-4・5・6の土師器甕、1・2・3の土師器環は覆土第2層・3層から出土した。7の砥石は南側の床面から出土した。
本住居址は、7世紀後半に位置づけられようか。



第34図 H14分住居址実測図



第35図 H14号住居址出土遺物実測図

(15) H15号住居址

本住居址は、くー19グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅲ層である。本址はH14号住居址およびM1号溝状遺構と重複関係にあり、遺構の9割以上が破壊を受けている。調査がおよんだのは、ほんの一部であった。

平面規模は、南壁検出長1.7mが判明しただけで、他は不明である。



壁高は、南壁で20cmを測る。
床下は、ローム粒子が多量に混じる褐色土が埋められていた。床面は堅く平坦であり、黒ずんだ床である。

本遺構は、住居址としたが調査範囲の限定からその正否、所産時期等不明瞭である。

第36図 H15号住居址実測図

(16) H16号住居址

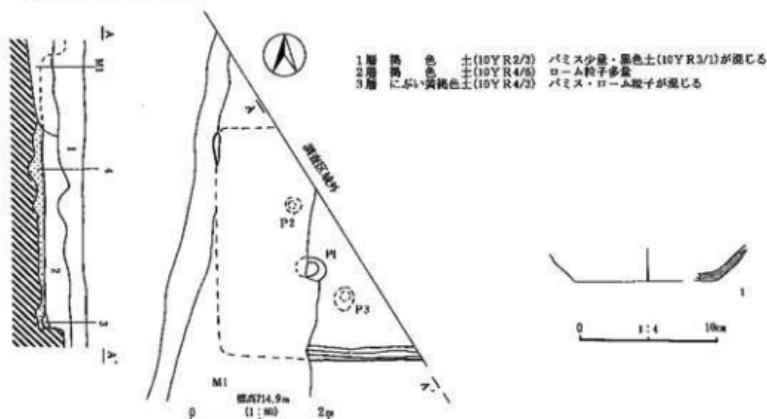
本住居址は、けー20グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅱ層である。本遺構の北側・西側は、M1号溝状遺構に破壊され、東側は調査区域外にのびている。

平面規模は、南壁検出長1.6mが確認できただけである。北西角の状況から西壁の3.2mは推測できる。平面形態も北西コーナーから隅丸正方形が推定できる。壁高は、20cm前後を測る。

ピットは3個確認された。P1の一部はM1号溝状遺構に破壊されている。径は40cm深さは20cmである。P2・P3は貼り床下から検出された。P2は径20cm深さ30cm、P3径30cm深さ35cmを測る。

床面は堅く平坦であった。壁の直下には壁溝が検出された。幅20cm深さ30cmを測る。

所産時期等不明である。



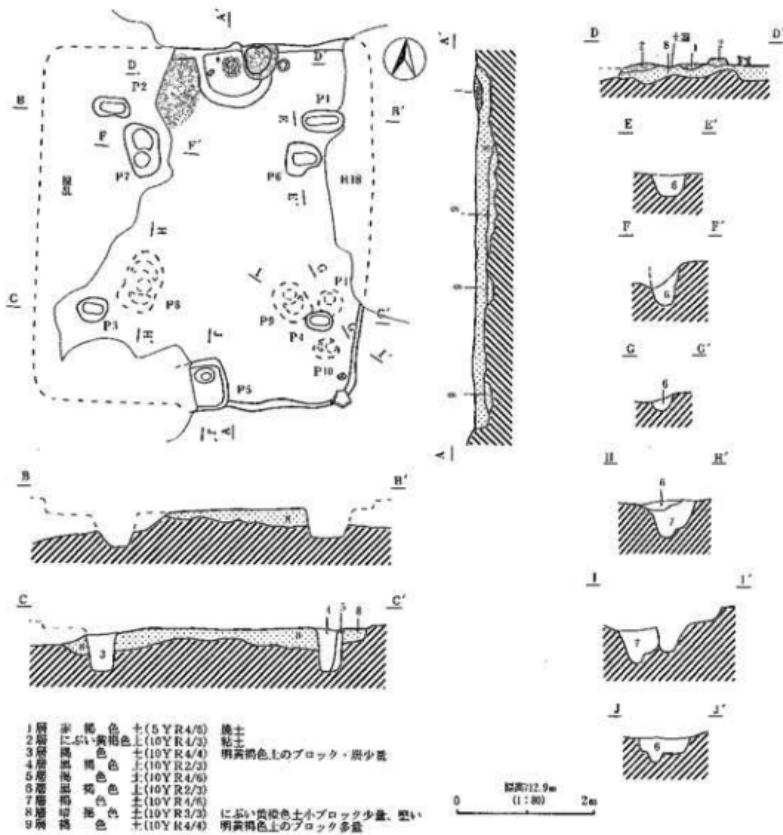
第37図 H16号住居址実測図・出土遺物実測図

(17) H17号住居址

本住居址は、う・えー3グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅱ層・3層である。本遺構は著しい削平や擾乱の影響を受け西側の床面は完全に破壊されていた。

平面規模は、北壁検出長2.6m・南壁検出長1.7m・東壁検出長1.4mが確認できた。平面形態は南北に長い隅丸長方形が推定できる。壁高は、南北壁とも5cm前後を測る。カマドを中心とする主軸方位は、N-2°-Eを示す。

ピットは11個検出され、P1-P4は主柱穴である。形状はいずれも楕円形を呈し、径は40-60cm、深さは40-60cmを測る。P5は南壁のほぼ中央から検出され、方形に20cmほど掘り窪めら



第38図 H17号住居址実測図

れ、さらに、その底面北隅には、径40cm深さ15cmのピットがみられた。入り口の施設に関わるものであろうか。貼床面下からP8～P11が検出された。P8・P9は深さ50cmを測る。P6・P7とともに方形に位置し、旧い柱穴と考えられる。

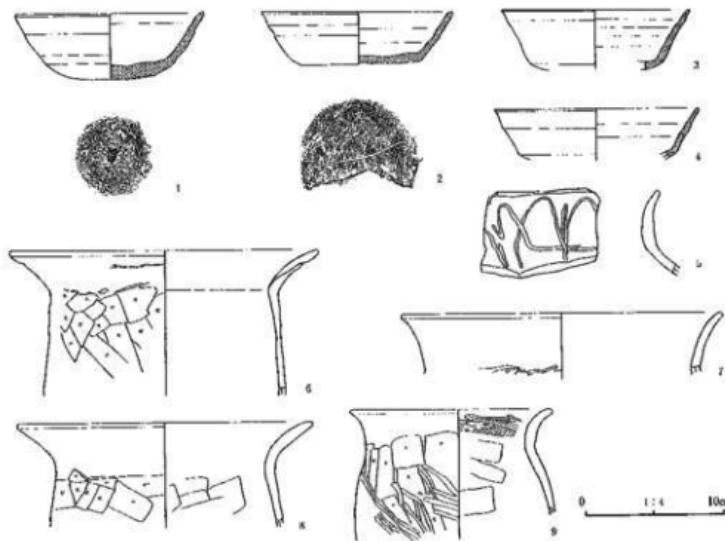
床面は堅く平坦であった。床下の掘り方は、10～30cmを測る。中央部が浅く掘られ、壁にかけての四方は、やや深く掘られている。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。火床・両袖部の基部がわずかに確認された。火床の脇には小砾片がみられ、カマドの構築材とも考えられる。

出土遺物は、須恵器壺、土師器壺・蓋が図示できた。(第39図)

39-9の土師器蓋がカマドの東脇から、1・2・3の須恵器壺、6の土師器壺は床面から出土した。また、5・8の土師器蓋、4の須恵器壺は床面下の掘り方から出土した。

本住居址は、8世紀前半に位置づけられようか。

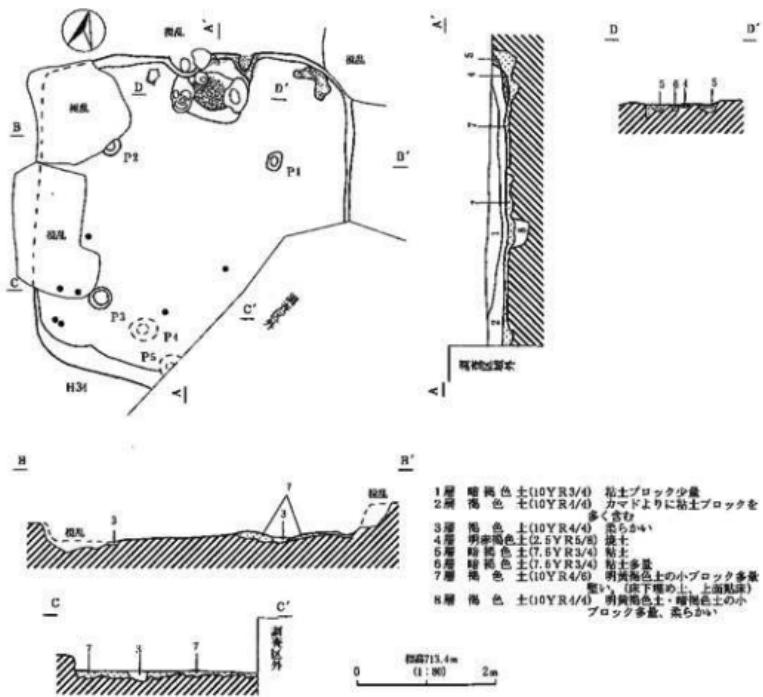


第39図 H17号住居址出土遺物実測図

(18) H18号住居址

本住居址は、い・うー3・4グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅱ層・Ⅲ層である。本遺構の西壁は搅乱の影響で破壊され、東壁・南壁側は調査区域外にのびている。

平面規模は、北壁検出長4.2m・南壁検出長1.9m・東壁検出長2.2m・西壁検出長3.5mが確認できた。平面形態は、南壁が張り出す隅丸方形が推定できる。壁高は、5~20cmを測る。覆土は2層に分層され自然堆積状況を示している。北東コーナーからカマドに使用されたとみられる暗褐色の粘土が検出された。カマドを中心とする主軸方位は、N-7°-Wを示す。



第40図 H18号住居址実測図

のピットは5個検出された。P1～P3は主柱穴と思われる。P1・P2の径は20cm前後で、深さは8cmを測る。P3は径30cm、深さ12cmを測る。P4・P5は、貼り床下から検出された。

貼床がほぼ全面に認められ、床面は堅く平坦であった。床下の掘り方は、4～20cmを測る。

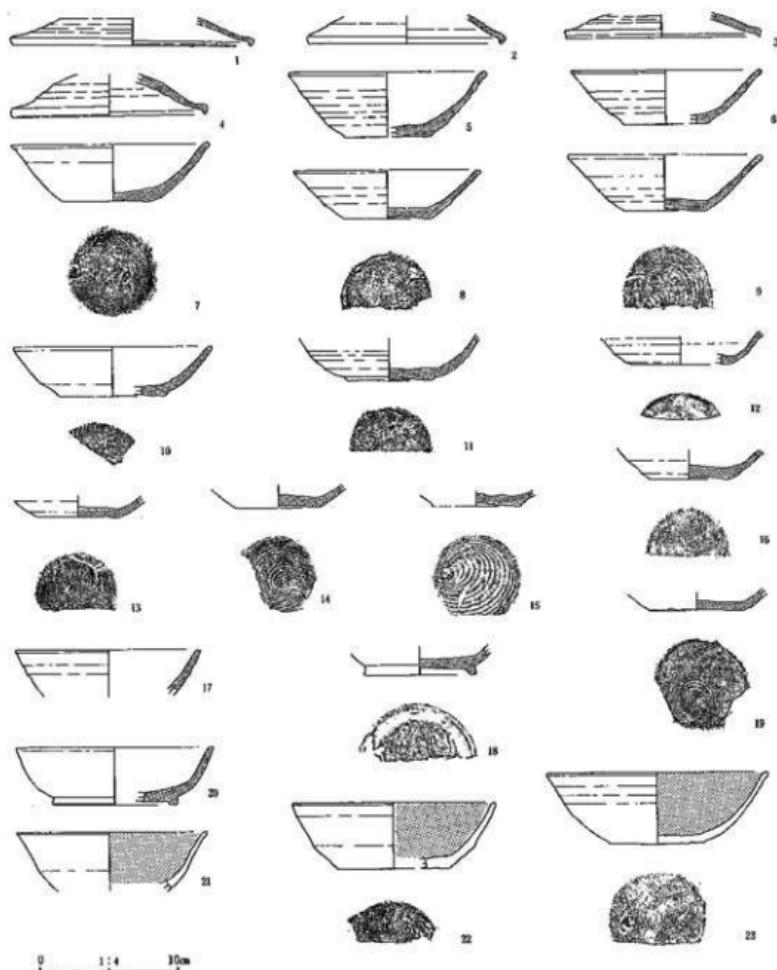
カマドは北壁の中央部に設置されていた。両袖部にみられる小ピットは、芯材の礫が埋め込まれたものであろう。

遺物は、須恵器蓋・壺、土師器壺・壺、羽口、鉄製品、鉄滓が図示できた。(第41・42図)

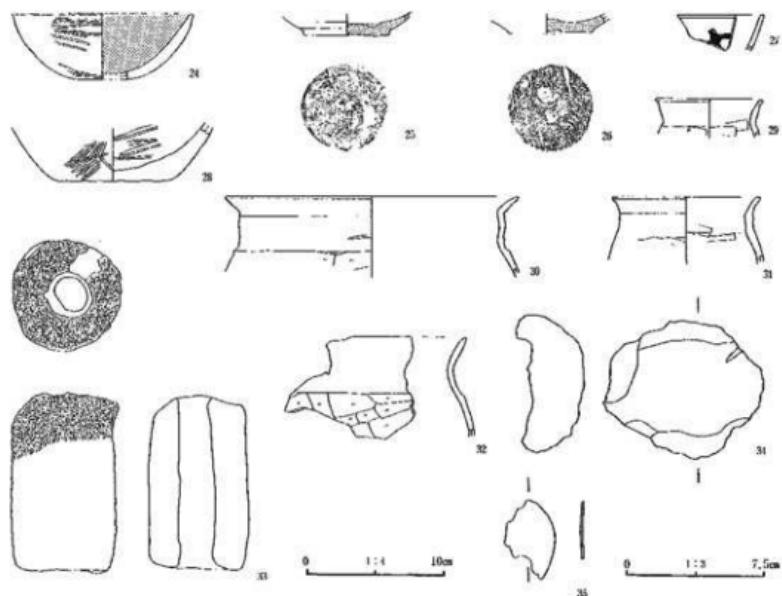
41-7の須恵器壺が南側床面の中央付近から、8の須恵器壺は南西コーナーから、42-28の土師器壺は西側床面から出土した。カマド内から41-9・12、42-25の須恵器壺が検出された。41-22土師器壺、42-26須恵器壺は床下掘り方からの出土で、42-33の羽口、34の鉄滓は、P3脇

の攪乱からの出土である。

本住居址は、7世紀後半に位置づけられようか。



第41図 H18号住居址出土遺物実測図



第42図 H18号住居址出土遺物実測図

(19) H19号住居址

本住居址は、いー3・4グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅲ層である。

本址はH17号住居址とH18号住居址と重複し、中央から南側が破壊されている。

平面規模は、北壁5.2m・東壁検出長1.8m・西壁検出長1.9mが確認できた。

平面形態は、P 3・P 4の位置から推して、南北に長い隅丸長方形が推定できる。壁高は、4~30cmを測る。西側床面は削平されていた。覆土は1層が認められる。

カマドを中心とする主軸方位は、N-11°-Wを示す。

ピットは4個検出された。P 1~P 4は支柱穴と思われる。P 1・P 2・P 3・P 4の径は、40cm前後で、深さはP 1・P 2が30cmで、P 3・P 4は確認面から15cmほどである。

床面は堅く平坦であった。床下の掘り方は、10~20cmを測り、明黄褐色土が埋められていた。

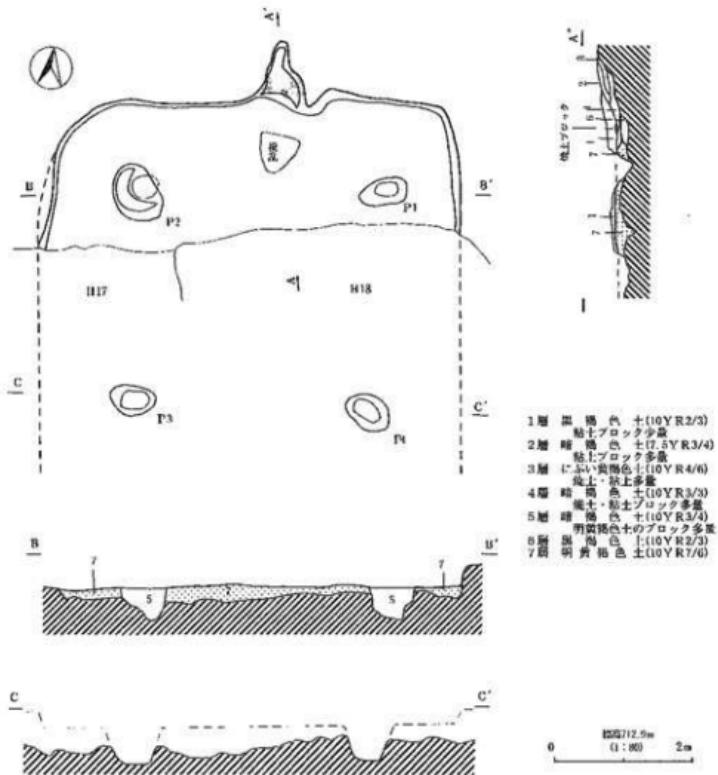
カマドは北壁の中央部に設置されていた。袖部・火床が北壁線上より外にでる形態をとる。両

袖部は外に張り出し気味である。付近には、焼土・暗褐色の粘土ブロックがみられた。

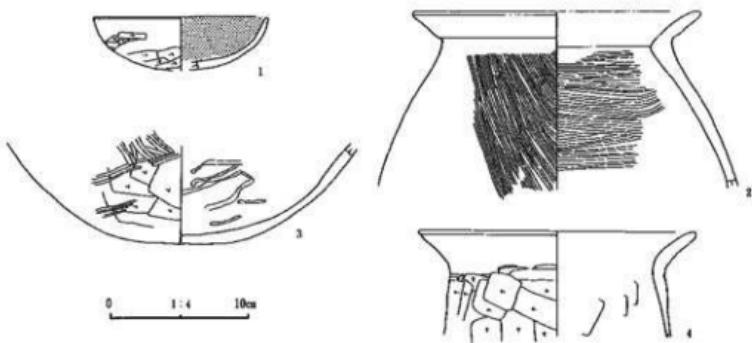
遺物は、土師器壺・甕が図示できた。(第44図)

44-2の土師器壺は、P1の東脇の床面から出土した。1の土師器壺、3の土師器甕は覆土中から、検出された。4の土師器甕は、床下の埋め土から出土した。

本住居址は、7世紀後半に位置づけられよう。

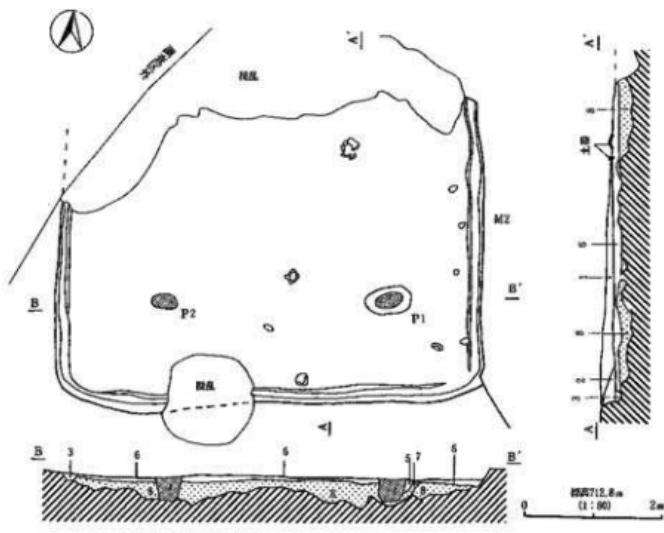


第43図 H19号住居址実測図



第44図 H19号住居址出土遺物実測図

(20) H20号住居址



- 1層 黒色土(10Y R 4/4)
- 2層 赤褐色土(10Y R 3/4)
- 3層 黑色土(10Y R 3/6) 柔らかい
- 4層 墓構造土(10Y R 3/4) 柔らかい。(柱洞)
- 5層 墓構造土(10Y R 3/4) 黒褐色土の小ブロック少量、柔らかい。(柱穴埋め土)
- 6層 墓構造土(10Y R 3/4) 黑褐色土・黒褐色土の小ブロック少量、堅い。(柱洞)
- 7層 黑褐色土(10Y R 3/2) 黑褐色土の小ブロック少量
- 8層 赤褐色土(10Y R 3/4) 明赤褐色土・黑褐色土の小ブロック多量、堅い。(床下埋め土)

第45図 H20号住居址実測図

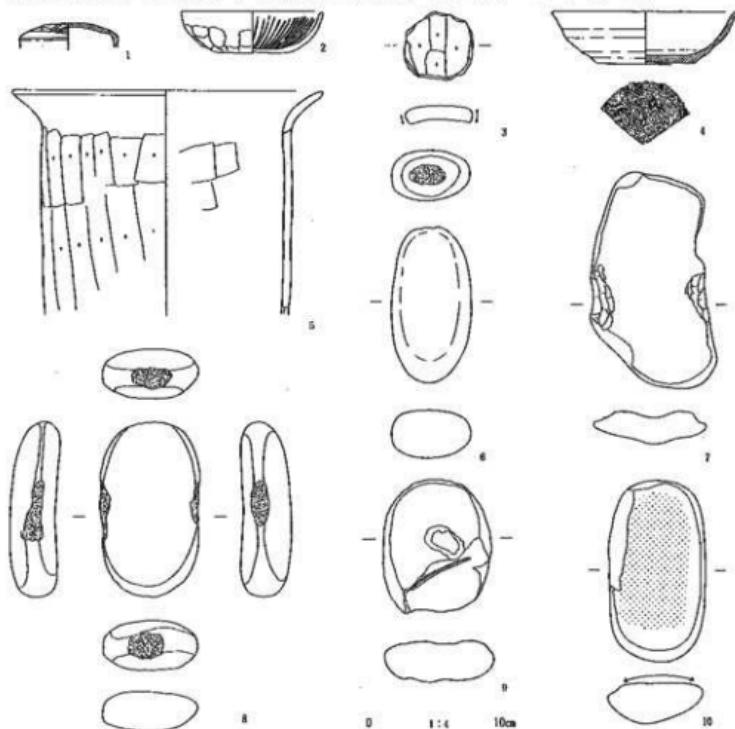
本住居址は、お・かー1・2グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅱ層・Ⅲ層である。本址の中央北側は擾乱の影響で破壊され、東壁の上部はM2号溝状遺構により破壊されている。

平面規模は、南壁6.0m・東壁検出長3.8m・西壁検出長3.1mが確認できた。壁高は、4~20cmを測る。西側の壁は著しく破壊されている。

主軸方位は、N-10°-Wを示す。ピットは2個検出された。P1・2は主柱穴である。P1の径は40cm、深さは30cmを測る。P2の径は40cm、深さは30cmを測る。P1・P2から長径40cm短径20cm前後の柱痕が確認された。

貼床がみられ、床面は堅く平坦であった。床下の掘り方は、10~40cmで四方は深く掘り窄めている。

遺物は、須恵器坏・土師器坏・長胴甕、土製円盤、石錘が図示できた。(第46図)

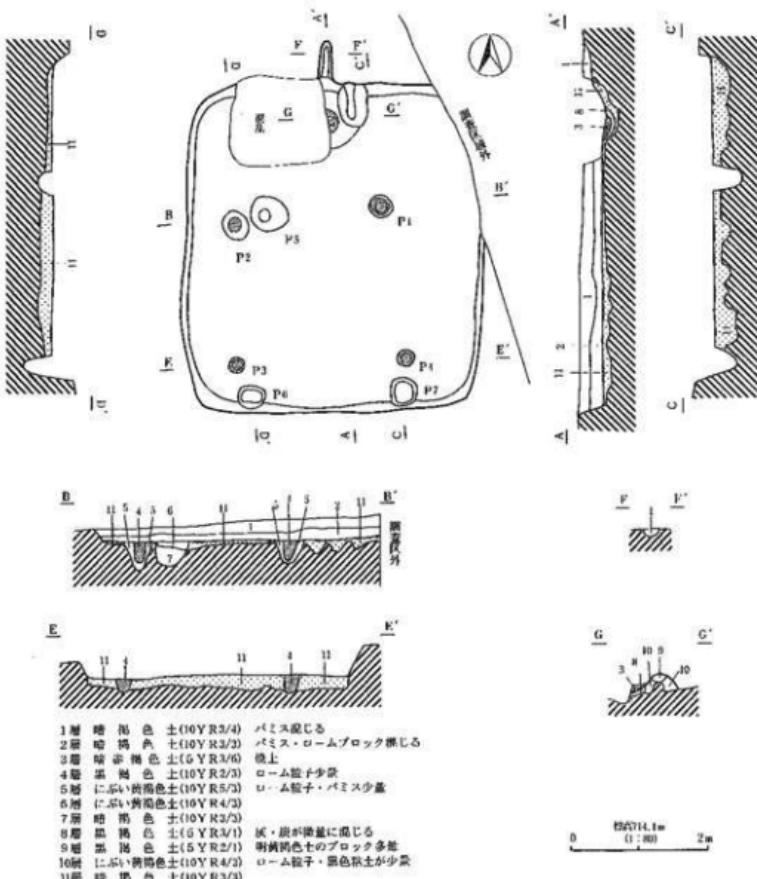


第46図 H20号住居址出土遺物実測図

46-5の土師器長胴甕は、床面中央やや東よりから出土し、4の須恵器坏はP1・P2間の床面、3の円盤は東壁際の床面から出土した。1の須恵器蓋、2の土師器坏は覆土中から、検出された。6・7・8・10の石鍤は、東壁際の床面直上から出土した。

本址は、重複・攪乱があり遺物も混入しているが、おおむね7世紀後半に位置づけられよう。

(21) H21号住居址



第47図 H21号住居址実測図

本住居址は、え・お-16・17グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅲ層である。本址はH22号住居址の南壁とH26号住居址の東壁の一部を破壊している。

平面規模は、北壁検出長3.4m・南壁3.8m・東壁検出長2.3m・西壁4.4mが確認できた。平面形態は、南北にやや長い隅丸長方形といえよう。壁高は、20~40cmを測る。覆土は2層に分層され自然堆積状況を示す。

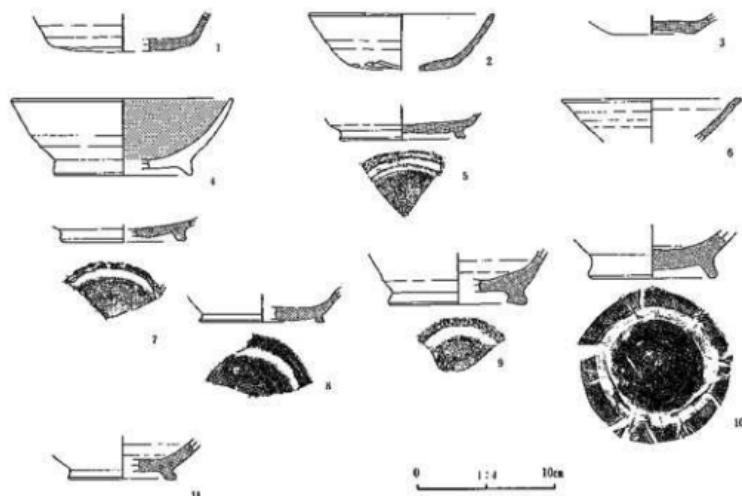
カマドを中心とする主軸方位は、Nを示す。

ピットは7個検出され、P1~P4は主柱穴と思われる。径20cmの柱痕が確認できた。P6・P7は南壁の壁中にあり、径は40cm前後で深さはP6が70cm、P7が60cmを測る。P5は径60cm深さ30cmを測る。床面は堅く平坦であった。床下の掘り方は、4~40cmを測り、にぶい黄褐色土が埋められていた。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。攪乱により西袖部・火床の半分が破壊されている。残存する東側袖部は地山を掘り残し、黒褐色の粘土で堅く覆って構築されていた。煙道は室外に長くのびている。幅20cm、長さ10cm、深さ10cmであった。

遺物は、須恵器高台付环・环、土師器高台付环が図示できた。(第48図) いずれも覆土1・2層中からの出土である。

本住居址は、9世紀後半に位置づけられようか



第48図 H21号住居址出土遺物実測図

(22) H22号住居址

本住居址は、うー16・17グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅲ層である。本址はH10号住居址とH21号住居址に西南部を破壊され、東北部は調査区域外である。平面規模は、北壁検出長0.4m・西壁検出長0.8mが確認できた。平面形態は、不明。壁高は、20cmを測る。覆土は3層に分層され自然堆積状況を示す。主軸方位は、残存する西壁・北壁から真北を示すとみられる。

ピットは1個検出され、位置から主柱穴を構成すると思われる。径20cm深さ60cmを測る。

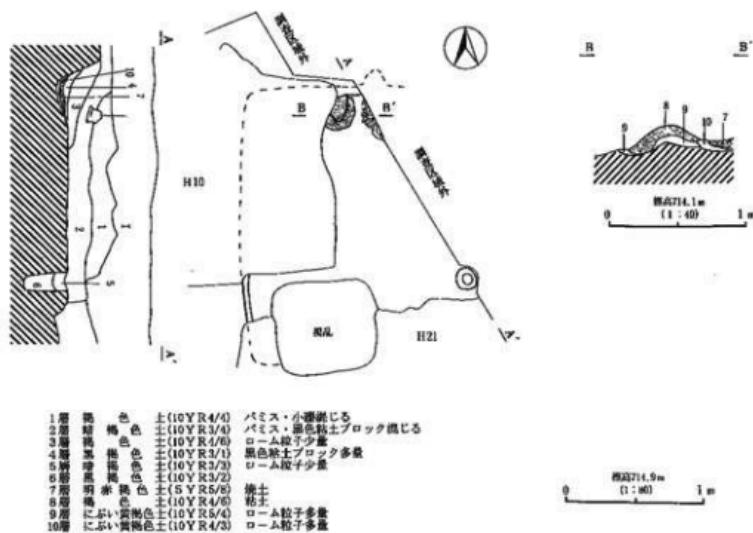
床面は堅く平坦であった。特にカマド周辺部は堅緻であった。

カマドは残存する両袖部・火床から、北壁の中央部に設置されていたことが窺える。西袖部は褐色の粘土で堅く構築されていた。

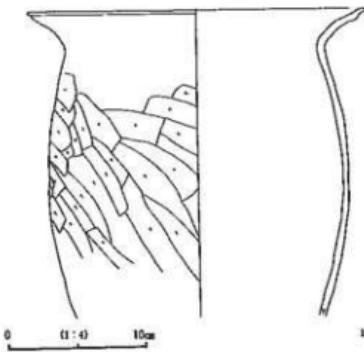
遺物は、土師器甕が図示できた。(第50図)

カマド上部の覆土2層内から出土した。

本住居址は、8世紀後半に位置づけられよう



第49図 H22号住居址実測図



第50図 H22号住居址出土遺物実測図

(23) H23号住居址

本住居址は、か・きー2・3グリッドから検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅱ層・Ⅲ層である。北西側は調査区域外、北側付近はM2号溝状遺構により破壊されている。東壁の一部はピット状の搅乱により破壊を受けている。

平面規模は、北壁4.3m・南壁検出長1.6m・東壁4.2m・西壁検出長1.0mが確認できた。平面形態は、隅丸方形といえよう。壁高は、8~20cmを測る。覆土は1層の黒色土がみられた。

主軸方位は、N-14°-Wを示す。

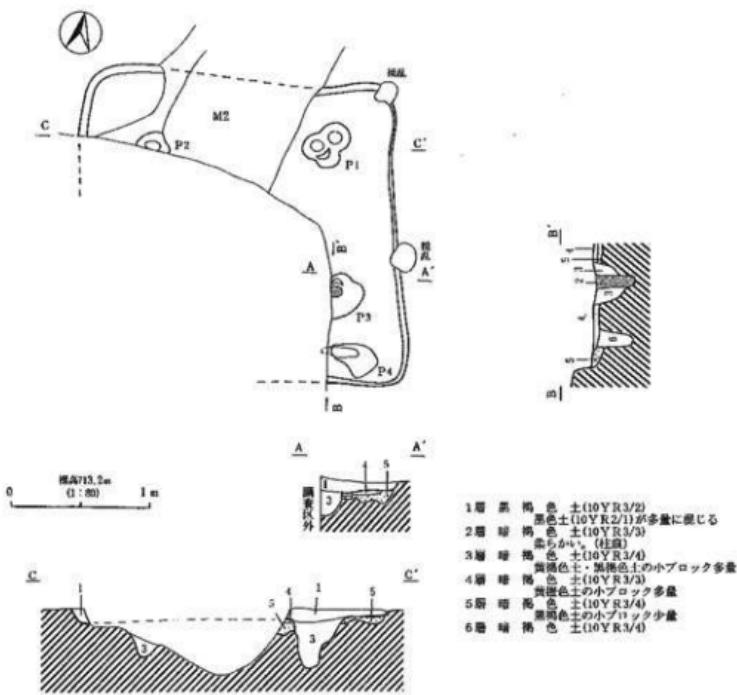
ピットは4個検出され、P2・P3は調査区域の境界から確認された。P1~P3は主柱穴と思われる。P1は径70cm、深さ60cmを測る。P2はM2号溝状遺構に上部を破壊され、底部のみが、溝の西側壁面から検出された。径は40cm、深さ30cmを測る。P3は径50cm深さは60cmを測る。P3からは径20cm深さ60cmの柱痕が確認できた。P4は南東コーナー付近の床面から検出され、径50cmで深さ40cmを測る。

床面は貼床され堅く平坦であった。床下の掘り方は、4~20cmを測り、黄橙色土・黒褐色土の小ブロックが混じる暗褐色土が埋められていた。

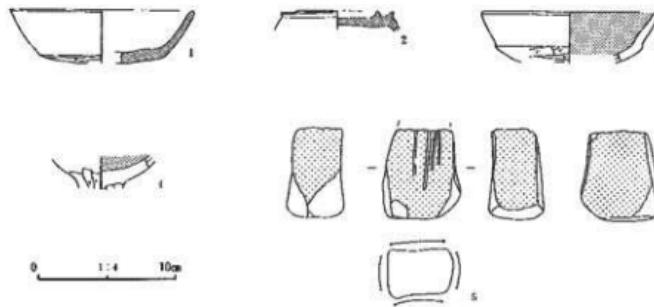
遺物は、須恵器壺・円面鏡、土師器壺・高壺、砥石が図示できた。(第52図)

52-4の高壺は、P3脇の床面から出土した。3の土師器壺は床下の埋め土中、1の須恵器壺・2の円面鏡、5の砥石は、床面直上から出土した。

本住居址は、8世紀前半に位置づけられようか。



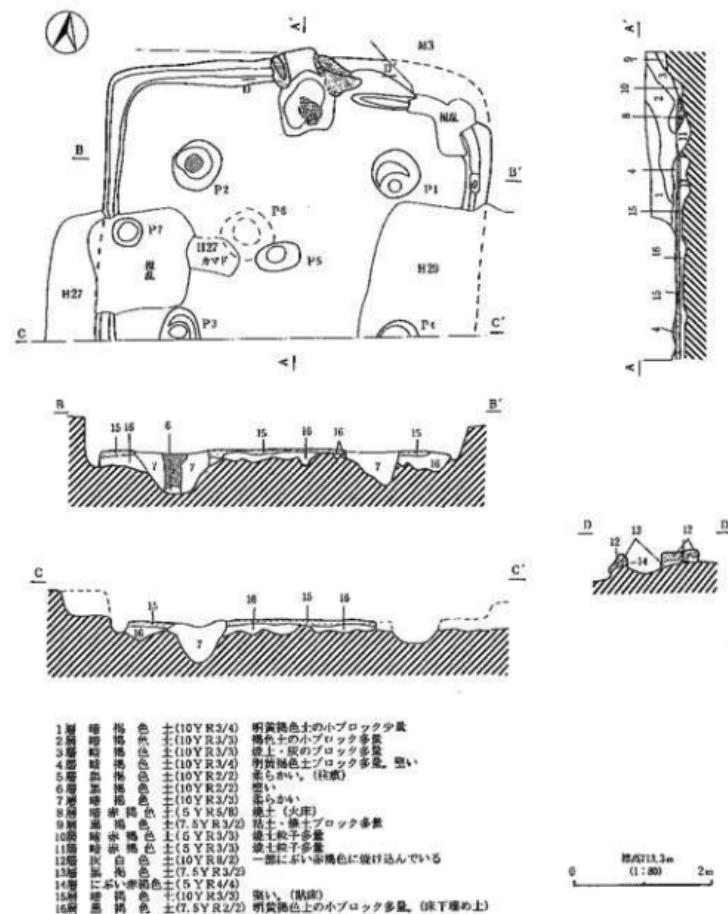
第51図 H23号住居址実測図



第52図 H23号住居址出土遺物実測図

(24) H24号住居址

本住居址は、くー6グリッドから検出された。遺構の確認面は全体層序の第Ⅱ層・Ⅲ層である。西壁の上部をH27号住居址に、西壁中央および床面を耕作により破壊されている。H29号住居址には東壁の南半を、M3号溝状遺構には北東コーナーを破壊されている。



第53図 H24号住居址断面図

平面規模は、北壁推測5.4m東壁0.8m・西壁検出長3.8mが確認できた。平面形態は、隅丸方形ないしは、隅丸長方形といえよう。壁高は北壁で50cm、東壁で40cmを測る。覆土は2層に分層された。カマドを中心とする主軸方位は、N-2°-Wを指す。

ピットは7個検出された。P1-P4は主柱穴で、いずれも径60cm前後、深さはP1-P3が50cm、P4が20cmである。P2から径20cmの柱痕が確認できた。P6は、床下から検出された。

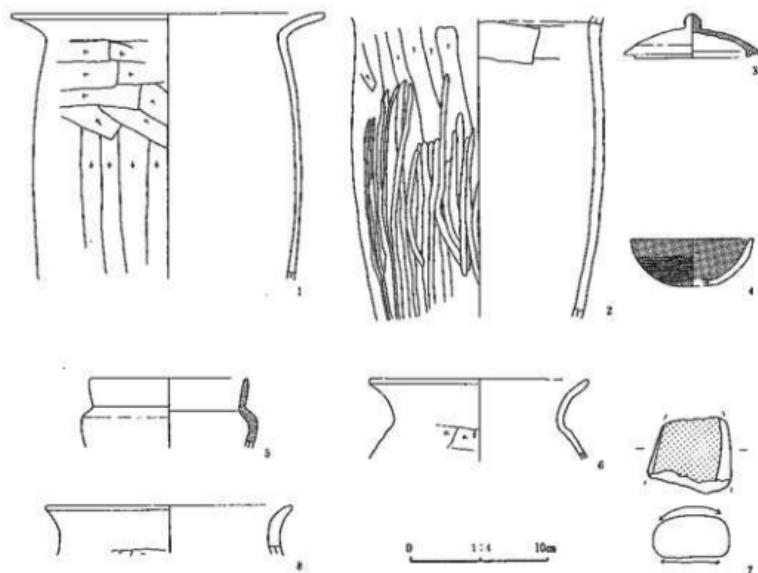
床面は貼床され堅く平坦であった。床下の掘り方は、4-20cmを測り、明黄褐色土の小ブロックが多く量に混じる黒褐色土が埋められていた。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。残存する袖部は地山を掘り残し、灰褐色の粘土で堅く覆って構築されていた。

遺物は、須恵器蓋・甕、土師器甕、砾石が図示できた。(第54図)

54-3の須恵器蓋、1・2の土師器甕は、カマド内から出土し、他は覆土から出土している。

本住居址は、7世紀後半に位置づけられよう。



第54図 H24号住居址出土遺物実測図

(25) H25号住居址

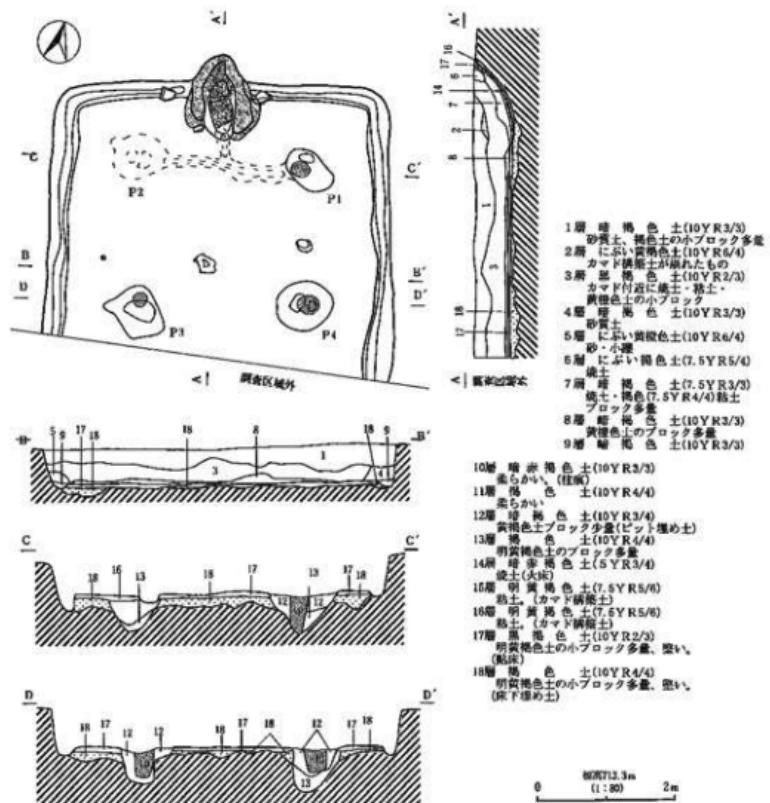
本住居址は、く・けー4グリッドから検出された。遺構の確認面は全体層序の第Ⅱ層・Ⅲ層である。南側が調査区域外にのびており、全体は明らかでない。

平面規模は、北壁4.6m・東壁検出長4.1m・西壁検出長3.5mが確認できた。

平面形態は、隅丸方形とみられる。壁高は40~60cmを測る。羅土はほぼ2層に分層された。

カマドを中心とする主軸方位は、N-13° -Wを指す。

ピットは4個検出されP1~P4は主柱穴である。P1は径60cm深さ70cmを測り、径20cm深さ



第55図 H25号住居址実測図

60cmの柱痕が確認できた。P 2は床面精査では、明確にできず貼床精査時に検出した。径70cm深さ50cmを測る。P 3は径40cm深さ50cmを測り、径20cm深さ40cmの柱痕が確認できた。P 4は径60cm深さ67cmを測り、径30cm深さ30cmの柱痕が確認できた。貼床下からP 1とP 2を結んだ溝状の掘り込みが確認された。

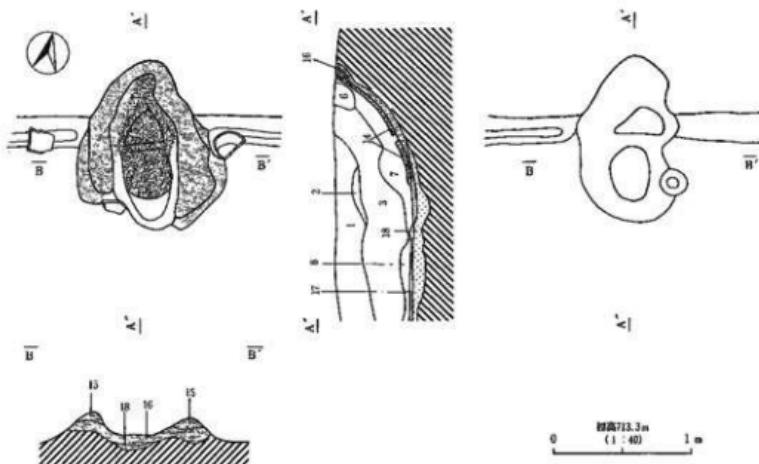
床面は貼床され堅く平坦であった。床下の掘り方は、4~20cmを測り、明黄褐色土の小ブロックが混じる黒褐色土が埋められていた。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。袖部には補強用の土器片がみられた。床面中央付近から出土した2個の軽石は、袖部先端に使用された芯材かと思われる。袖部の構築土は、明黄褐色の粘土であった。火床から煙道部にかけて激しい焼け込みが観察され、かなりの使用頻度が窺える。

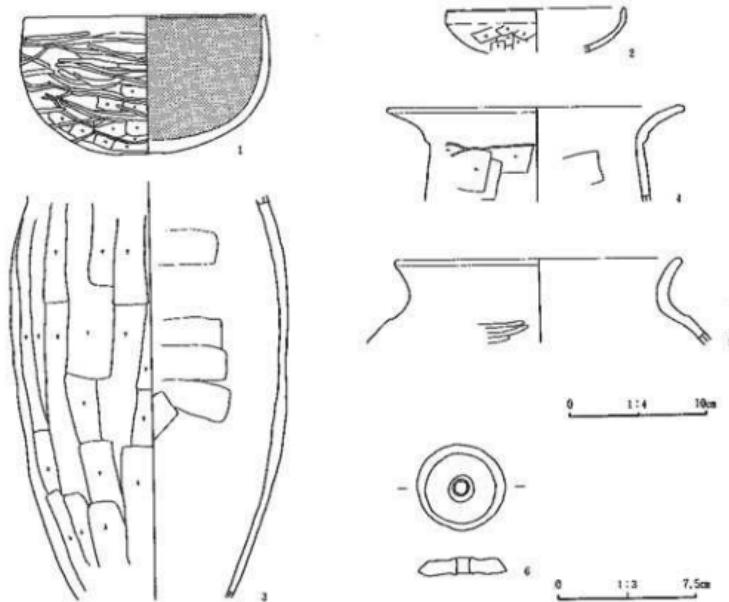
遺物は、土師器壺・鉢・甕、紡錘車が図示できた。(第57図)

57-1の土師器鉢・3の土師器甕はカマド脇から、4・5の土師器甕はカマド西袖から、6の紡錘車は西側床面から出土した。

本住居址は、7世紀後半に位置づけられよう。



第56図 H25号住居址カマド実測図



第57図 H25号住居址出土遺物実測図

(26) H26号住居址

本住居址は、え・おー15・16グリッドから検出された。造構の確認面は全体層序の第Ⅲ層である。本址は他造構と重複関係があり、H9号住居址に西北の壁面、H21号住居址に東北コーナー付近の壁面を破壊されている。

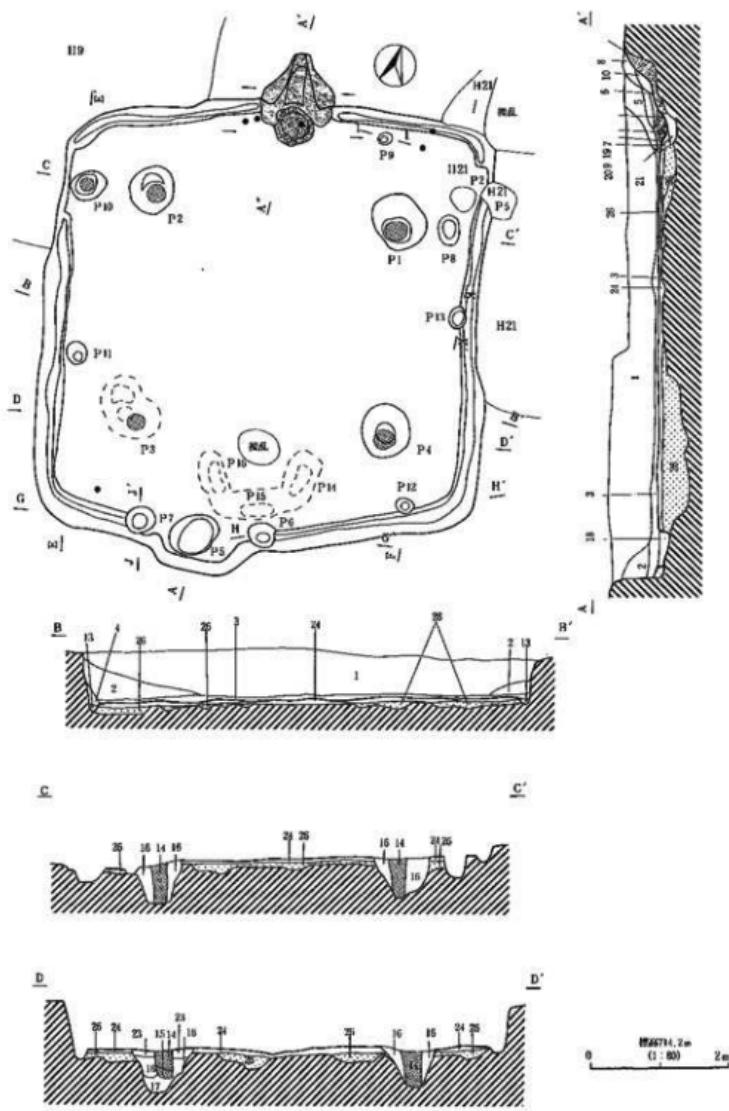
平面規模は、北壁5.7m・南壁6.1m・東壁5.3m・西壁5.5mを測る。

平面形態は、隅丸方形で南壁のやや西より付近が外側へ張り出している。確認面からの壁高は、60~70cmで床面から垂直気味に急な角度で立ち上がる。

覆土は4層に分層され、自然堆積状況をみせている。3層は床面直上全体に2~4cmの厚さで堆積するもので、有機質が腐蝕したのであろうか黒色を呈し粘質がある。

カマドを中心とする主軸方位は、N-15°-Wを指す。

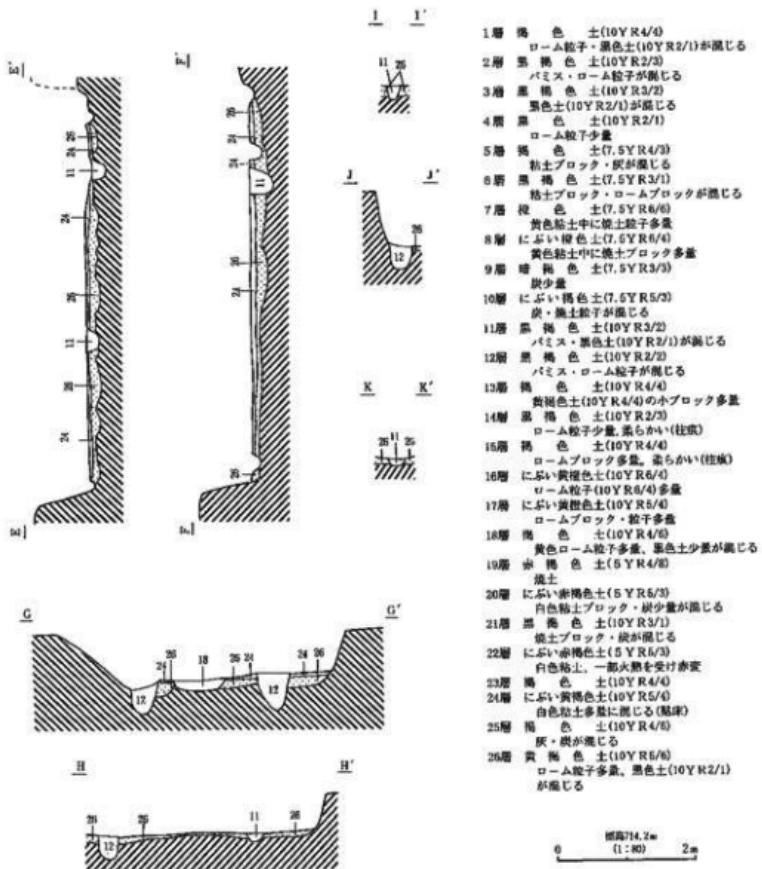
ピットは16個検出された。P1~P4は径60~70cm、深さ40~60cmを測る主柱穴である。また、



第58圖 H26號住居址實測圖

P 1～P 4 からは、径20cm深さ40～60cmの柱痕が確認できた。

P 5 は南壁やや西よりの張り出し部直下にあり、両脇に P 6・P 7 が並ぶ。これらはいずれも入り口施設に関わるものとみられる。P 5 は径80cm深さ18cm、P 6・P 7 は径40cm深さ40～50cmを測る。P 14～P 16 は、P 5～P 7 とよく似た配置で南壁中央直下の貼り床下から検出された。



第59図 H26号住居跡実測図

旧い入り口施設が存在したと考えられる。

P 8～P 13は、壁溝の内側脇より検出された。径20～30cm深さ20～30cmを測る。

幅10～20cm、深さ5～20cmの壁溝が壁直下を巡らされている。

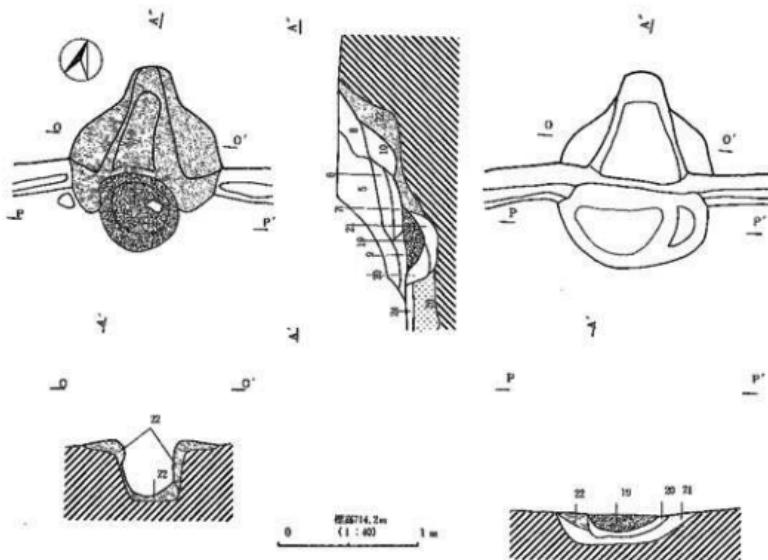
床面は貼床され堅く平坦であった。床下の掘り方は、4～18cmを測り、南壁の入り口施設とみられる箇所は特に深く掘られ40cmある。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。火床は顯著であったが、両袖部の残りは悪い。

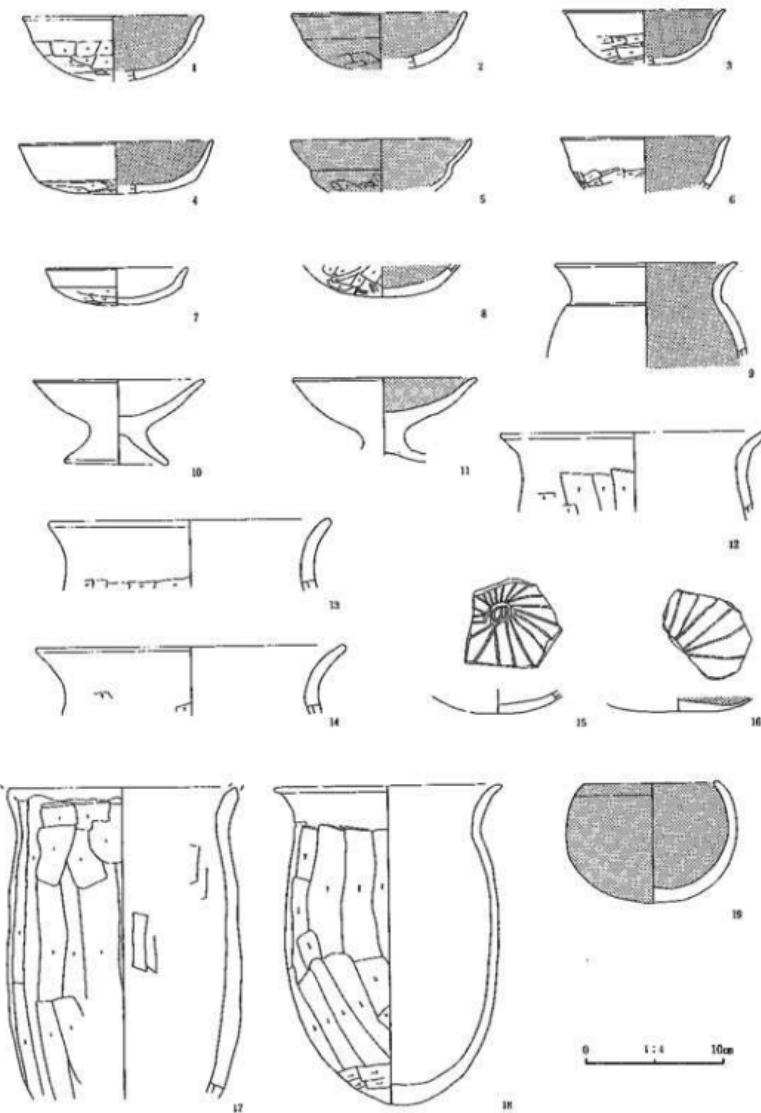
遺物は、土師器壺・高壺・甕が図示できた。(第61図)

61-10の土師器高壺・18の土師器甕は北東壁際から、17の土師器甕18の上師器壺はカマド内、5の土師器高壺はカマドの西脇から出土した。1・2・4・6～8・15・16の土師器壺は覆土中から、3・5の土師器壺は貼床下から出土した。

本住居址は、7世紀後半に位置づけられよう。



第60図 H26号住居址カマド実測図



第61图 H26号住居址出土遗物实测图

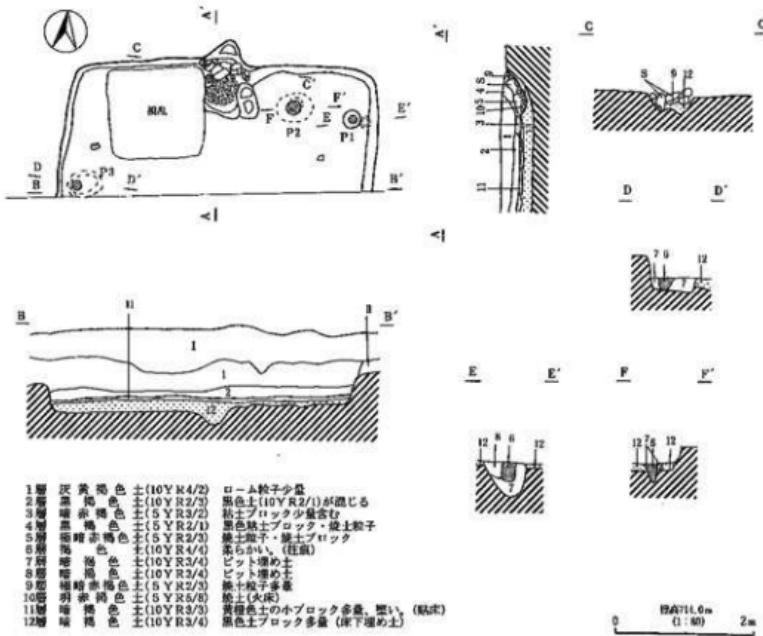
(27) H27号住居址

本住居址は、く・けー5・6グリッドから検出された。遺構の確認面は全体層序の第Ⅱ層・Ⅲ層である。本址は他遺構と重複関係があり、H24号・H29号住居址を破壊している。また、カマドの両袖部は耕作の搅乱を受け、南半は調査区域外である。

平面規模は、北壁4.2m・東壁検出長1.6m・西壁検出長1.9mを測る。平面形態は、隅丸方形かと思われる。確認面からの壁高は、20~30cmを測る。覆土は2層に分層され、自然堆積状況をみせている。カマドを中心とする主軸方位は、N-4°-Wを指す。

ピットは3個検出された。P1は径20cm深さ20cm、P2は径60cm深さ20cm、P3は径60cm深さ40cmを測る。いずれのピットからも柱痕が確認されている。P1の柱痕径は12cm、P2は径20cm、P3は径12cmを測る。P1~P3の柱痕の深さは、20cm前後を測る。床面は貼床され堅く平坦であった。床下の掘り方は10~20cmを測り、黒色土ブロックが多量に混じる黒褐色土が埋められた。

カマドは北壁の中央部に設置されていた。煙道部の入り口両側に、面取り軽石（東側）、安山

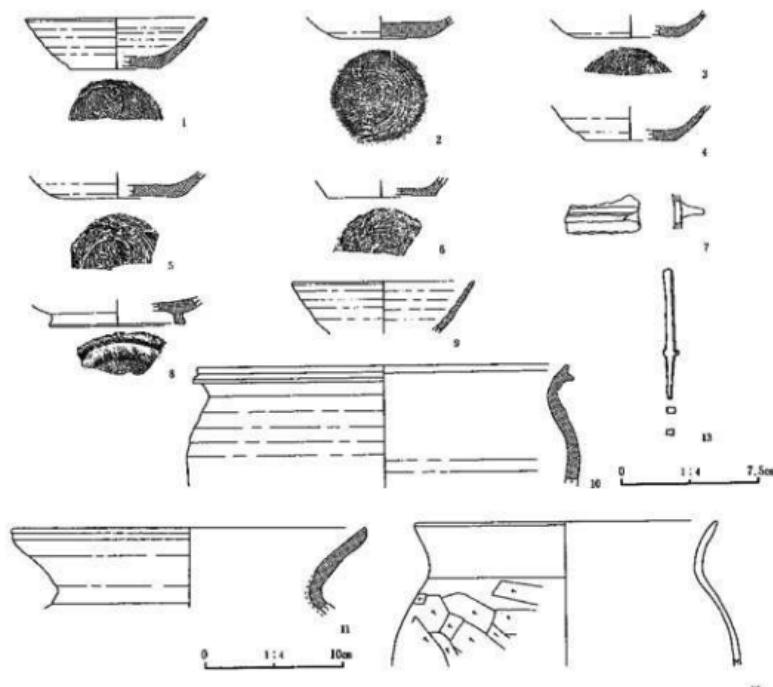


第62図 H27号住居址実測図

岩（西側）が芯材とされ、粘土で覆われていた。この間には長さ30cm厚さ20cmの集塊岩がみられたが、おそらくカマドの天井部に架けられた芯材と思われる。火床東側には小ピットがあり、袖部先端の袖石の存在が考えられる。

遺物は、須恵器壺・甕、土師器甕・羽釜、鉄鎌が図示できた。（第63図）

63-2・4の須恵器壺、10・11の須恵器甕、12の土師器甕は、床面からの出土である。1・3・5・6・8・9の須恵器壺、13の鉄鎌の茎部分は覆土中からの検出である。7の羽釜は混入であろう。本住居址は、9世紀前半に位置づけられよう。



第63図 H27号住居址出土遺物実測図

(28) H28号住居址

本住居址は、き・く・7・8グリッドから検出された。遺構の確認面は全体層序の第Ⅱ層・Ⅲ層である。本址は南西壁の上部をM3号溝状遺構に破壊されている。南半は調査区域外である。

平面規模は、南壁4.0m・東壁検出長2.5m・西壁検出長1.9mを測る。確認面からの壁高は、

東壁で50cmを測る。

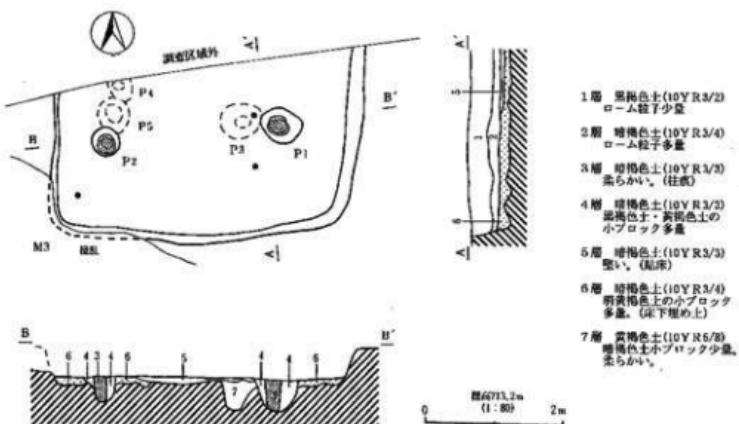
主軸方位は、N-5°-Eを指す。

ピットは5個検出された。P1・P2は主柱穴であろう。P1の径60cm深さ40cm、P2は径20cm深さ30cmを測る。P1・P2から柱痕が確認され、柱痕径は20cmである。P3・P4は貼床下から検出された。径は30cm前後で、深さは30cmを測る。

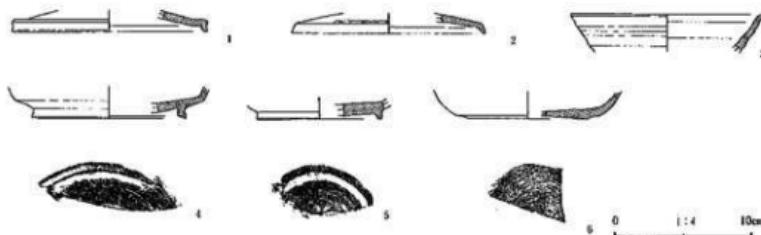
床面は堅く平坦であった。貼床は中央にみられた。床下の掘り方は10~15cmを測る。

遺物は、須恵器蓋・壺、土師器壺・甕、磨石が図示できた。(第65・66図)

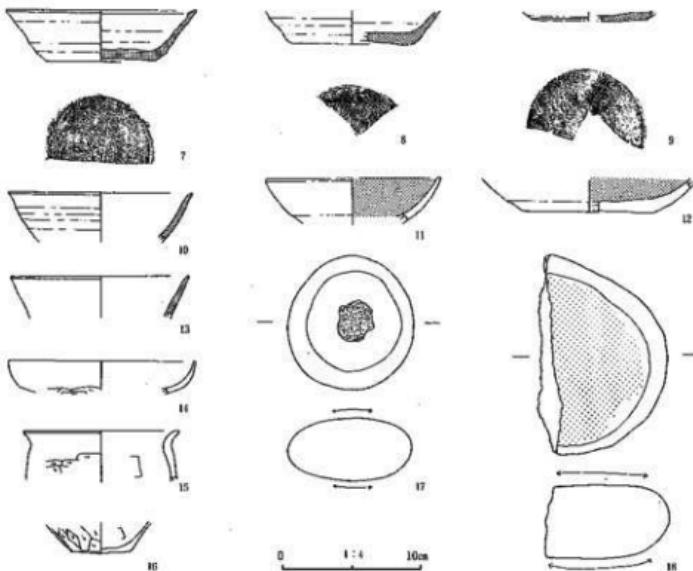
本住居址は、8世紀後半に位置づけられよう。



第64図 H28号住居址実測図



第65図 H28号住居址出土遺物実測図



第66図 H28号住居址出土遺物実測図

(29) H29号住居址

本住居址は、くー7グリッドから検出された。追構の確認面は全体層序の第Ⅱ層・Ⅲ層である。本址は他造構と重複関係があり、H24号住居址の東壁を破壊し、H27号住居址に西壁の上部を破壊される。また、東北隅はM3号溝状造構の破壊を受け、南東部は調査区域外である。

平面規模は、北壁検出長4.3m・東壁検出長0.6m・西壁検出長2.2mを測る。確認面からの壁高は、30cmを測る。

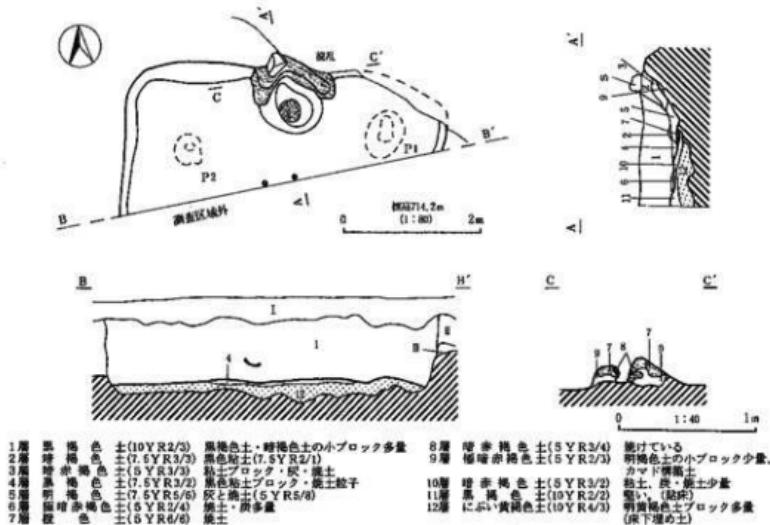
ピットは2個が床下から検出された。P1は径60cm深さ40cm、P2は径30cm深さ40cmを測る。

床面は部分的に貼床されるものの堅く平坦であった。床下の掘り方は15~20cmで黄褐色土が埋められていた。

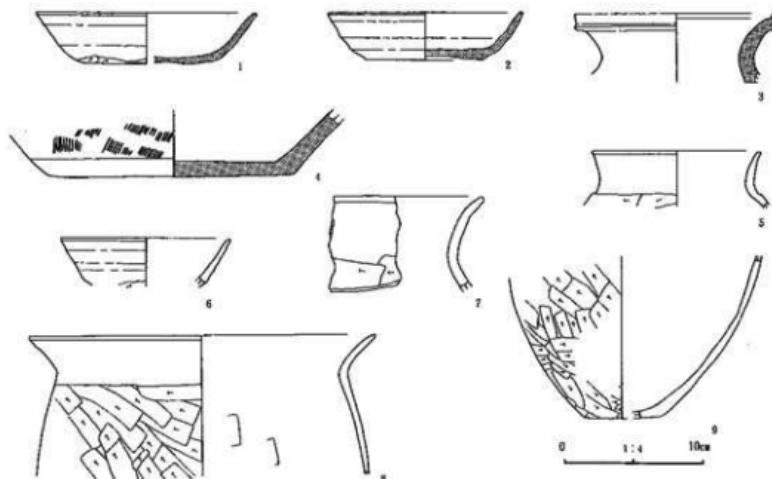
カマドは北壁の中央部に設置されていた。煙道部の粘土中には、砾（安山岩）が埋め込まれており、極赤褐色土の粘土で覆われて構築されていた。

出土遺物は、須恵器壺・甕、土師器甕が図示できた。（第68図）68-4の須恵器甕は、調査区境、7の土師器甕はカマド内、他は覆土から出土した。

本住居址は、9世紀前半に位置づけられよう。



第67図 H29号住居址実測図



第68図 H29号住居址実測図

(30) H30号住居址

本住居址は、き-16・17グリッドから検出された。遺構の確認面は全体層序の第Ⅲ層である。

本址の南半は調査区域外である。東北隅は攪乱されている。

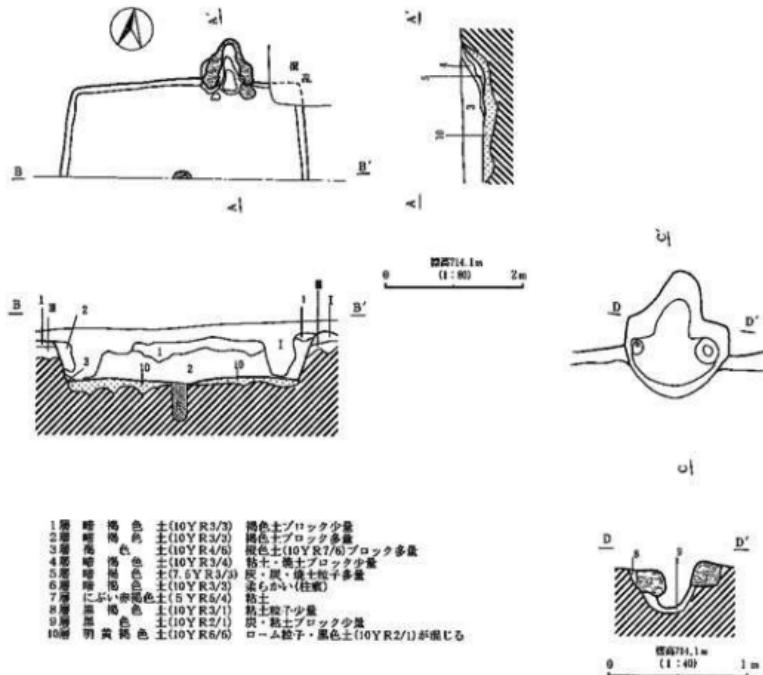
平面規模は、北壁検出長2.8m・東壁検出長1.1m・西壁検出長1.3mを測る。

確認面からの壁高は、20cmを測る。

カマドを中心とする主軸方位は、N-4°-Wを示す。

ピットは、調査区域より1個が検出された。柱痕がみられ、径24cm深さ64cmを測る。

床面は貼床され堅く平坦であった。床下の掘り方は4~20cmで、ローム粒子・黒褐色土が混じる明黄褐色土が埋められていた。



第60図 H30号住居址実測図

カマドは北壁の東よりに設置されていた。火床・袖部とも北壁辺上より外にでている。カマド袖部の掘り方は、方形である。東の袖部は、面取り粗石を芯材とし、にぶい赤褐色の粘土で覆って構築されていた。袖部先端の小ピットには、袖石が埋め込まれていたのであろう。

出土遺物は、土師器1点が図示できたのみである。

(第70図)

土師器甌かと思われる。覆土第2層から出土した。

本住居址の、時期等は不明である。

(31) H31号住居址

本住居址は、く・けー14・15グリッドから検出された。遺構の確認面は全体層序の第Ⅲ層である。本址は他遺構と重複関係があり、H32号住居址の西側を破壊している。南半は調査区域外である。

平面規模は、北壁3.9m・東壁検出長1.7m・西壁検出長2.1mを測る。

確認面からの壁高は30~40cmを測る。覆土は2層に分層され、自然堆積状況をみせている。

カマドを中心とする主軸方位は、N-2°-Wを指す。

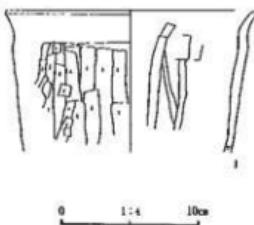
ピットは11個検出された。P1~P8は壁直下から検出され、壁に沿うように配置されている。P9~P11は貼り床下から検出された。P1・P3は径40cm、深さはP1が40cm、P3は深さ30cmを測る。P2・P4~P8は径が小さく12~20cmで、深さは20~40cmを測る。P1からは、径14cmの柱痕が確認された。床下のP9は径60cm深さは40cmを測り、P10・P11は径40cm深さ40cm前後を測る。

床面は堅く平坦であった。床下の掘り方は15~30cmを測り、明黄褐色土の小ブロックが多量に混じる暗褐色土が埋められていた。

カマドは北壁のやや西よりに設置されていた。煙道部が比較的よく残っている。煙道部の掘り方は、北壁の外の地山を東西60cm南北40cm、断面「U」字形に20cmほど掘り込んでいる。そこへ暗褐色の粘土と橙色土の小ブロックが混じる暗褐色土を用い、形状を整えている。煙道部入り口には、芯材とした礫片がみえる。

遺物は、須恵器甌、土師器甌・壺、灰彩陶器が図示できた。(第72図)

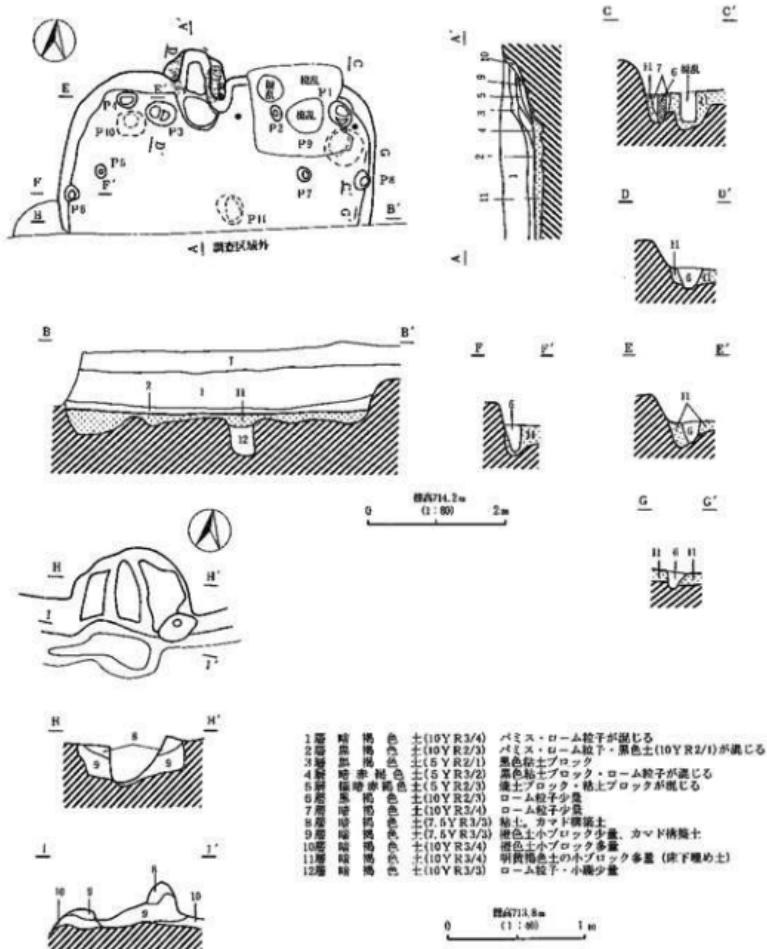
72-2の土師器甌・1の土師器(甌または小形甌)はカマド東脇から出土した。9の土師器甌



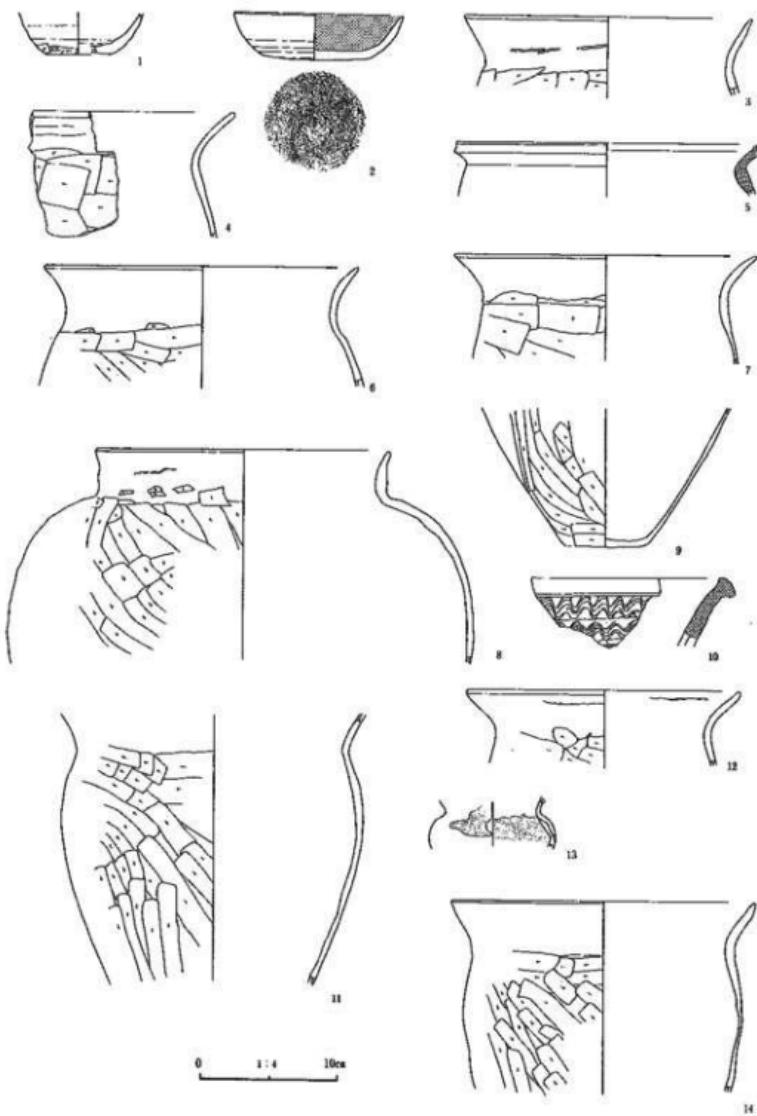
第70図 H30号住居址出土遺物実測図

は東北隅の壁際から検出された。14の土師器甕は、カマド内からの出土である。1の上師器、13の灰彩陶器は混入であろうか。

本住居址は、8世紀後半に位置づけられよう。



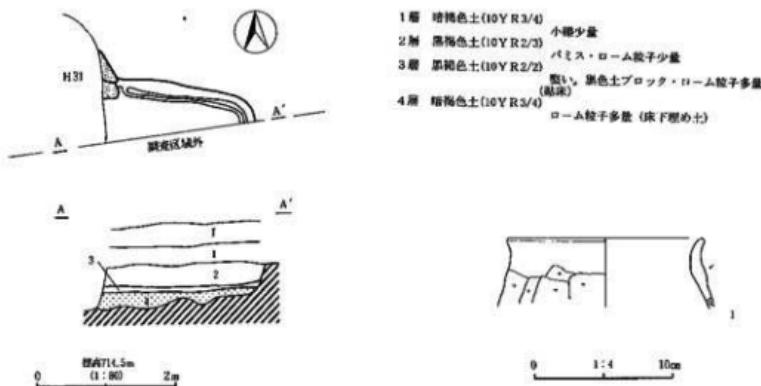
第71図 H31号住居址実測図



第72图 H31号住宅出土遗物实测图

(32) H32号住居址

本住居址は、き・く-15グリッドから検出された。遺構の確認面は全体層序の第Ⅲ層である。本址は西側の大半をH31号住居址に破壊されている。南半は調査区域外である。北壁の半分2.0mほどが確認できただけで、平面規模・平面形態等不明である。確認面からの壁高は、北壁で40cmを測る。覆土は自然堆積状況を示す2層が観察できた。床面は貼り床され、堅く平坦であった。床下の掘り方は10~20cmを測り、暗褐色土が埋められていた。遺物は、土師器甕が図示できた(第73図)。本住居址の時期は、8世紀後半(H31号住居址)より先行する。



第73図 H32号住居址実測図・出土遺物実測図

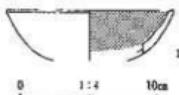
(33) H33号住居址

本住居址は、く-9・10グリッドから検出された。遺構の確認面は全体層序の第Ⅲ層である。本址の大半は、調査区域外にのびる。カマドから北西コーナーにかけてのみ検出できた。北壁検出長3.2m・西壁検出長1.3mを測る。カマドの位置が中央とすれば、北壁長は5.5mと推定できる。確認面からの壁高は40cmを測る。覆土は2層に分層され、自然堆積状況をみせている。

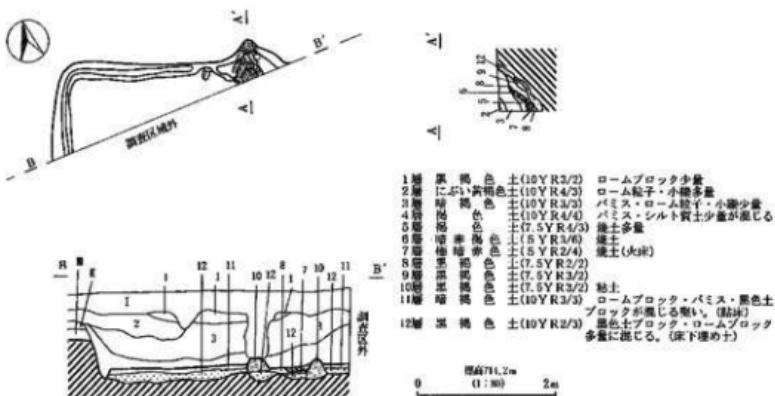
カマドを中心とする主軸方位は、N-12°-Eを指す。床面は、貼床され堅く平坦であった。床下の掘り方は10cmを測り、黑色土ブロックロームブロックが多量に混じる黒褐色土が埋められていた。カマドは、ほとんど原形をとどめていない。付近からの面取り軽石の出土と土層断面から袖部は、礫を芯材とし黒褐色の粘土で覆い構築されていたものとみられる。

遺物は、須恵器甕、土師器甕（器身の厚い）、土師器鉢（内面黒色処理）・環が少量出土している。第74図の土師器環が図示できた。覆上3層より出土した。

本住居址は、7世紀後半に位置づけられようか。



第74図 H33号住居址出土遺物実測図



第75図 H33号住居址実測図

(34) H34号住居址

本住居址は、えー3グリッドから検出された。遺構の確認面は全体層序の第Ⅱ・Ⅲ層である。本址の大半は、耕作等の影響を受けている。東南部は調査区域外にのびる。他遺構とも重複しており、H17・H18号住居址に北側に破壊されている。

壁は、西壁が1.6m確認されたにすぎない。確認面からの壁高は20cmを測る。

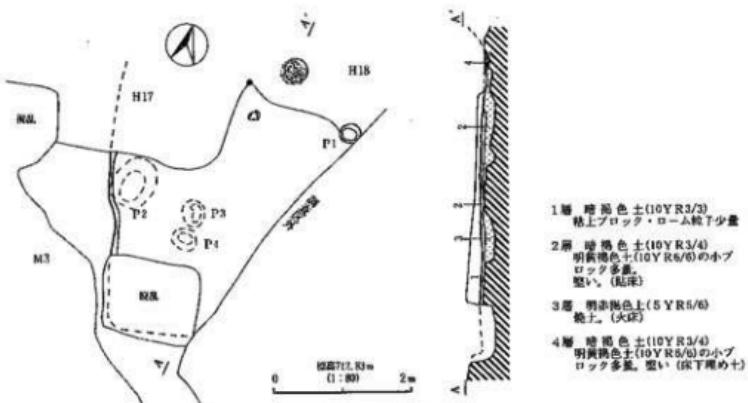
床面は、貼床され堅く平坦であった。床下の掘り方は4~20cmを測り、明黄褐色土の小ブロックが多量に混じる暗褐色土が埋められていた。

ピットは4個検出された。P1は径40cm深さ20cm、P2~P4は床下から検出された。P2は径60cm深さ20cm、P3・P4の径は30cm前後、深さ40cmを測る。

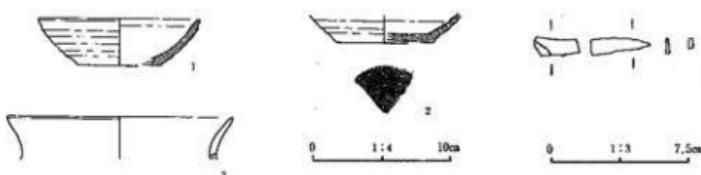
火床がH18号住居址の床面下から検出され、カマドが北壁に設置されていたことがわかる。

遺物は、77-2の須恵器甕、1の土師器甕、3の土師器甕、4の刀子が図示できた。

1～4とも覆土上部からの出土で、混入遺物の可能性もある。
本住居址も所産時期は、H17号住居址（8世紀前半）より先行する。



第76図 H34号住居址実測図



(35) H35号住居址

本住居址は、き-5・6グリッドから検出された。遺構の確認面は全体層序の第Ⅲ層である。本址は他遺構と重複関係がありM3号溝状遺構に東・北壁の一部を、T1号特殊遺構に破壊されている。北壁の西側は耕作の擾乱を受けている。

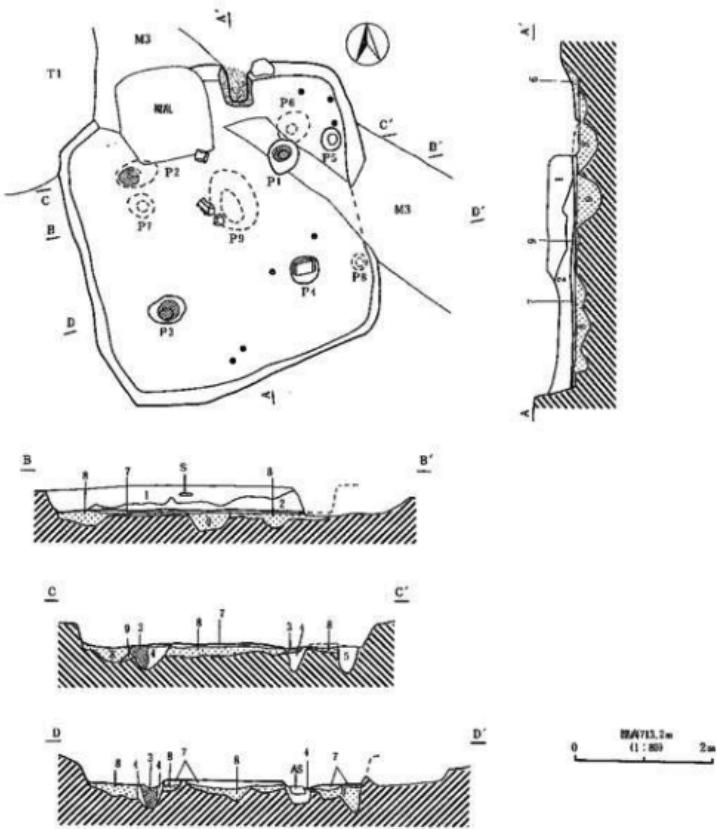
平面規模は、北壁4.1m・南壁3.7m・東壁3.7m・西壁3.8mを測る。

平面形態は、隅丸方形を呈している。確認面からの壁高は、20～30cmを測る。

覆土は2層に分層され、自然堆積状況をみせている。

カマドを中心とする主軸方位は、N-14°-Wを指す。

ピットは9個検出された。P1～P4は、主柱穴である。P1の径は20cm深さは40cm、P2は



- | | |
|---|--|
| 1層 暗褐色 土 (10YR 3/3)
褐色土の小ブロック多量 | 6層 黒褐色 土 (7.5Y R 3/2)
粘土 |
| 2層 暗褐色 土 (10YR 3/3)
褐色土の小ブロック多量 | 7層 黑褐色 土 (7.5Y R 2/2)
堅い。(粘土) |
| 3層 暗褐色 土 (10YR 3/4)
泥らかい。(粘土) | 8層 暗褐色 土 (7.5Y R 2/3)
明褐色土 (7.5Y R 5/6) の小ブロック
少量 |
| 4層 黄褐色 土 (10YR 5/6)
泥らかい。 | (未下埋め土) |
| 5層 黄褐色 土 (10YR 4/6)
暗褐色土 (10YR 3/3) の小ブロック
少量 | 9層 暗褐色 土 (10YR 4/6)
褐色土 (10YR 4/4) と
明褐色土 (7.5Y R 5/6) の小ブロック
多量(未下埋め土) |

第78図 H35号住居址実測図

柱痕が認められ、径26cmを測る。P 2の貼り床下の掘り方は、径60cmで深さは40cmを測る。P 3の径40cm、深さは40cmを測る。P 4は径40cm深さは30cmを測り、ピット内上部からは長さ30cm厚さ10cmの扁平な安山岩が置かれていた。東壁中央直下のP 5は径20cm深さ40cmを測る。P 6～P 9は床面下より検出され、P 6～P 8の径は、20～40cmで深さは30cmを測る。P 9はカマドの前方から検出され、径70cm深さ40cmを測る。

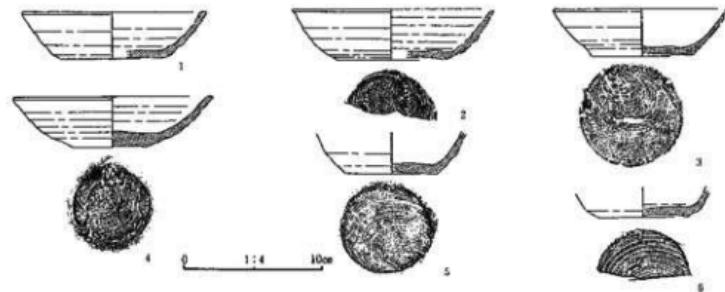
床面は堅く平坦であった。床下の掘り方は4～40cmを測り、西壁よりは他所より深めに掘られている。貼り床下には、明褐色土の小ブロックが多量に混じる極暗褐色土、褐色土が埋められていた。

カマドは北壁のやや東よりに設置されていた。ほとんどが溝と攪乱により破壊されて、東袖部のみ残っていた。長さ30cm幅15cmの大きな面取り軽石と長さ15cm幅10cmの面取り軽石が、床面の中央付近にみられた。地山を一部掘り残し袖の基部とし、さらに、面取り軽石を芯材にし、褐色の粘土で覆い構築されていたのである。

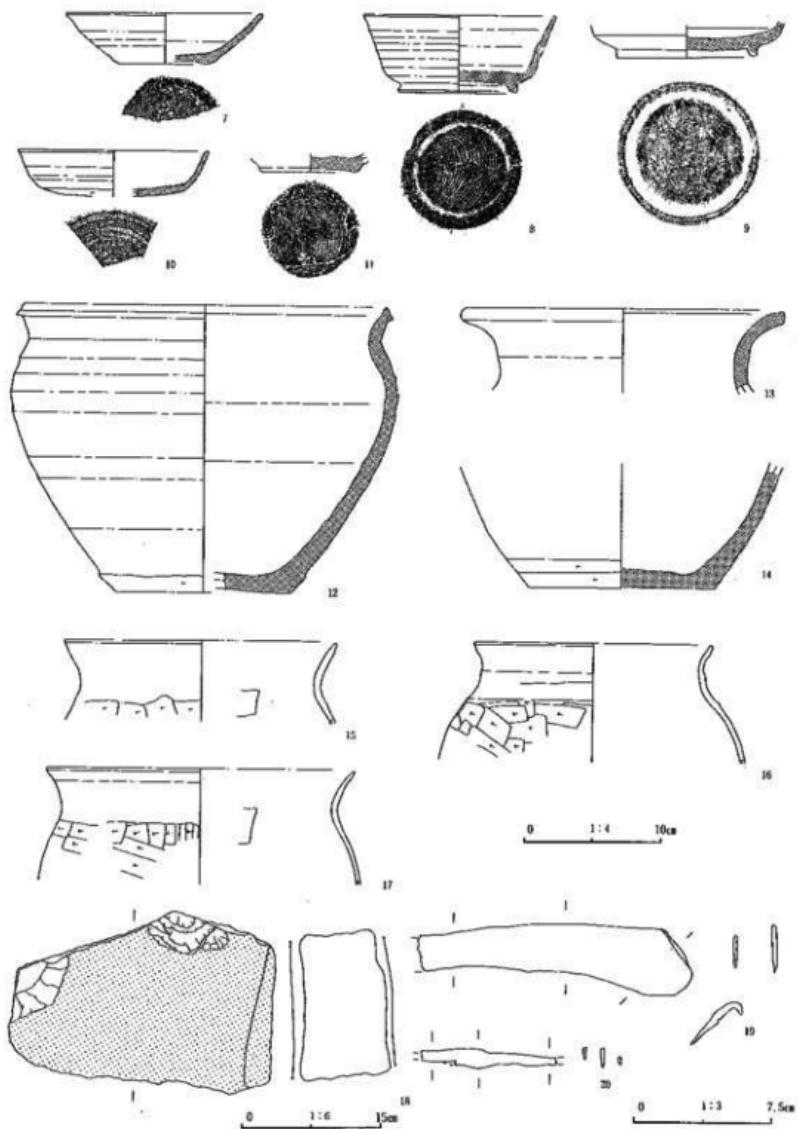
遺物は、須恵器坏・甕、土師器甕、鎌、刀子、台石が図示できた。(第79・80図)

80-8・9の須恵器坏が東北コーナー床面から、79-4の須恵器坏は東北壁直下の床面から、80-10の須恵器甕は南壁中央付近の床面から、80-19・20の鎌・刀子はP 4脇の床面から、それぞれ出土した。79-15～17の土師器甕、80-11・12の須恵器甕・坏の破片は、カマド東の袖部から検出された。80-2・3・5～7の須恵器坏は覆土から出土し、80-10の須恵器坏は、貼床下から出土した。両面に磨り面や敲打痕がみられる80-10はP 4内から出土した。

本住居址は、9世紀前半に位置づけられよう。



第79図 H35号住居址出土遺物実測図



第80圖 H35号住宅址出土遺物測量圖

第2節 掘建柱建物址

(1) F 1号掘建柱建物址

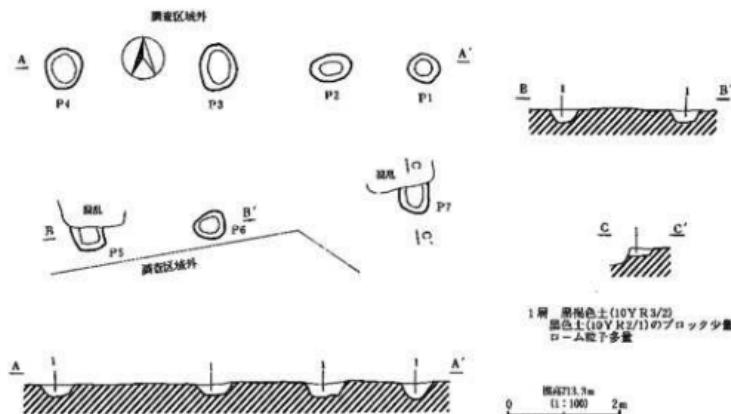
本建物址は、おー6・7グリッドから検出された。本址東側にH 5号住居址があり、南東にはH 6号住居址がある。P 5・P 7は攪乱により土が破壊されている。本址の北側・南側が調査区城外となるため、堀間範囲が広がることも考えられる。

建物の平面形態は、桁行3間・梁間1間の長方形で側柱式の柱配置をとる。

平面規模は、桁行7.5m・梁間3.6mを測り、長軸(桁行)の方位は、Eを指す。

柱間寸法は、桁行1.5m・梁間2.0mである。柱穴は円形を基調とし、その規模はP 1の径50cm深さ25cm、P 2の径70cm深さ25cm、P 3の径48cm深さ20cm、P 4の径65cm深さ20cm、P 5の径55cm深さ20cm、P 6の径55cm深さ20cm、P 7の径50cm深さ15cmを計測する。

遺物は全く出土せず、本址の帰属時期は不明である。



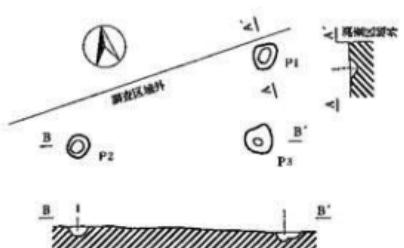
第81図 F 1号掘建柱建物址実測図

(2) F 2号掘建柱建物址

本建物址は、えー9・10グリッドから検出された。本址南側にH 5号住居址があり、南東にはH 11号住居址がある。H 8号住居址と重複し、東壁・床の一部を破壊している。

本址は、さらに、北側へひろがるものとみられる。

建物の平面形態、および、規模などは限られた範囲等からは不明である。柱間寸法は東西3.2



1層 黒褐色土(10YR3/1)
黑色土(10YR3/1)のブロック少數。
□—ム粒子少數

標高713.4m
(1:100)
2m

m、南北1.5mを計測する。

柱穴は円形を基調とし、P 1～P 3の規模は、径35～50cm、深さは15cm前後を計測する。

遺物は全く出土せず、本址の帰属時期は、不明である。下限はH 8号住居址である。

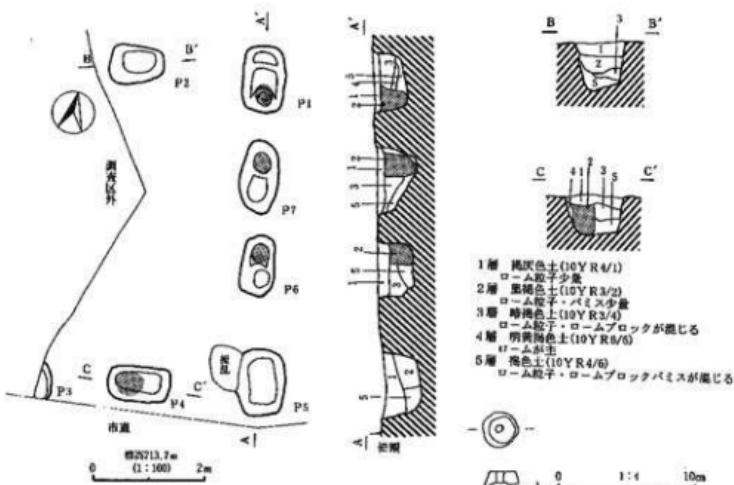
第82図 F 2号掘建柱建物址実測図

(3) F 3号掘建柱建物址

本建物址は、さ・し-20・21グリッドから検出された。本址北側にM 1号溝状遺構があり、H 16号住居址がある。西側が調査区域外となる。

建物の平面形態は、桁行3間・梁間2間の長方形で側柱式の柱配置をとる。

平面規模は、桁行6.6m・梁間5.5mを測り、長軸(桁行)の方位は、N-5°-Wを指す。



第83図 F 3号掘立柱建物址実測図・出土遺物実測図

柱間寸法は、桁行1.6m・梁間2.0mである。柱穴は長方形を基調とし、その規模は、P 1 の長辺115cm深さ60cm、P 2 の長辺90cm深さ80cm、P 4 の長辺100cm深さ70cm、P 5 の長辺120cm深さ120cm、P 6 の長辺100cm深さ60cm、P 7 の長辺110cm深さ75cmを計測する。

P 1・P 4・P 6・P 7 の柱穴からは、柱痕が認められ、径30~40cmを測る。

遺物はP 4から須恵器壺、土師器壺の小片が出土した。P 5からは、第83図に示した滑石製の石製品が検出された。小型すぎるが筋錘車であろうか。

本址の帰属時期は、不明である。

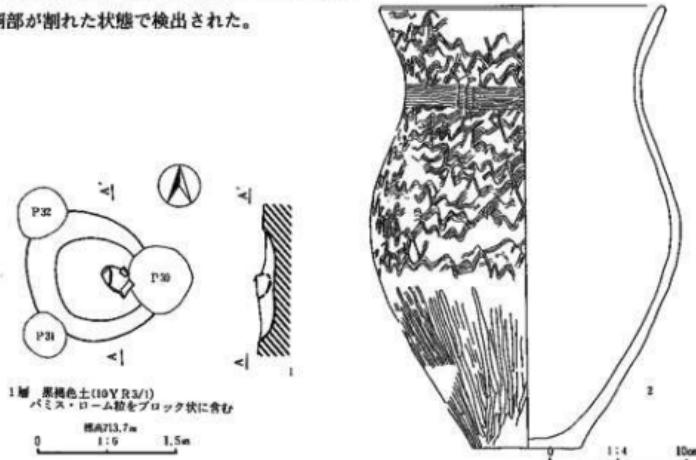
第3節 土 坑

(1) D 1号土坑

本址は、おー6グリッドから検出された。遺構の確認面は、全体層序の第Ⅱ層である。P31・P32・P39のピットに一部を破壊されている。

東西1.3m南北1.4mを測る円形を呈する。確認面からの深さは15cmで耕作による削平をかなり受けている。壁は、平坦な底面より緩やかに立ち上がる。覆土は1層で、バミス・ローム粒子が混じる黒褐色土が堆積していた。

底面直上から第84図に示した弥生時代後期の壺が出上した。底面の直上から横位の状態で口辺部を南東に向け、胴部が割れた状態で検出された。



第84図 D 1号土坑実測図・出土遺物実測図

第4節 特殊遺構

(1) T 1号特殊遺構

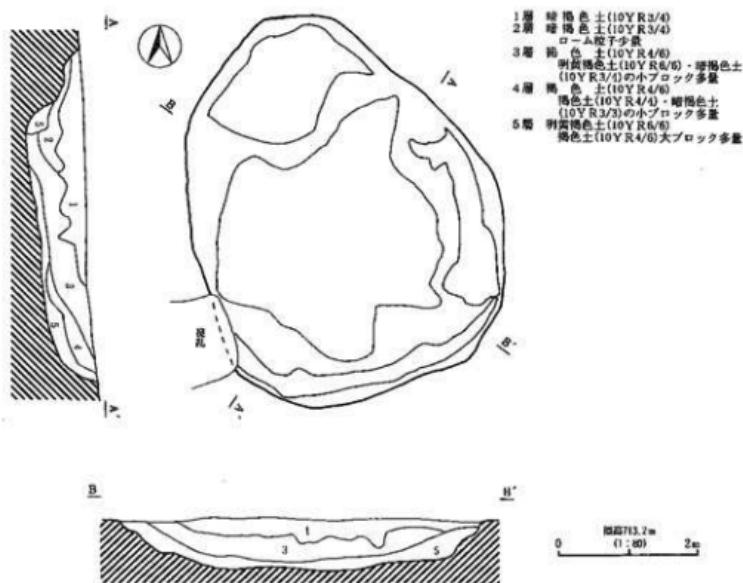
本址は、か・きー4・5グリッドから検出された。H35号住居址北西隅、M 3号溝状遺構の一部を破壊する。

平面形態は、長径7.0m・短径5.5mを測る楕円形を呈する。確認面からの壁高は、0.7m~1.0mで、底面より緩やかに立ち上がる。

断面形状は皿状を呈し、底面の中央でもっとも深くなる。北壁と東壁には、テラス状の平坦面がある。

覆土は5層に分層され、全体に人為的堆積状況といえる。特に第3層の褐色土は、明黄褐色のローム粒子・ロームブロックが混じり顕著なものである。

遺物は、須恵器坏・甕、土師器坏・甕が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。



第85図 T 1号特殊遺構実測図

第5節 溝状遺構

(1) M 1号溝状遺構

本址は、く・けー19・20グリッドから検出された。
遺構は、東西の調査区域外にのびている。

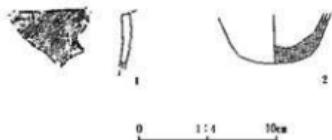
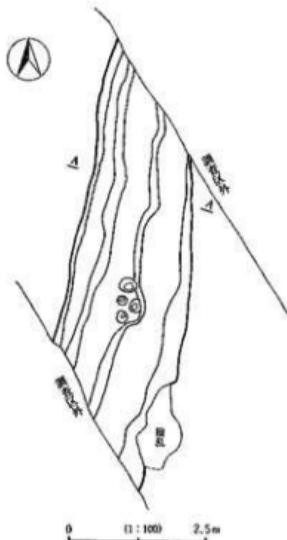
H15号・H16号住居址を破壊し、壁面の一部は、搅乱に破壊を受けている。

規模は幅1m前後、最深部0.75mを測り、底面幅0.5m前後を計測する。

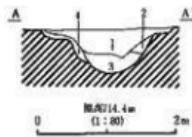
断面形状は「U」字形を呈し、両壁上部にテラスがみられる。

遺物は、第86図の2の須恵器瓶の底部、1の布目瓦片が図示できた。

本址の所産時期は、不明である。



第86図 M 1号溝状遺構出土遺物実測図



第86図 M 1号溝状遺構実測図

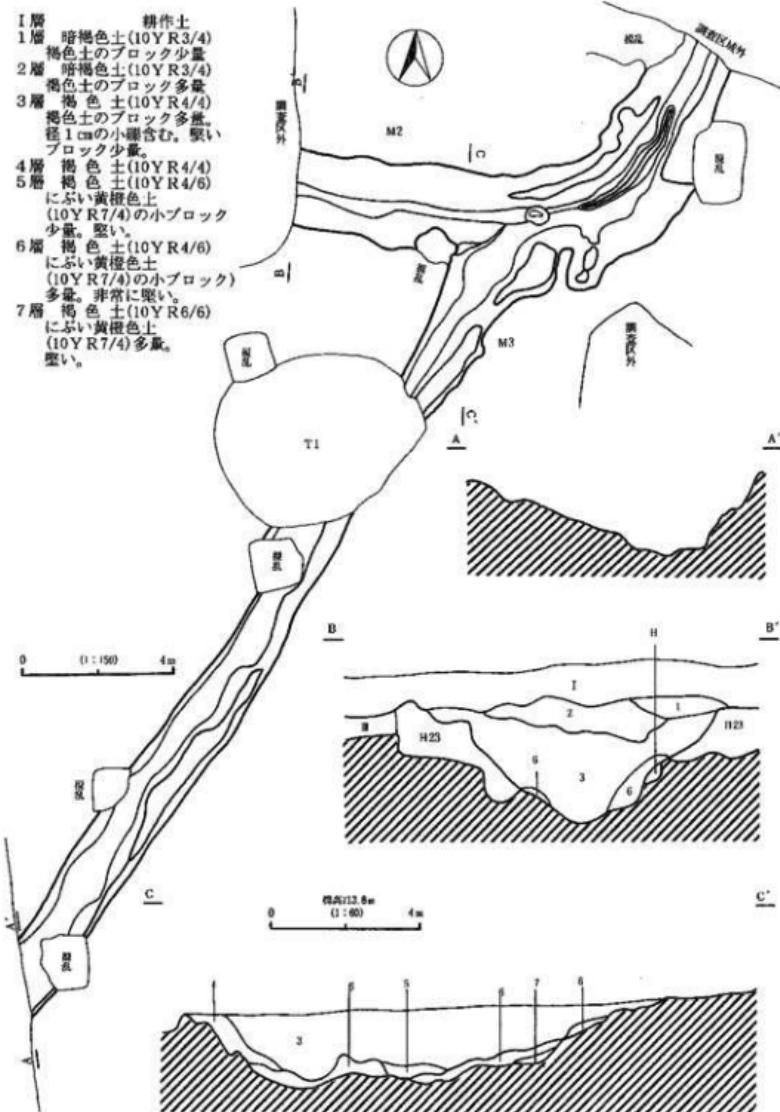
1層	暗褐色土 (10Y R3/4)	褐色土の小ブロック少量
2層	褐色土 (10Y R2/2)	
3層	褐色土 (10Y R3/1)	ローム粒子少量
4層	褐色土 (10Y R3/2)	ローム粒子・ローム ブロックが混じる

(2) M 2号・3号溝状遺構

M 2号・3号溝状遺構は、調査区の西部から検出された。M 2号溝状遺構はH20号・H23号住居址を破壊

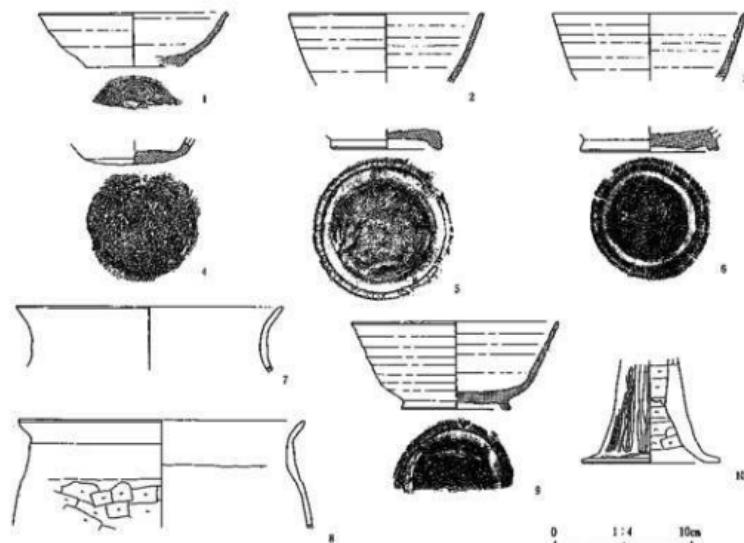
し、M 3号溝状遺構はH24号・H28号・H29号・H35号住居址を破壊し、T 1号特殊遺構に一部を破壊される。両溝状遺構は、おー3グリッドで交差する。交差部分の土層を精査したが明確な新旧関係は、認められなかった。M 2号溝状遺構は幅1.5~2.5m、最深部1.6mを測る。覆土第3層の下部にレンズ状に堆積した砂層がみられ、水の流れがあったことを示している。M 3号溝状遺構は幅0.7~0.8m、最深部0.7mを測る。

M 2号溝状遺構は南方へ向けてのびているが、その先60mには方向・規模を同一にする若宮遺



第88図 M 2号・M 3号溝状造構造図

跡Ⅰで検出されたM1号溝状造構がある。両造構が連続する同一の溝状造構とみるのが妥当であろう。遺物は、須恵器坏、土師器高坏・甕が図示できた。(第89図) H28号住居址・H35号住居址と重複する位置からの出土が多い。若宮遺跡ⅠのM1号溝状造構からは、中世の瓦器が出土しており、両溝状造構の廃絶時期も中世に求められよう。



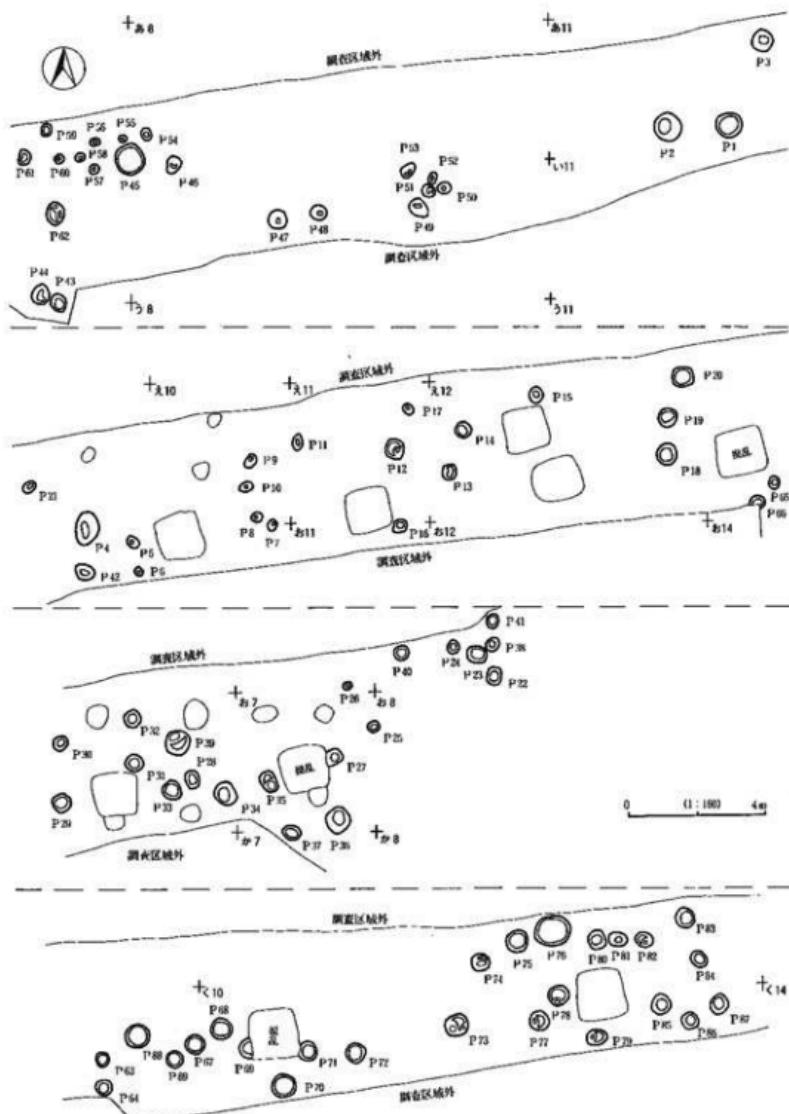
第89図 M2・3号溝状造構出土遺物実測図

第6節 ピット群

本遺跡から検出されたピットの総数は、90個である。調査全体図(第1図)でもわかるように限られた範囲であり、これらのピットは、いくつかの掘建柱建物址を構成していたとも考えられる。

各ピットの大半は円形を呈し、そのほとんどが径20cm深さ10~20cm前後である。P45・P76は径60cm前後を測る。

P63・P66・P68・P76・P80の各ピットからは、須恵器甕、土師器甕の小片が出土している。P64からは、須恵器坏の口辺部片が検出された。

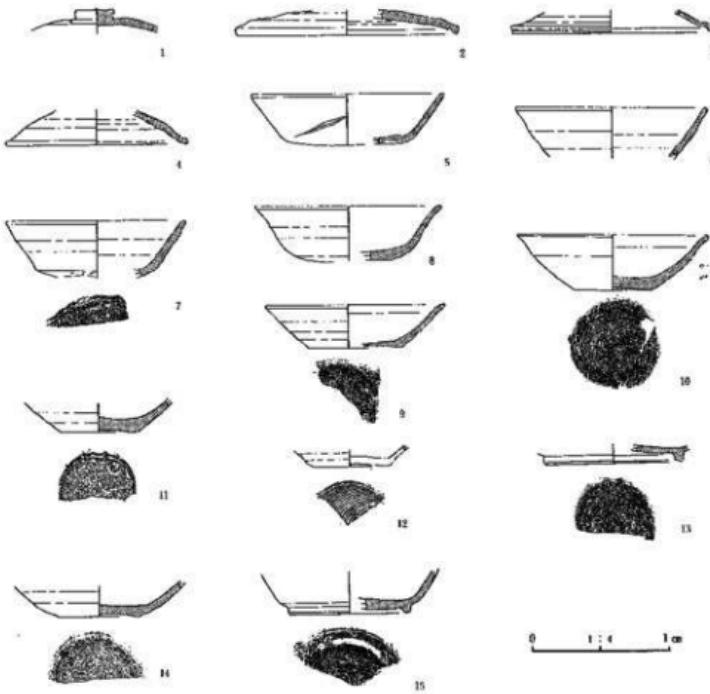


第90図 南近津遺跡ピット群実測図

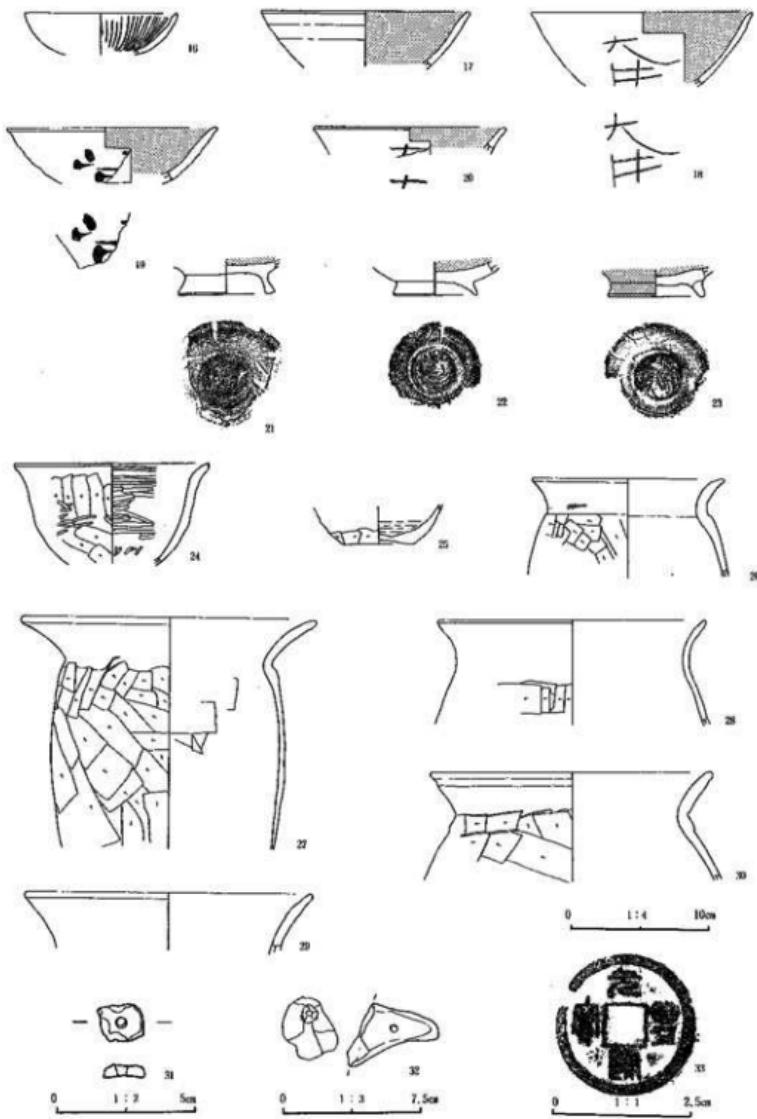
第7節 グリッド・表採遺物

遺構確認時において須恵器蓋・环、土師器环・鉢・甕、土師器把手付壺（ミニチュア）、白玉、錢貨が出土した。（第91・92図）

グリッドラー-6から出土した内面黒色処理の土師器环には、「大井」と刻書されている。判読できないが、グリッドカ-3からも墨書きされた土師器环（92-18・19）が出土している。92-32の白玉はグリッドエ-17から、92-32のミニチュア壺の把手は、グリッドカ-3から出土した。92-33の北宋錢元豊通宝（初銭年 1078年元豊元年）は、グリッドカ-3から出土した。



第91図 グリッド・表採遺物実測図



第92図 グリッド・表探遺物実測図

図 版





H10号住居址付近近景（北方より）



2. H30号住居址付近近景（東方より）



3. H2号住居址付近近景（西方より）



1. H-1号住居址（南方より）



2. H-2号住居址掘り方（南方より）



1. H 1号住居址遺物出土状況（南方より）



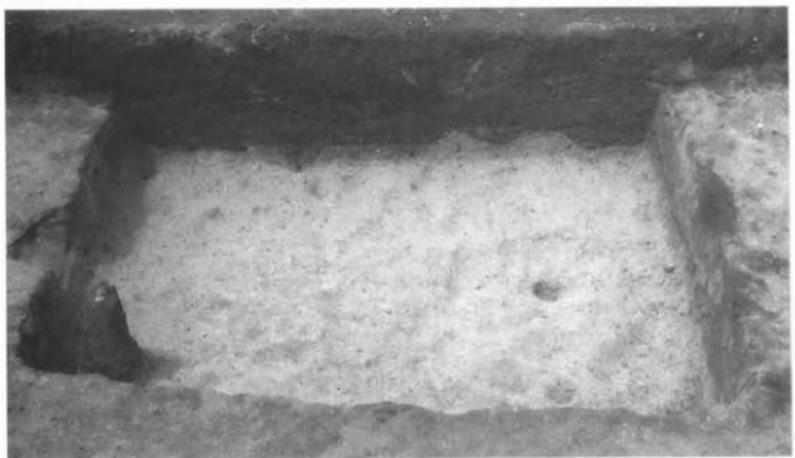
2. H 1号住居址カマド（南方より）



3. H 1号住居址カマド掘り方（南方より）



4. H 2号住居址（南方より）



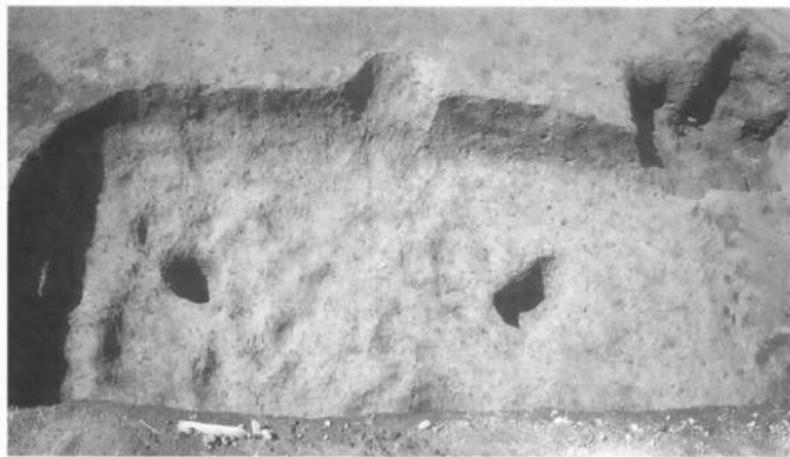
1. H 2号住居址掘り方（南方より）



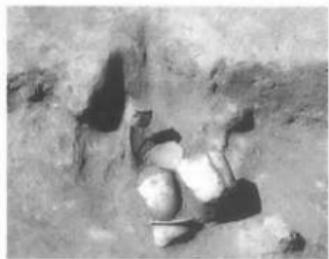
2. H 2号住居址遺物出土状況（南方より）



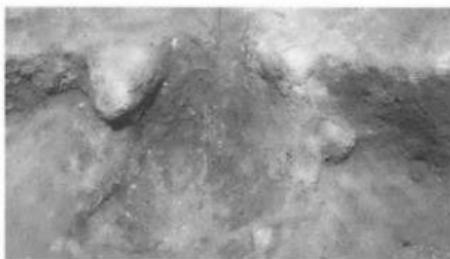
3. H 3号住居址（南方より）



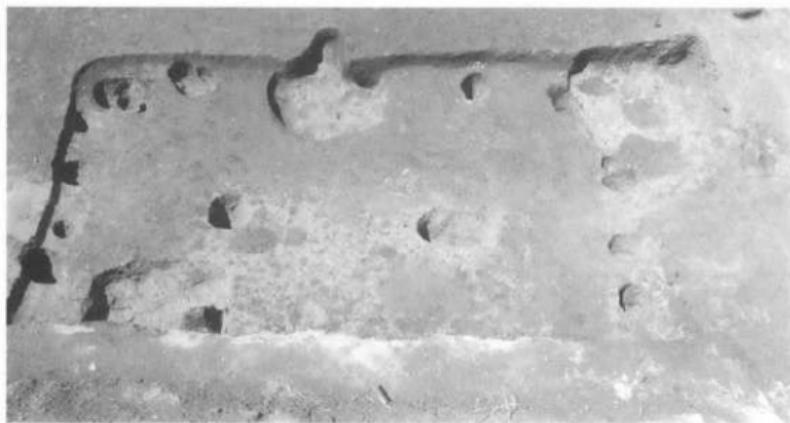
1. H 3号住居址掘り方（南方より）



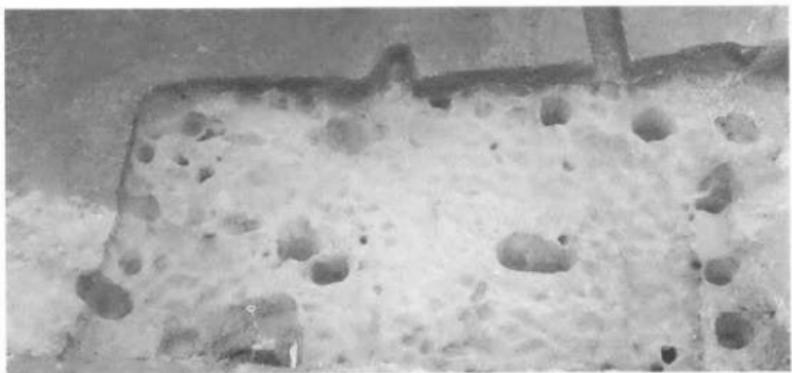
2. H 3号住居址カマド（南方より）



3. H 3号住居址カマド（南方より）



4. H 4号住居址（南方より）



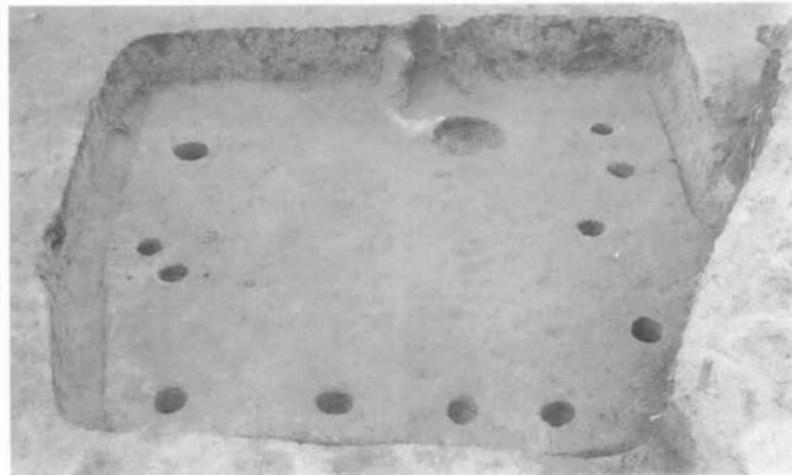
1. H4号住居址掘り方（南方より）



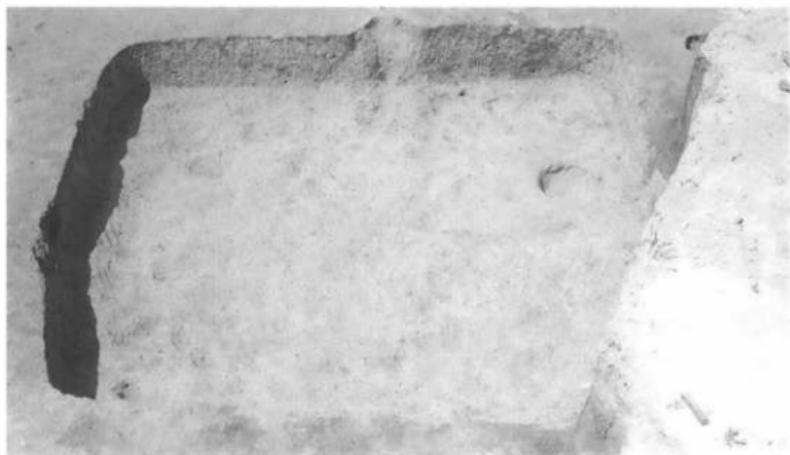
2. H4号住居址カマド（南方より）



3. H4号住居址遺物出土状況（西方より）



4. H5号住居址（南方より）



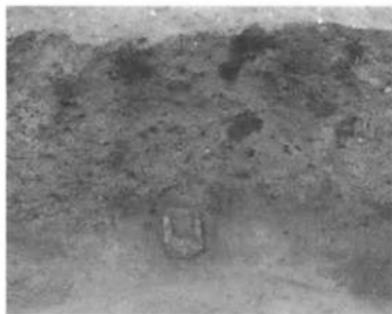
1. H 5号住居址掘り方（南方より）



2. H 5号住居址カマド（南方より）



3. H 5号住居址カマド掘り方（南方より）



4. H 5号住居址遺物出土状況（東方より）



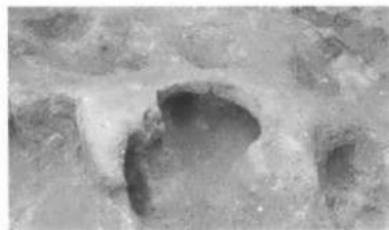
5. H 5号住居址遺物出土状況（東方より）



1. H 6号住居址（南方より）



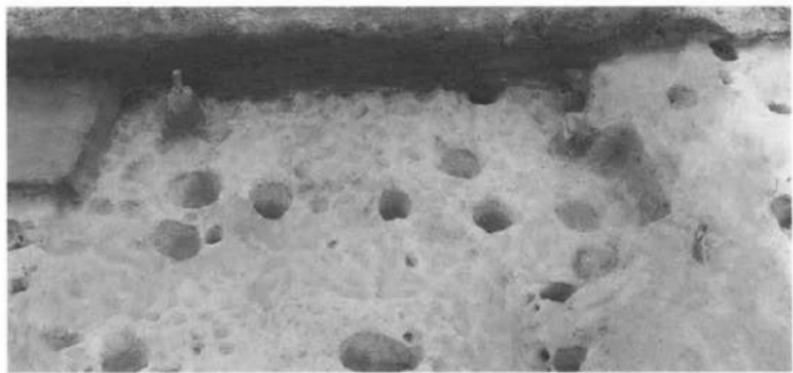
2. H 6号住居址掘り方（南方より）



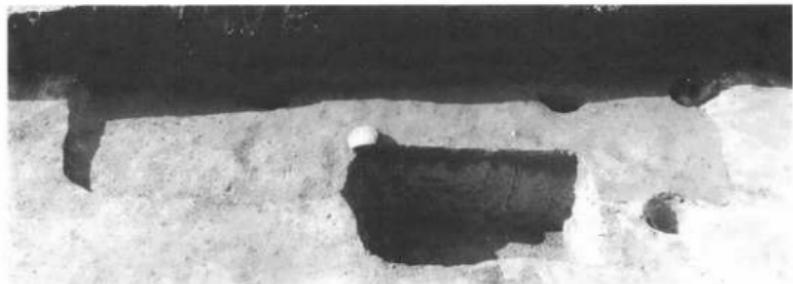
3. H 6号住居址カマド（南方より）



4. H 6号住居址カマド掘り方（南方より）



1. H 7号住居址（南方より）



2. H 8号住居址（南方より）



3. H 8号住居址掘り方（南方より）



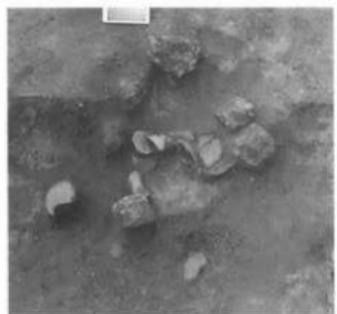
4. H 8号住居址遺物出土状況（南方より）



1. H9号住居址（南方より）



2. H9号住居址掘り方（南方より）



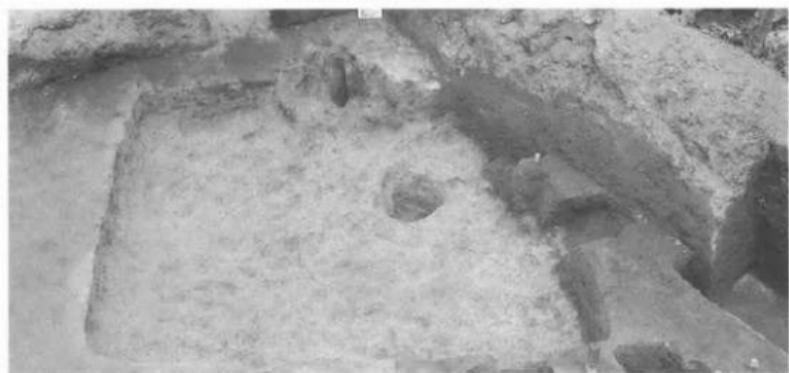
1. H9号住居址カマド（南方より）



2. H9号住居址カマド掘り方（南方より）



3. H10号住居址（南方より）



4. H10号住居址掘り方（南方より）



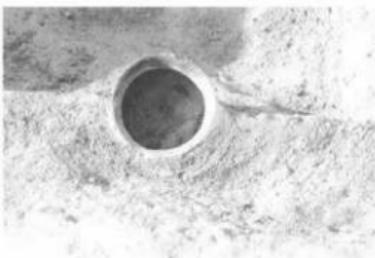
1. H10号住居址フタ付埋甕（北方より）



2. H10号住居址埋甕出土状況（北方より）



3. H10号住居址甕出土状況（北方より）



4. H10号住居址埋甕（南方より）



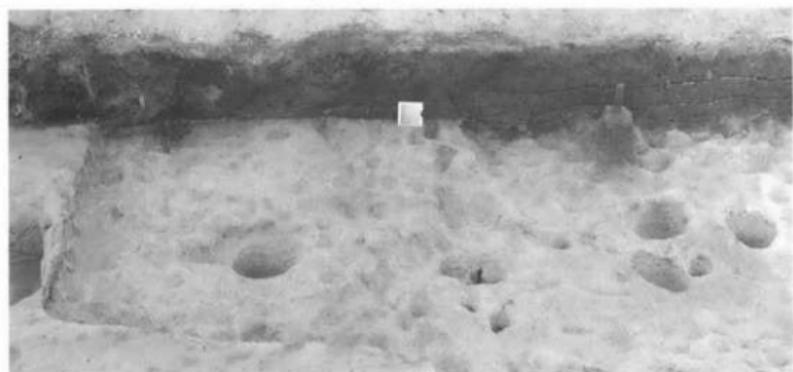
5. H11号住居址（南方より）



5. H11号住居址掘り方（南方より）



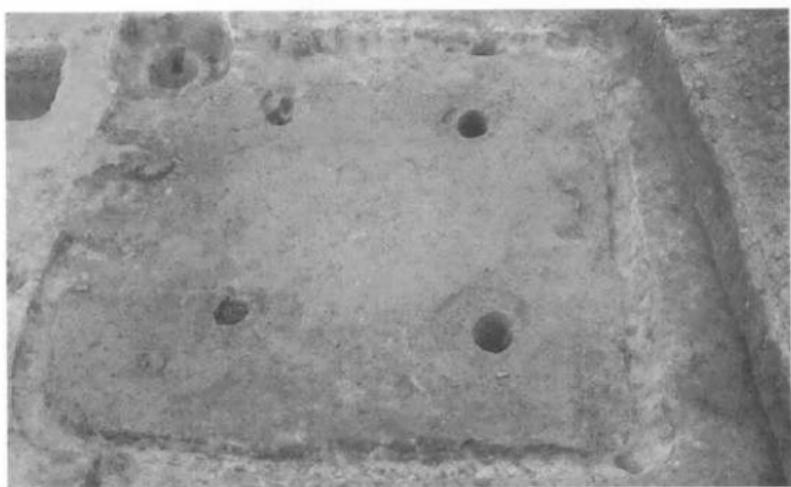
1. H12号住居址（南方より）



2. H12号住居址掘り方（南方より）



3. H12号住居址遺物出土状況（北方より）



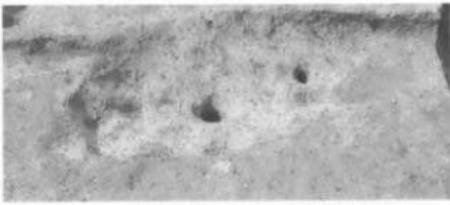
1. H13号住居址（西方より）



2. H13号住居址掘り方（南方より）



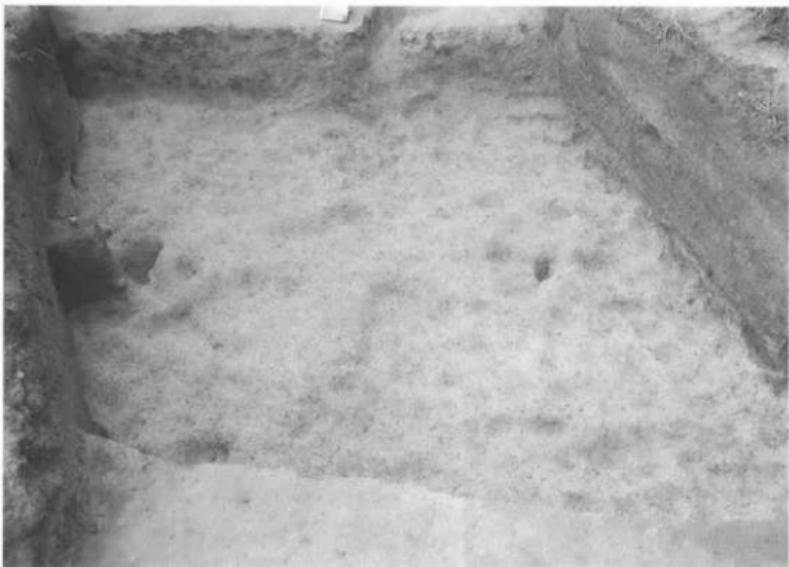
3. H13号住居址カマド（南方より）



4. H13号住居址カマド掘り方（南方より）



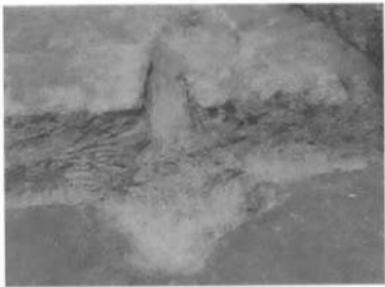
1. H14号住居址（南方より）



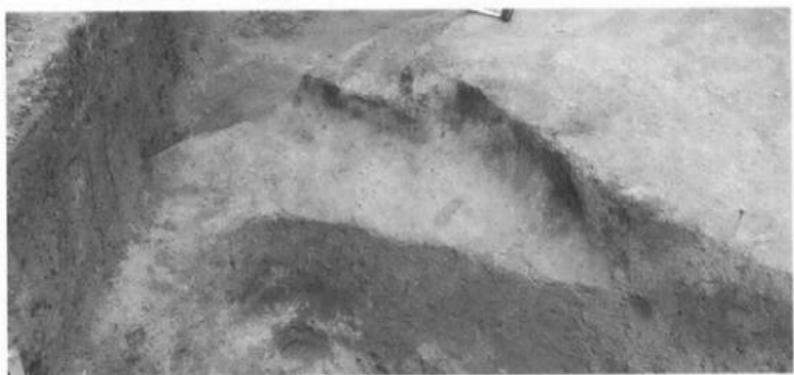
2. H14号住居址掘り方（南方より）



1. H14号住居址カマドF（南方より）



2. H14号住居址カマド掘り方（南方より）



3. H15号住居址（北方より）



4. H16号住居址（南方より）



1. H17号住居址（南方より）



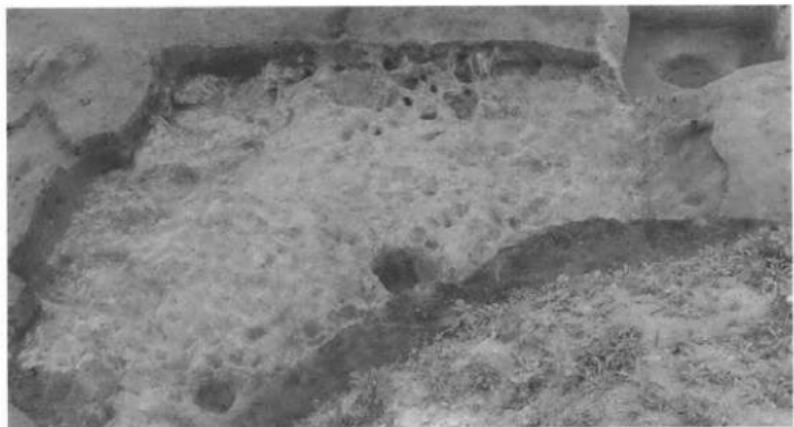
2. H17号住居址掘り方（北方より）



3. H17号住居址カマド（南方より）



1. H18号住居址（南方より）



2. H18号住居址掘り方（南方より）



3. H18号住居址カマド掘り方（南方より）



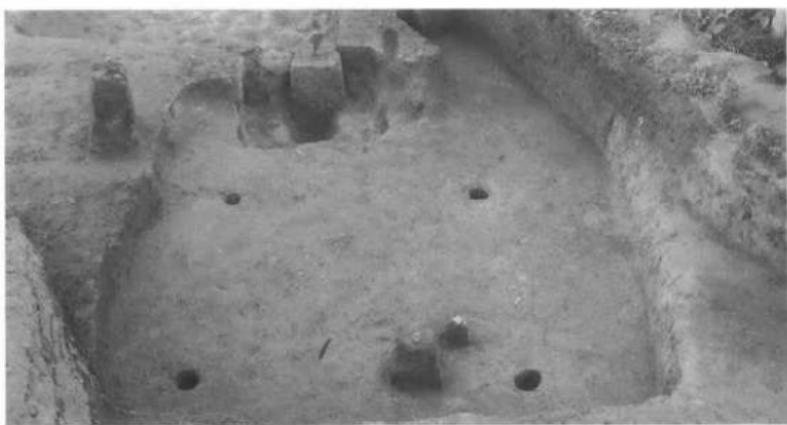
1. H19号住居址（南方より）



2. H20号住居址（東方より）



3. H20号住居址掘り方（南方より）



1. H21号住居址（南方より）



2. H21号住居址掘り方（西方より）



3. H21号住居址カマド（南方より）



4. H21号住居址カマド掘り方（南方より）



1. H22号住居址（南方より）



2. H22号住居址掘り方（南方より）



3. H22号住居址カマド掘り方（南方より）



1. H23号住居址（東方より）



2. H23号住居址振り方（北方より）



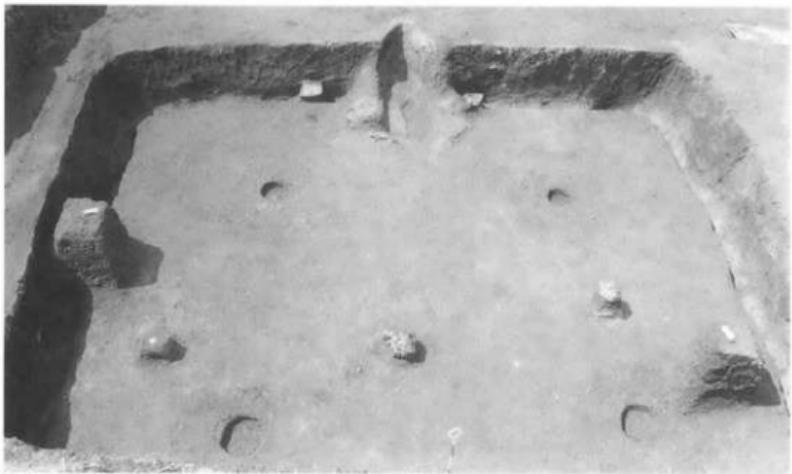
3. H24号住居址（東方より）



1. H24号住居址掘り方（北方より）



2. H24号住居址カマド（南方より）



3. H25号住居址（南方より）



1. H25号住居址掘り方（西方より）



2. H25号住居址カマド（南方より）



3. H26号住居址（西方より）



1. H26号住居址（南方より）



2. H26号住居址掘り方（西方より）



3. H26号住居址カマフ（南方より）



1. H27号住居址（南方より）



2. H27号住居址カマド（南方より）



3. H28号住居址（北方より）



4. H28号住居址掘り方（北方より）



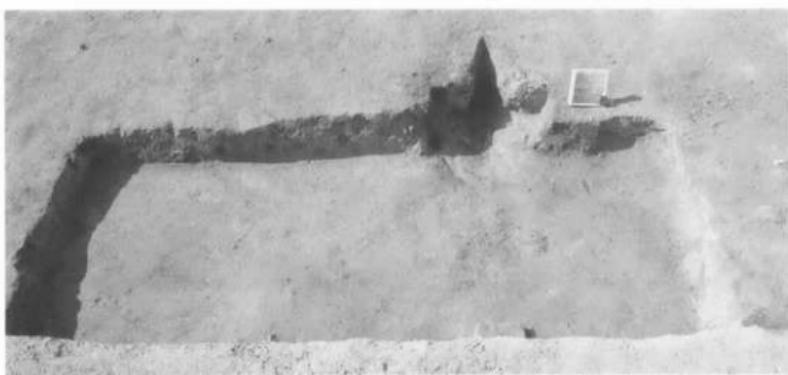
1. H29号住居址（北方より）



2. H29号住居址掘り方（北方より）



3. H29号住居址カマド（南方より）



1. H30号住居址（南方より）



2. H30号住居址掘り方（南方より）



3. H30号住居址カマF（南方より）



1. H31号住居址（南方より）



2. H31号住居址掘り方（東方より）



3. H31号住居址カマド（南方より）



4. H32号住居址（南方より）



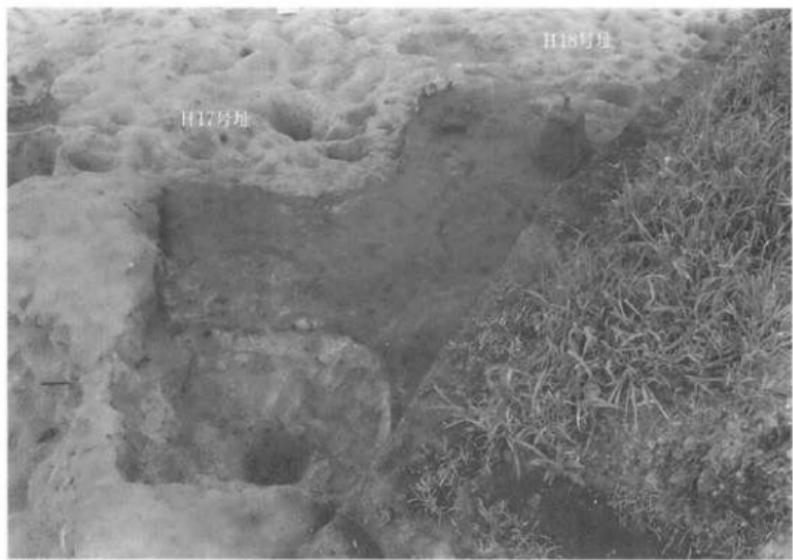
1. H33号住居址（南方より）



2. H33号住居址掘り方（南方より）



3. H33号住居址カマド（南方より）



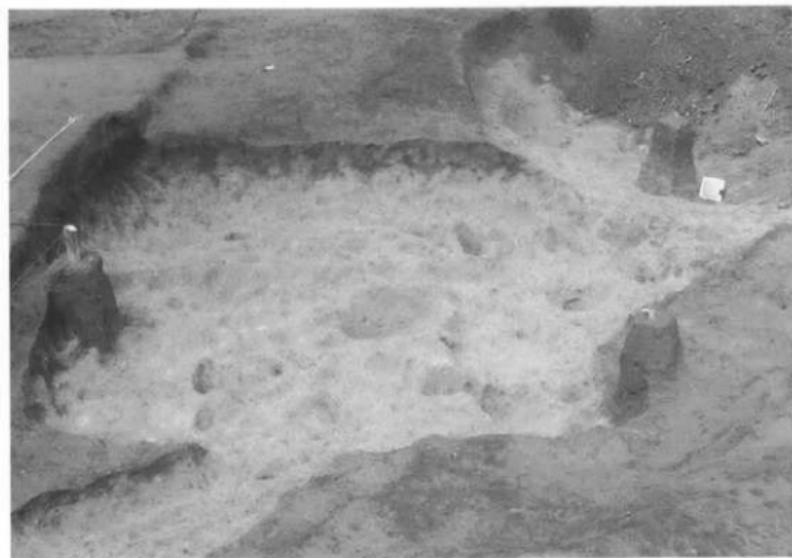
1. H34号住居址（南方より）



2. H34号住居址掘り方（南方より）



1. H35号住居址（北方より）



2. H35号住居址掘り方（東方より）



1. F 1号掘立柱建物址（北方より）



2. F 2号掘立柱建物址（東方より）



1. F 3号掘立柱建物址（北方より）



2. F 3号掘立柱建物址（北方より）



1. D 1号土坑遺物出土状況（西方より）



2. D 1号土坑（北方より）



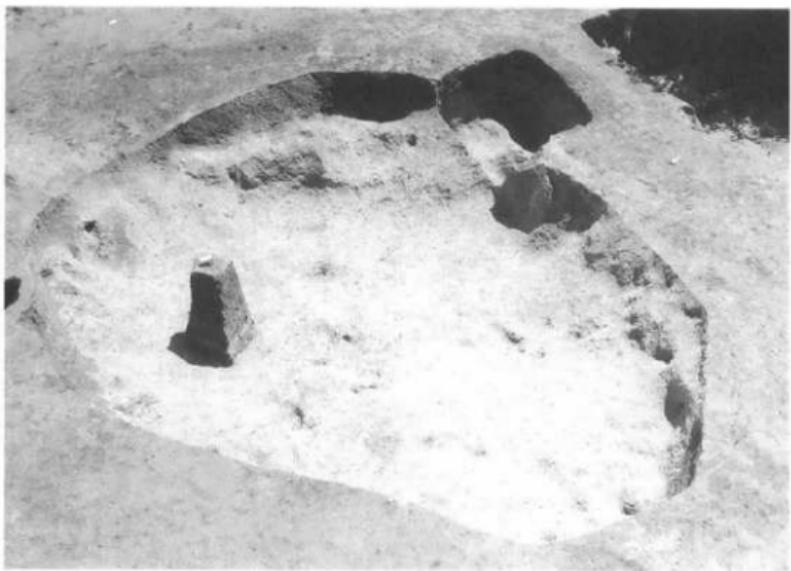
1. M 1号溝址（東方より）



2. M 2・3号溝址（北方より）



1. M 2・3号溝址（東方より）



2. T 1号特殊遺構（北方より）



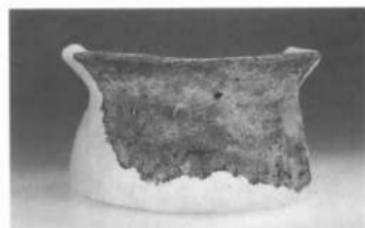
H1 (7-6)



H1 (7-8)



H1 (7-7)



H1 (7-9)



H1 (7-10)

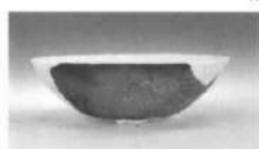
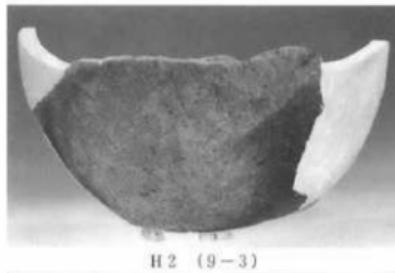


H1 (7-3)



H1 (7-2)

十四版圖





H 4 (14-21)



H 4 (14-10)



H 4 (14-7)



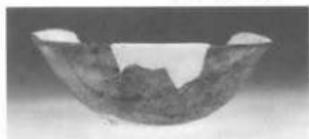
H 4 (13-4)



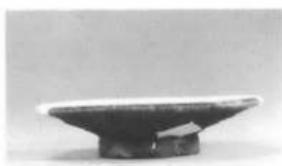
H 4 (14-16)



H 4 (14-17)



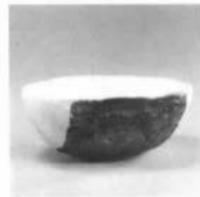
H 4 (14-18)



H 4 (14-19)



H 5 (17-2)



H 5 (17-1)



H 4 (15-24)



H 6 (19-6)



H 6 (19-1)



H 6 (19-2)



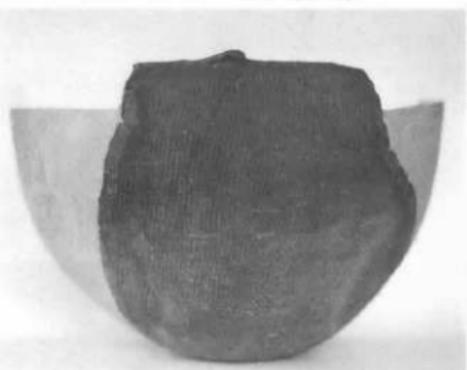
H 6 (19-5)



H 6 (19-4)



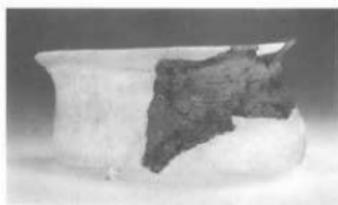
H 6 (19-7)



H 8 (23-1)



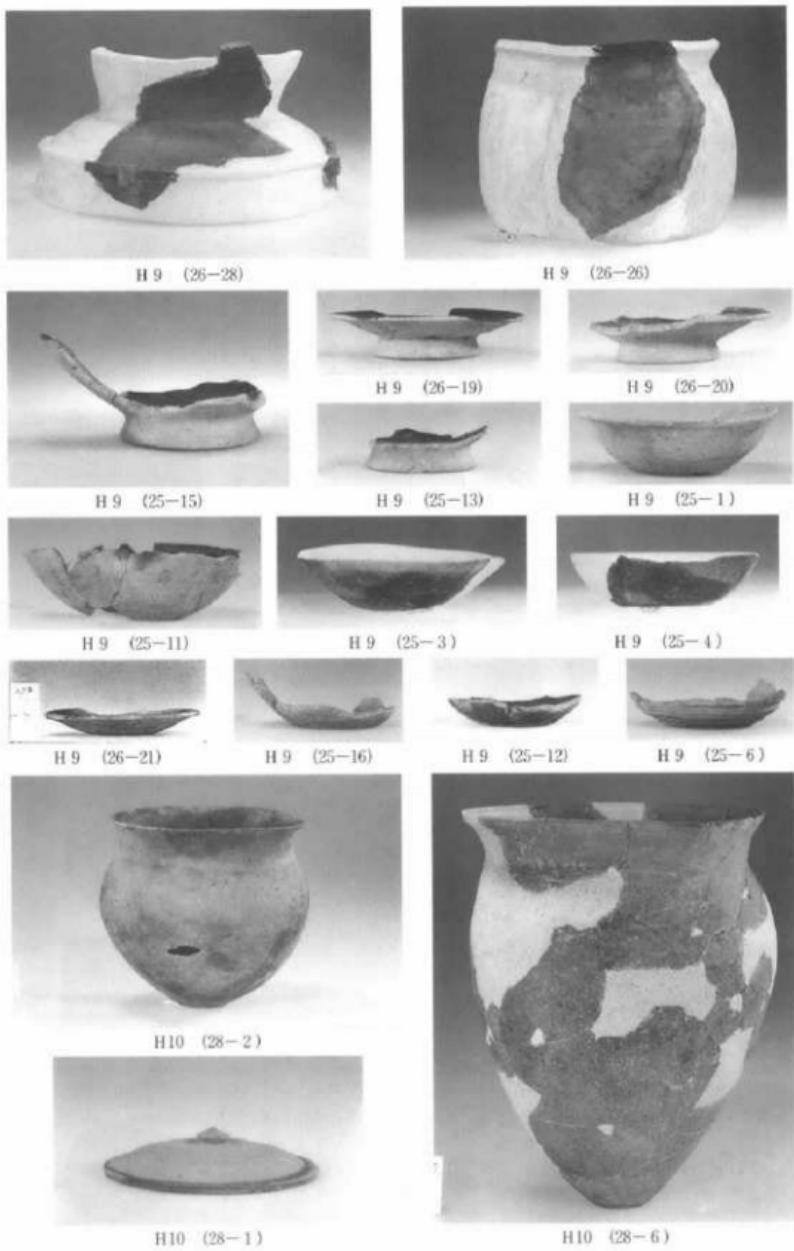
H 9 (26-29)



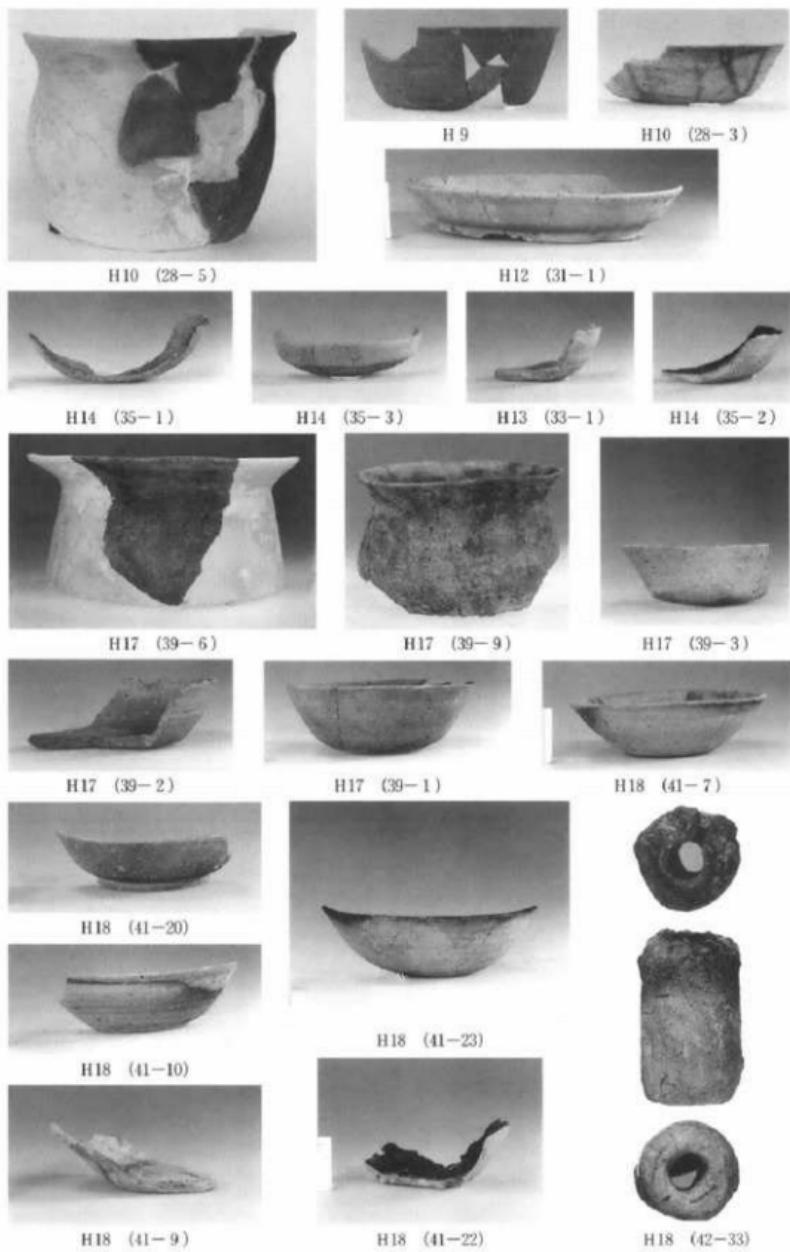
H 9 (26-25)

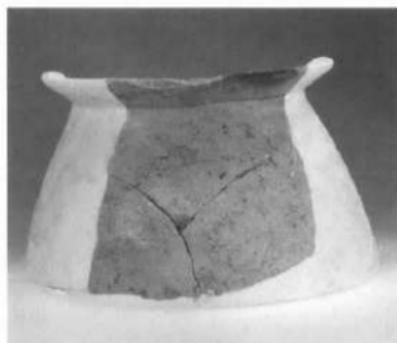


H 9 (26-27)

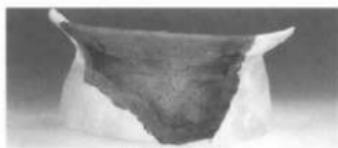


圖版四十四

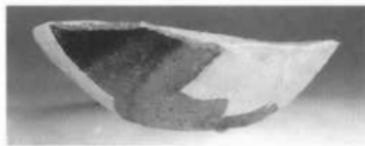




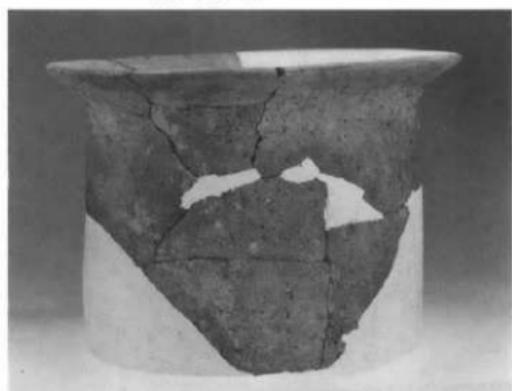
H19 (44-2)



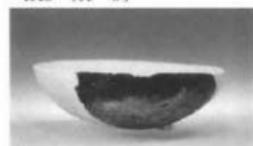
H19 (44-4)



H19 (44-3)



H20 (46-5)



H19 (44-1)



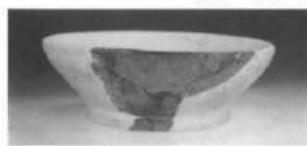
H20 (46-2)



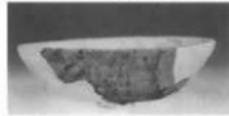
H20 (46-4)



H20 (46-3)



H21 (48-4)



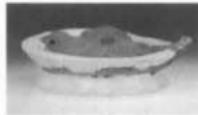
H21 (48-2)



H21 (48-9)



H21 (48-1)



H21 (48-10)



H22 (50-1)

圖版四十六



H23 (52-2)



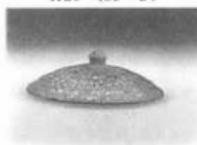
H23 (52-1)



H24 (54-1)



H24 (54-2)



H24 (54-3)



H25 (57-3)



H25 (57-1)



H26 (61-3)



H26 (61-19)



H26 (61-10)



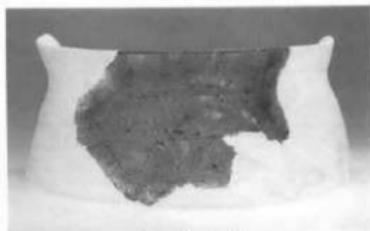
H26 (61-11)



H26 (61-18)



H26 (61-17)



H27 (63-12)



H27 (63-1)



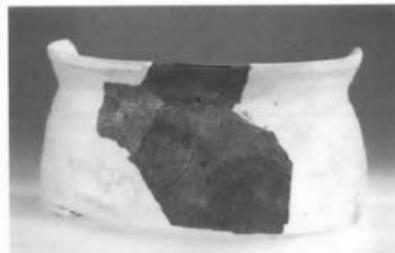
H27 (63-2)



H28 (66-7)



H29 (68-1)



H29 (68-8)



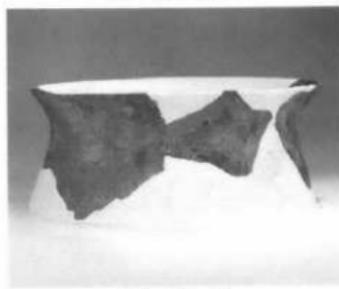
H29 (68-9)



H29 (68-4)

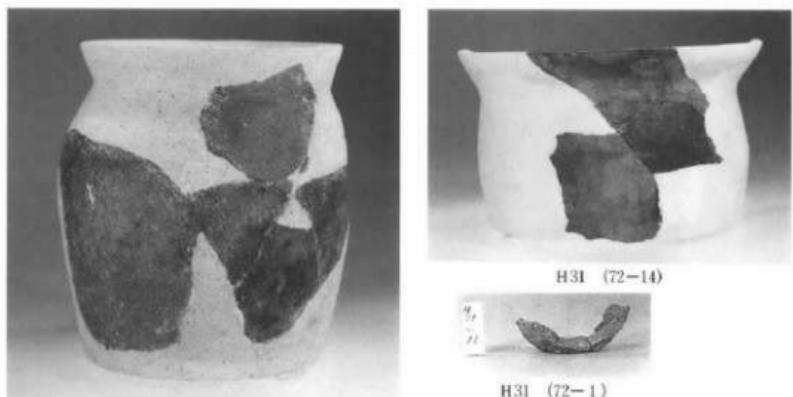


H29 (68-3)



H29 (68-2)

H31 (72-6)



H31 (72-11)

H31 (72-14)



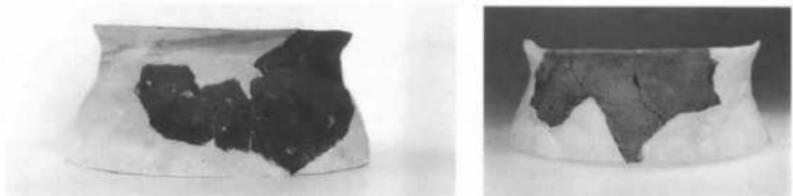
H31 (72-1)



H31 (72-4)

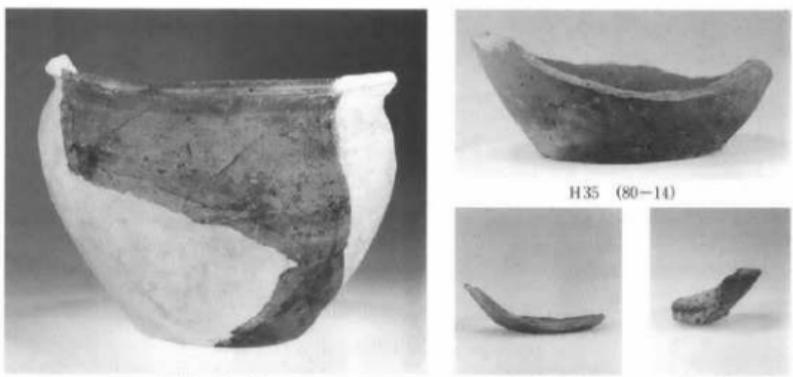
H31 (72-2)

H31 (72-9)



H35 (80-16)

H35 (80-17)



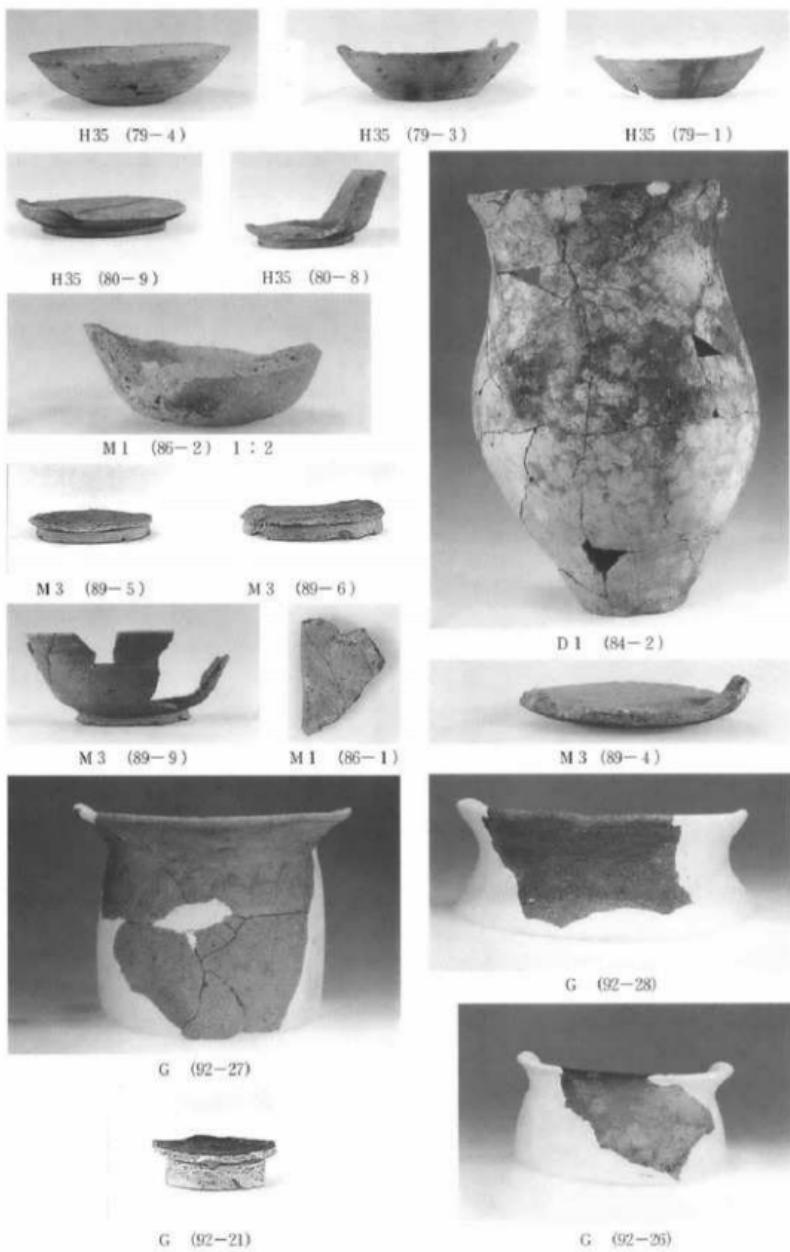
H35 (80-12)

H35 (79-2)

H35 (80-7)

H35 (80-14)

図版四十九







F 3 (83-1)



H13 (33-4)



H25 (57-6)



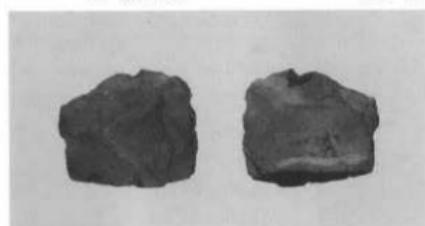
G (92-31)



H 4 (15-27)



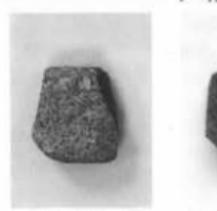
H14 (35-7)



T 打製石斧



H23 (52-5)



H23 (52-5)



H24 (54-7)



H 2 (9-4)



H 3 (11-5)



H 4 (15-26)



H12 (31-4)



H12 (31-3)



H13 石鍤

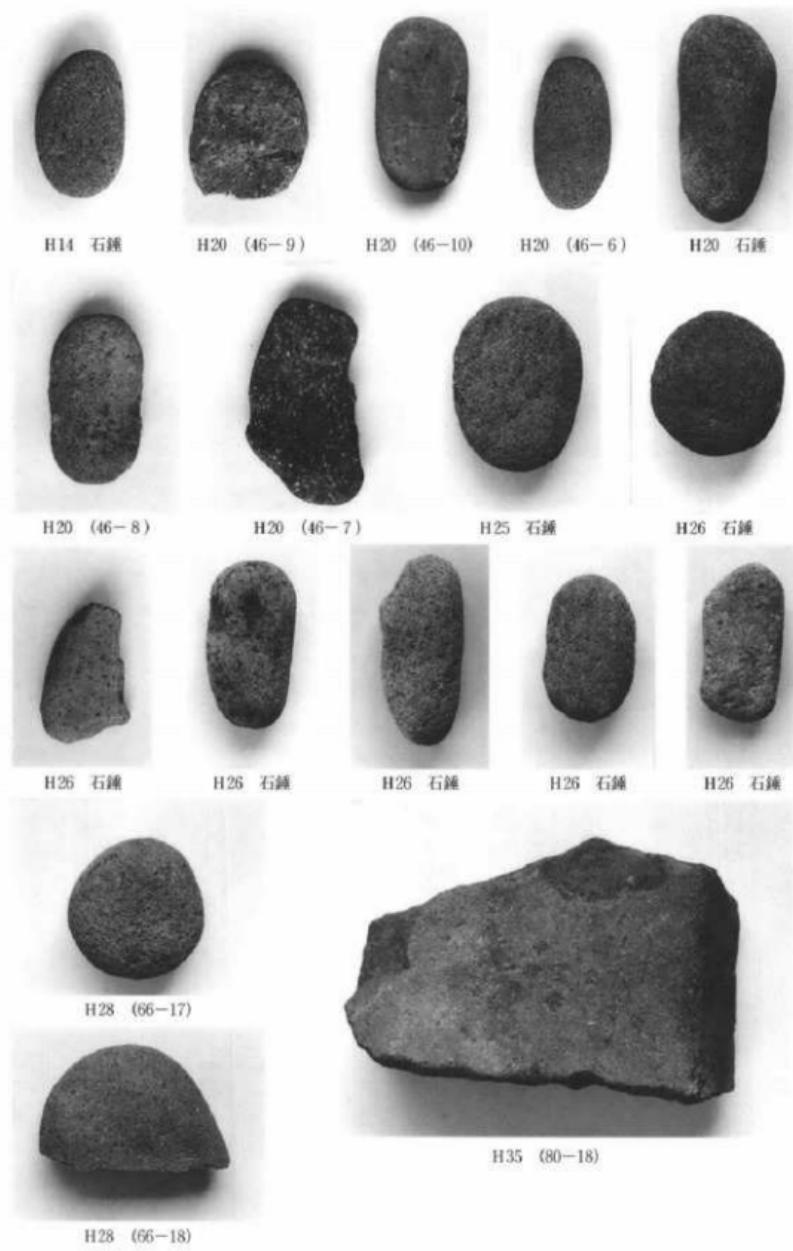


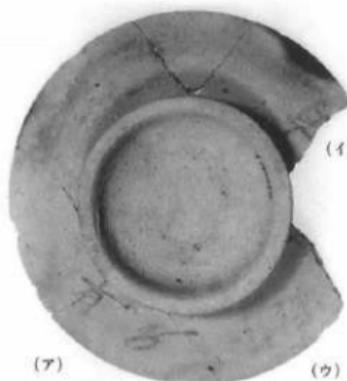
H13 石鍤



H13 石鍤

図版五十二





(イ)

墨書き土器（高台付环）

(ア)「有子」

(イ)「有」

(ウ)「絵画」

H 9号住居址



(ア)

(ウ)

ウ(ア)
「有子」
「家の絵？」

H 9号住居址



墨書き土器
〔大井〕H 4号址

図版五十四



墨書「子」土師器坏 H 4



墨書「六」須恵器坏 H-9



墨書文字不明 土師器坏 Z



墨書文字不明 土師器坏 H-8



墨書文字不明 土師器坏 G か-3



刻書「大井」土師器坏 G う-6



ヘラ記号「十」須恵器坏 H 9

佐久市埋蔵文化財調査報告書

第1集	【金井城跡】	第38集	【南下中原遺跡II】
第2集	【市内遺跡発掘調査報告書1990】	第40集	【寺畠遺跡】
第3集	【石財窯跡群】	第41集	【曾根新城遺跡I・II・III・IV・V 上久保田向遺跡I・II・V・VI・VII 西曾根遺跡II・III】
第4集	【大ふけ】	第42集	【寄山】
第5集	【立科F遺跡】	第43集	【梅現平遺跡・池端遺跡】
第6集	【上曾根遺跡】	第44集	【寺添遺跡】
第7集	【三貫頸遺跡】	第45集	【市内遺跡発掘調査報告書1994】
第8集	【淮の下遺跡】	第46集	【潤り遺跡】
第9集	【国道141号関係遺跡】	第47集	【上芝宮遺跡V】
第10集	【豊原遺跡II】	第48集	【池端城跡】
第11集	【赤座垣外遺跡】	第49集	【根ヶ井芝宮遺跡】
第12集	【若宮遺跡II】	第50集	【藤塚遺跡III】
第13集	【上高山遺跡II】	第51集	【寺中遺跡・中宿敷遺跡II】
第14集	【柴毛坂遺跡】	第52集	【坪の内遺跡】
第15集	【野島久保遺跡】	第53集	【円正坊遺跡II】
第16集	【石並城跡】	第54集	【市内遺跡発掘調査報告書1995】
第17集	【市内遺跡発掘調査報告書1991】 (1月～3月)	第55集	【香屋前遺跡I・II】
第18集	【西曾根遺跡】	第56集	【豊原遺跡X】
第19集	【上芝宮遺跡】	第57集	【高師町遺跡II】
第20集	【下脇端遺跡III】	第58集	【下穴虫遺跡I】
第21集	【金井城跡III】	第59集	【市内遺跡発掘調査報告書1996】
第22集	【市内遺跡発掘調査報告書1991】	第60集	【谷根城遺跡II】
第23集	【南上中原・南下中原遺跡】	第61集	【削地遺跡】
第24集	【上聖淵遺跡】	第62集	【野島久保遺跡II】
第25集	【上久保田向IV】	第63集	【西大久保遺跡III】
第26集	【藤塚古墳群・藤塚II】	第64集	【梨の木遺跡IV】
第27集	【上久保田向V】	第65集	【中宿遺跡】
第28集	【曾根新城V】	第66集	【中西ノ久保遺跡II・仲田遺跡・寺畠遺跡II】
第29集	【筒井遺跡B・山法師遺跡B】	第67集	【供養塚遺跡】
第30集	【市内遺跡発掘調査報告書1992】	第68集	【前郷部遺跡】
第31集	【山法師遺跡A・簡村遺跡A】	第69集	【高山遺跡I・II】
第32集	【東ノ割】	第70集	【觀音堂遺跡】
第33集	【豊原遺跡VI・下曾根遺跡I 前蘇部遺跡2】	第71集	【市内遺跡発掘調査報告書1997】
第34集	【西・本柳遺跡1】	第72集	【市道遺跡II】
第35集	【市内遺跡発掘調査報告書1993】	第73集	【西一本柳Ⅲ・IV】
第36集	【蛇塚B遺跡III】	第74集	【五里田遺跡】
第37集	【西一本柳遺跡II・中西ノ久保遺跡II】	第75集	【八風山遺跡群・五斗代遺跡群】

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第76集

周防畠遺跡群 南近津遺跡

長野県佐久市長土呂周防畠遺跡群南近津遺跡調査報告書

1999年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市大字中込3056

埋蔵文化財課

〒385-0006 長野県佐久市大字志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 佐久印刷所

